

PRÜFUNGSORDNUNGEN

*Leitfaden der Fédération Cynologique Internationale (FCI)
des Verbandes für das Deutsche Hundewesen (VDH)
für internationale Gebrauchshundprüfungen
und internationale Fährtenhundprüfungen*



Gültig ab 1. Januar 2012 (Neufassung)

Verein für Deutsche Schäferhunde (SV) e.V.

Mitglied des VDH, der FCI und der WUSV

国際作業犬試験規定 (IPO)

2012年1月1日より有効 (新規定)

発行：ドイツシェパード犬協会 (SV)

翻訳《独⇒日》益田晴夫

目次

3	…	前文
4 - 19	…	全般規則
4	…	一般的な省略記号
4	…	有効力
4	…	一般規則
5	…	試験組織／試験監督
5	…	訓練審査員
6	…	試験出場者
7	…	首輪の義務／リードの携帯
7	…	病気／負傷による中止
8	…	口輪装着
8	…	出場規定
8	…	性格テスト
9	…	評価
10	…	試験失格
10	…	補助行為
11	…	評価方法
11	…	訓練タイトル
11	…	訓練手帳
11	…	賠償責任
12	…	予防接種
12	…	試験開催日
12	…	試験実施シーズン
12	…	試験監視員
13 - 16	…	防衛ヘルパー規定
17	…	“TSB” 評価（全試験段階の防衛に適用）
17	…	特別規定
17	…	世界選手権
17	…	表彰式、賞品授与
18	…	懲戒法
18	…	性格試験
20 - 25	…	BH／VT（同伴犬試験と行動テスト）＋専門知識テスト
26	…	APr 1～3（IPO-B+C 1～3）
26	…	FPr 1～3（追求単課目 1～3）
26	…	UPr 1～3（服従単課目 1～3）
27	…	SPr 1～3（防衛単課目 1～3）
28 - 35	…	IPO-VO（国際作業犬基礎試験）
36 - 54	…	IPO 1（国際作業犬試験 1）
55 - 75	…	IPO 2（国際作業犬試験 2）
76 - 98	…	IPO 3（国際作業犬試験 3）
99-102	…	追求コーナーの印跡、脚側行進実施要領、用具と設営

前 文

1万2千年以上前から犬は人間の仲間です。犬は家畜化によって、人との緊密な社会関係が築かれました。私たちは生活におけるいくつかの分野で犬に依存しています。それゆえに、我々は犬の幸福のために責任を持たなければなりません。

実際のトレーニングが行われる際には、犬の身体的健康と精神的健康が最優先で守られなければなりません。動物に対する第一の原則として、非暴力的に接しなければなりません。さらに、十分な食べ物と水の供給。そして、健康維持のための予防接種や定期健康診断。定期的なふれあいと運動。これらはすべて我々の義務です。

歴史の過程において、犬は人間を助けるさまざまな仕事を行ってきました。現代社会ではテクノロジーの進歩によって、彼らの任務の多くはもう必要とされません。したがって、失われた役割の代わりとして、犬の性質に応じた十分な運動や活動を、人との強いふれあい関係を通して与えることは、現代の犬の所有者の義務です。その観点から、同伴犬試験（BH/VT）、各種作業犬試験（FPr1-3, UPr1-3, SPr1-3, IPO1-3, etc）、追求犬試験（FH）、物品搜索試験（Stöberprüfung）は行われます。犬の才能や性能素質に相応しい試験を選択しなければなりません。適切な運動とともに、その犬の使役活動に対する学習能力と運動能力を見極めなければなりません。様々な形態のドッグスポーツは、これらの目的のためにとっても適しています。現代社会においても要求される労働犬作出の役目も担っています。

人が犬を訓練したり、ともにドッグスポーツを行うというのは、信頼関係の中で教育を行うということです。そして、人と犬との間に調和を構築することです。トレーニングとは、人が犬に学習情報を与えることですが、それぞれの犬が理解できるような方法でなければなりません。人と犬の息のあった調和は、すべてのドッグスポーツにおける動きの基礎です。調和構築のために、犬の考えと才能を理解しなければなりません。

人は倫理的義務として犬を育て、十分な教育をしなければなりません。それには、行動学と専門的な犬学の知識を身につけなければなりません。実証的な訓練方法やトレーニングで効果を得るべきで、決して暴力的に行ってははいけません。そして、動物愛護に反する教育やトレーニングが行われてはいけません（動物保護法を参照）。犬がスポーツに参加する際は、才能や技量、気構えが整っていなければなりません。運動能力を高めるための薬物投与がなされた犬や、そのことに関係する人物の参加は認められません。そのような疑いがある場合には、その犬について調査が行われます。倫理に反する犬の性能向上願望は間違っています。犬に対する責務の自覚を持つ愛犬家と健康な犬のみが、試験、競技会、そしてトレーニングに参加することができます。

一般的な省略記号

FCI	…	Federation Cynologique International	…	国際畜犬連盟
IPO	…	Internationale Prüfungsordnung	…	国際試験規定
LAO	…	Landesorganisation	…	各国の団体
PO	…	Prüfungsordnung	…	試験規定
AKZ	…	Ausbildungskenzeichen	…	訓練資格
LR	…	Leistungsrichter	…	訓練審査員
RA	…	Richteranweisung	…	審査員の指示
PL	…	Prüfungsleiter	…	試験監督
HL	…	Helfer	…	防衛ヘルパー
HF	…	Hundeführer	…	ハンドラー（指導手）
FL	…	Fährtenleger	…	追求印跡者
HZ	…	Hörzeichen	…	命令
GST	…	Grundstellung	…	基本姿勢

備考：原文に記載されているドイツ語の命令は、翻訳の際に各国の団体が一般的に使用されている命令に置き換えられている。

この試験規定の発行により、従来の規定の有効力はすべて消失する。
翻訳によって意味が疑わしい場合はドイツ語の原文を基準とする。

有効力

本試験規定は、FCI作業犬委員会により作成され、2011年4月13日、ローマでのFCI理事会において承認され締結した。この手引きは“2012年1月1日、”から有効となり、すべて旧規定と交換される。

本試験規定は、委員会においてドイツ語で検討されて作成された。他の言語に訳して解釈不能な部分があったときはドイツ語の原版が標準となる。

本試験規定は、全FCI加盟国が開催する国際試験クラス（試験・競技会）の基準規定となる。

一般規則

試験・競技会の開催には二つの目的がある。犬の使用目的に対する適正判断。そして繁殖において、次世代に受け継がれるべき、作業能力の基本である健康さと、性能の維持向上。つまり、試験・競技会は犬の健康維持とともに繁殖価値も判断する。

FCIに加盟している各国の団体はIPOの実施を推奨し、国際競技会はIPOで開催されなければならない。試験・競技会において、実行組織と参加者はスポーツマンシップにのっとりて実行、行動をしなければならない。すべての関係者は規定を厳守しなければならない。試験内容は全出場者に対して平等でなければならない。試験の開催は会員に場所と日時を公示する。

試験・競技会は、受験段階（IPO1、2、3）と、各課目（追求、服従、防衛）のレベルが一致しなければならない。各試験段階で合格点を獲得したら訓練資格が与えられる。すべてのFCI加盟国は、その訓練資格を認めなければならない。

スティックテスト（ソフトスティックによる犬への殴打）を法的に禁止している国では、防衛課題における、スティックテストを行わずにIPOを実施することができる。

試験組織／試験監督

試験開催組織は試験監督を選出する。試験監督は試験に必要なすべての事前準備を行い、試験全体を管理する。試験監督は試験規定に基づき進行を管理するとともに、試験中は常に審査員の要求に対応できるように待機する。

試験監督は試験を受験できない。他の役割を兼任してはいけない。

試験監督の責務：

- ≫ 試験開催に必要なすべての許可申請。
- ≫ 開催日の申請と確保。
- ≫ 試験規定に相応しい全試験段階のための追求場所の確保。
- ≫ 試験が公正に行われるための道具や設備の準備。防衛ヘルパーのための着衣の準備。
- ≫ 追求場所の所有者との協定および狩猟実行許可申請。
- ≫ 全種目、全段階の審査表および評価一覧表（試験報告書）の準備。
- ≫ 専門知識を備えた防衛ヘルパー、追求印跡者、群衆などの手配。
- ≫ 受験犬の訓練手帳、血統書、ワクチン接種証明書。必要であれば責任保険の準備。

試験監督は試験日の最低3日前に、開催地、開始時間、会場案内図、試験種目と段階、受験頭数を審査員に知らせる。この伝達がなかった場合、審査員は審査を拒否する権利を持っている。試験の開始前に開催許可証を審査員に提示する。

訓練審査員（この欄以外は審査員と翻訳）

試験主催者は、協会にIPO審査を認められている訓練審査員を直接要請するか、または各国の団体を通して要請する。各国の団体の構成団体はこの規則を遵守する。FCI世界選手権での訓練審査員はFCI作業犬委員会が決定する。訓練審査員を何人招聘するかは主催者が決定するが、一人の審査員が1日で審査できるのは36セクションを上限とする（世界選手権では、この上限規定は適用されない）。

FPr 1、FPr 2、FPr 3	追求単課目	1セクション
UPr 1、UPr 2、UPr 3	服従単課目	1セクション
SPr 1、SPr 2、SPr 3	防衛単課目	1セクション
StPr 1、StPr 2、StPr 3	物品搜索試験	1セクション
BH/VT	同伴犬試験および行動テスト	2セクション
IPO-VO	国際作業犬基礎試験	3セクション
IPO-ZTP	国際作業犬繁殖適性試験	3セクション
APr 1、APr 2、APr 3	服従＋防衛	2セクション
IPO 1、IPO 2、IPO 3	国際作業犬試験	3セクション
FH 1、FH 2	追求犬試験	3セクション
IPO-FH	国際追求犬試験	3セクション

例：IPO 1（3頭）＋IPO 3（9頭）＝36セクション

各国の団体がFCIに指定を受けて開催するイベントに関しては特別規定を設定できる。

訓練審査員は所有権のある犬、飼育犬、自己管理犬の審査はできない。共同生活をしてい

る者が所有権を持つ犬、飼育犬、管理する犬の審査はできない。指導手が共同生活者である場合も審査ができない。訓練審査員は、自らが審査を務める試験に出場することはできない。

訓練審査員は作業中の犬に影響を与えたり妨害するような行動をしてはならない。訓練審査員は国際試験規定を厳守して試験を進行する責任がある。指示に従わなかったり、国際試験規定に反する行動を指導手または犬が行った場合、訓練審査員は試験を中止する権限を持っている。

スポーツマンらしくない行為、犬の意欲付けのための物品所持、国際試験規定違反、動物保護に関する違反および道徳違反の行為を発見したとき、訓練審査員は出場者に試験失格を宣告することができる。試験の中止／失格の理由は必ず訓練手帳に明記される。試験失格となった場合、既得の点数はすべて剥奪される。

訓練審査員による審査結果は絶対的である。それに対する異議申し立てはできない。この決まりに反した者は、そのドッグスポーツ会場から退場させられる。場合によっては協会処分もある。審査決定に影響を及ぼすことがない、訓練審査員の規則違反に対する異議申し立ては可能である。その場合、異議申立人と証人（最低一人）のサインがなされた書面を、試験・競技会の終了後8日以内に試験監督を通して、主催協会または各国の団体に提出する。異議申立書が受理されたからといって異議が認められたわけではない。各国の団体は異議を審議する。または自組織内の作業犬委員会に最終決議を委ねてもよい。

試験出場者

出場者は申込みの締切日を厳守する。出場申込みがなされた時点で出場料金の支払いは義務となる。どのような理由でも出場を取り止める場合は試験監督に報告する。出場者は開催地の獣医や法律が定める動物保護法を厳守する。出場者は審査員や試験監督の指示に従う。出場者と犬はスポーツマンシップに則り出場する。特定のセクションの成績に係わらず、出場段階のすべてのセクションを終了しなければならない。試験は成績の公表（表彰式）および訓練手帳の返還によって終了する。

審査員は、たとえ出場者が続行を希望しても、負傷犬や作業能力不十分な犬を試験中止とすることができる。出場者が自ら試験を中止した場合は“中止により Mangelhaft／不可、”と訓練手帳に明記する。犬の負傷および獣医の診断書が提示された中止の場合は“負傷により中止、”と訓練手帳に明記する。スポーツマンらしくない行為、犬の意欲付けのための物品所持、国際試験規定違反、動物保護に関する違反および道徳違反の行為を発見したとき、審査員は出場者に試験失格を宣告することができる。試験の中止／失格の理由は必ず訓練手帳に明記される。試験失格となった場合、既得の点数はすべて剥奪される。

犬のサイズに合ったチェーン首輪（一列の小判型）を締めすぎずに装着する。試験中はそれ以外の、例えば革製首輪、ダニ取り首輪、スパイクカラー等の装着は許されない。

この規則は同伴犬試験および行動テスト（BH/V T）では適用されない。チェーンタイプ以外の首輪、あるいはハーネスの装着が許される（審査員が認めたもの）。

試験中、出場者は必ずリードを携帯する。リードは犬に見えないようにポケットに入れる、または左肩から右腰にたすき掛けにする。試験は性格テストから開始され、表彰式終了まで審査される。

IPOで使用する命令は、普通に発声される標準的な短い一単語とする。どのような言語も使用可能であるが、命令と犬の動作は常に一致していなければならない（各セクションにおいて適用）。

国際試験規定に記されている命令は推奨される一例である。同じ実行内容の場合、同じ命令を使用しなければならない。

同じ試験段階に2名以上の出場者がいる場合、出場順はくじ引きで決定する。

試験には最低4名の出場者が必要である。4名未満あるいは単独での受験は認められない。

指導手が身体的な理由で、犬を自身の左側でハンドリングできない場合、犬を自身の右側においてハンドリングすることができる。国際試験規定の「指導手は犬の右側に・・・」という部分を「指導手は犬の左側に・・・」と置き換えることができる。

試験は段階受験でなければならない（IPO 1→2→3）。1つ上の段階を受験するには、その下の段階を合格しなければならない。各試験段階に合格しても、その段階に留まって繰り返し（リピーター）受験することが可能である。原則として合格した段階よりも下のレベルには出場できないが、順位や評価のない非公式の試験であれば別とする。

例外：FPr、UPr、SPr、FH1、FH2、IPO-FH（これらの年齢条件は出場規定を参照）
ただし、BH/V T試験に合格していること。

首輪の義務／リードの携帯

保険の理由にて、指導手は試験中、常にリードを携帯していなければならない（犬からリードを外すという場面でも）。そして犬には常に首輪が装着されていなければならない。したがって審査員は、試験中に指導手がリードを携帯することや、規定の首輪が犬に装着されているかを常に注意する。首輪には、スパイク、爪、あるいはフック等の付属品が付いてはいけい。首輪は首が絞まらないように装着する。ノミ・ダニ取り首輪は試験前に取り外す。

首輪の重さは標準的な重さから逸脱してはならない。審査員が首輪の不適合を見つけた場合、交換を指示する。ただし、それは各セクションの開始前でなければならない。違反を隠すために何らかの細工（スパイクを見えないようにする等）がされた首輪の装着が発覚した場合、審査員は該当指導手を試験失格とする。

訓練手帳への記録：“スポーツマンらしくない行為による失格、
（既得の点数はすべて剥奪される）”

同伴犬試験では“規定のチェーン首輪、ではなく、一般に市販されている首輪またはハーネスを装着して受験することができる。”

追求作業時には首輪に加えて捜索装具やハーネスの装着が許されている。

犬が試験中に負傷または何らかの事由によって課題実行が不可能となった場合、あるいは指導手が抗議をした場合、審査員は試験の終了を宣告する権利がある。

病気／負傷による中止

試験中に犬の病気が申告された場合：

すでに何らかのセクションを終えた後、指導手が犬の病気を申告した場合、獣医師の診察を受ける。獣医師が病気であると証明したなら、試験報告書等には“病気により中止、”と記録される。指導手が獣医師の診察を拒否した場合は“試験中止により Mangelhaft／不可、”と記録される。試験後であっても、4日以内であれば獣医師の証明書を提出することが可能である。4日以内に獣医師の証明書が提出されなかった場合、訓練資格証またはスコアブックに“試験中止により Mangelhaft／不可、”と記録されて指導手に返還される。試験終了後の4日の猶予を辞退した場合、訓練資格証またはスコアブックに“試験中止により Mangelhaft／不可、”と記録されて直ちに指導手に返還される。
記録訂正のための郵送等の費用は指導手が支払う。

備考：審査員が犬の病気や負傷を発見した場合、審査員の判断で試験を中止することができる。犬が高齢により体力不足で試験続行が不可能と判断した場合も、動物愛護の観点から審査員は試験を中止することができる。記録は“負傷により試験中止、”となる。

口輪装着

公共の場で犬を連れ歩く場合、それぞれの国の規則を遵守しなければならない。例えば、口輪装着が必要とされる場所で、BH/V T試験の道路における行動テストが行われる場合、犬に口輪を装着して受験する。

出場規定

犬は試験当日に下記の年齢に達していなければならない。例外は絶対に認められない。受験の前提条件として各国の団体の規定に従いBH/V Tに合格していなければならない。

BH/VT	同伴犬試験および行動テスト	15ヶ月	APr 1-3	服従+防衛 1~3	18ヶ月
IPO-VO	国際作業犬基礎試験	15ヶ月	IPO 1	国際作業犬試験 1	18ヶ月
IPO-ZTP	国際作業犬繁殖適性試験	18ヶ月	IPO 2	国際作業犬試験 2	19ヶ月
FPr 1-3	追求単課目 1~3	15ヶ月	IPO 3	国際作業犬試験 3	20ヶ月
UPr 1-3	服従単課目 1~3	15ヶ月	FH 1	追求犬試験 1	18ヶ月
SPr 1-3	防衛単課目 1~3	18ヶ月	FH 2	追求犬試験 2	18ヶ月
StPr	物品搜索試験	15ヶ月	IPO-FH	国際追求犬試験	20ヶ月

➤ FPr 1~3 ⇒ IPO 1~3 の“追求単課目、”

➤ UPr 1~3 ⇒ IPO 1~3 の“服従単課目、”

➤ SPr 1~3 ⇒ IPO 1~3 の“防衛単課目、”

これらの単課目試験は訓練資格取得の意味を持たない（公式の資格証は発行されない）。

試験には、犬の大きさや犬種、血統に関係なくすべての犬が参加できる。

ただし、受験条件として参加犬はIPOの課題を実行可能でなければならない。

出場者は1日に一試験会場でしか受験できない。1人の出場者が一試験において受験できるのは2頭まで。犬は一試験で1段階しか受験できない。

例外：BH/V T + IPO 1またはBH/V T + FH 1（試験開催日規定を参照）

発情中のメス犬も受験可能であるが他の犬や参加者に接触しないように十分に注意する。そのメス犬の追求は進行予定に従い行う。服従、防衛は他の全受験犬が終了してから最後に行う。明らかに妊娠中、授乳中、または育児期のメス犬は受験することができない。

病犬、感染症の疑いのある犬はすべての試験において参加禁止とする。

性格テスト

性格テストの実施：

試験の一番最初に行われるセクションの前に、審査員は犬の性格（本質）テストを行わなければならない。性格テストは犬の個体識別（例：イレズミ番号、マイクロチップ、その他の確認）等により判断される。審査員は犬の性格に問題があると判断した場合、試験失格としなければならない。マイクロチップによる個体識別の責任は所有者にある。

さらに審査員は試験中も常に、犬の性格（本質）を観察しなければならない。
犬の性格（本質）の欠陥を確認した場合、試験のいかなる時点でも直ちに試験失格とする。
訓練手帳には試験失格となったその理由として、性格（本質）の欠陥と記録する。

性格テストの実施方法：

1. 性格テストは犬に影響を及ぼさない通常の環境の場所で行う。
2. 全出場犬が審査員によって一頭ずつ審査される。
3. 犬には一般的なリードを装着して緩ませて保持する。
4. **犬は審査員に触られることを受け入れなければならない。**
ただし、審査員は犬に刺激的な行為をしてはならない。

性格判定：

a) 肯定的な犬の態度：

犬は審査時に例えば「中立」、「自信がある」、「確かな」、「注意深い」、「活気に溢れている」、「のびのびとした」

b) 合否の瀬戸際にいる犬の態度：

犬は審査時に例えば「少しそわそわしている」、「少し神経過敏、あるいは少し自信がない」... このような犬は試験続行可能であるが、試験中は注意深く観察される。

c) 否定的あるいは本質に欠陥のある犬の態度：（試験失格）

犬は審査時に例えば「臆病」、「不確か」、「怖がる」、「銃声シャイ」、「コントロール不能」、「咬み付く」、「攻撃的」

評価

実行される各課題は評価と点数により審査される。
評価と点数は各課題の出来具合に応じて決定される。

評価／点数一覧表：

	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
5	0～3	3,5	4	4.5	5
10	0～6,5	7～7,5	8～8,5	9～9,5	10
15	0～10	10,5～11,5	12～13	13,5～14	14,5～15
20	0～13,5	14～15,5	16～17,5	18～19	19,5～20
30	0～20,5	21～23,5	24～26,5	27～28,5	29～30
35	0～24	24,5～27,5	28～31	31,5～32,5	33～35
70	0～48,5	49～55,5	56～62,5	63～66	66,5～70
80	0～55,5	56～63,5	64～71,5	72～75,5	76～80
100	0～69,5	70～79,5	80～89,5	90～95,5	96～100

各セクションの点数は小数点以下の数字を使用しないことが望まれる。

各セクション（追求、服従、防衛）の各課題の採点に関しては使用できる。セクションの集計をした際に小数点以下の数字が発生した場合は、そのセクションの全体的な印象に応じて繰り上げるかまたは切り捨てる。

パーセント計算：

評価	授与の場合	マイナスの場合
優 Vorzüglich (フォアツュークリット)	96%以上	-4%以下
特良 Sehr Gut (ゼアグート)	90%~95%	-5%~-10%
良 Gut (グート)	80%~89%	-11%~-20%
可 Befriedigend (ベフリデーグント)	70%~79%	-21%~-30%
不可 Mangelhaft (マンゲルハフト)	70%未満	-31%~-100%

試験失格

試験中に離れた犬が、指導手による三度の呼び戻しで指導手の所に、または試験会場に戻ってこなかった場合は「試験失格」となる。

試験失格となったその犬の既得の点数はすべて剥奪される。
訓練手帳にも評価や点数は記入されない。

審査員が犬の本質に欠陥を発見した場合、あるいは指導手のスポーツマンらしくない振る舞い（例：飲酒、犬の意欲付けのための物品あるいはエサを所持していた）、国際試験規定違反、動物保護に関する違反および道徳違反があった場合、試験は中止されチーム（指導手と犬）は「試験失格」となる。

犬がコントロール不能 例：「側面護送、背面護送の場面で、離れた犬が指導手のもとに三度の命令で戻ってこない」例：「防衛で犬が防衛片袖を放さない」例：「防衛中に犬がヘルパーの防衛片袖以外の部分を咬んだ」このような場合も試験は中止されチーム（指導手と犬）は「試験失格」となる。

行動・態度	結果・記録
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 指導手のスポーツマンらしくない行為 例：犬の意欲付けのための物品あるいはエサを所持していた ➤ 違反首輪の使用の疑い 例：見えないように細工されたスパイクやゴム製の首輪など ➤ 国際試験規定違反、動物愛護や道徳違反 競技会場の全エリアにおいて適用 	<p>「試験失格、 既得の点数はすべて剥奪 評価なし 審査講評なし！</p>
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 性格テスト不合格（適正な性格欠如のため） 	
<ul style="list-style-type: none"> ➤ 離れた犬が指導手のもとに、あるいは試験会場に三度の命令でも戻ってこない 	

補助行為

指導手が犬に対して補助行為を行った場合、それらは見分けられて評価が下がる。
国際試験規定で定められた「補助が許される場面（課題）」に関しては問題ない。

許される補助の例：(IPO-V) 往路飛越の際、指導手は命令と同時に2歩動いて補助できる。

評価方法

試験で「合格」となるには各セクション「追求」、「服従」、「防衛」で、各最低70%以上の得点を獲得しなければならない。

	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
100	0~69	70~79	80~89	90~95	96~100
300	0~209	210~239	240~269	270~285	286~300
200 (APr)	0~139	140~159	160~179	180~191	192~200

訓練タイトル

「インターナショナルワーキングチャンピオン」(CIT)のタイトルは指導手が所属する各国の団体に申請することによってFCIが認定する。

CACIT、およびリザーブCACITが授与される競技会は、FCIの認可を得た最上クラス(IPO3)でなければならない。CACITが開催される場合、FCIに加盟するすべての各国の団体を招待しなければならない。

最低2名の審査員を招聘しなければならない。その内の最低1名は開催国以外のFCIに加盟する団体の審査員でなければならない。審査員の申請によりCACITは授与される。CACITまたはリザーブCACITが授与されるには以下の条件が必要となる。

- » 展覧会において、最低「SEHR GUT」の評価を得る。
- » CACITは順位に対して授与されるものではない。
当該試験(競技会)にて、最低「SEHR GUT」の評価を得なければならない。
- » FCIの定める犬種グループ1、2および3に属しており、
作業試験「作業犬および追求犬」の対象となる犬種。

「ナショナルワーキングチャンピオン」規定は各国の団体が設定することができる。

訓練手帳

試験・競技に出場する犬には訓練手帳が必要である。訓練手帳は指導手の所属する団体が規定に従って発給する。試験を受験する場合は必ず提出しなければならない。試験の結果と必要事項がすべて記入され、審査員と試験監督が記入事項を確認した後に署名を行う。

2012年より以下の記入が必須：

「有効な訓練手帳番号」、「犬の名前と種類」、「個体識別情報(イレズミ番号またはマイクロチップ番号)」、「犬の所有者の氏名と住所と会員番号」、「犬の指導手の氏名と会員番号(所有者と指導手が異なる場合)」、「セクションA(追求)」、「セクションB(服従)」、「セクションC(防衛)」、「合計点」、「評価」、「TSB評価」、「審査員の氏名と署名」

賠償責任

犬が引き起こした対人傷害、対物損害の賠償責任はすべて犬の所有者にある。従って犬の所有者の保険加入は義務である。試験中においても、発生したことの責任は指導手(所有者)にある。試験に参加するということは、たとえ審査員または主催者の指示に従った結果の事故発生があっても、責任は指導手にあるということを承知していると見なす。

予防接種

予防接種証明書を試験開始前に審査員または試験監督に提示しなければならない。

試験開催日

a) 土曜日、日曜日、祝日

試験日は通常、週末と法律で定められた祝日とする。BH/V T試験に関しても「試験開催日」にのみ受験できる。

以下のパターンは可能：

2日間開催される試験（金曜日+土曜日、あるいは土曜日+日曜日など）においては、BH/V T+I P O 1またはF H 1を、各国の団体が認めている団体において、間隔を開けずに連続して受験することができる。

例：開催が1日の試験で BH/VT + I P O 1 の2つを受験 ⇒ **できない**

：2日間の試験開催だが、どちらか1日で BH/VT + I P O 1 の2つを受験 ⇒ **できない**

：土曜に BH/VT 受験合格、翌日曜に同じ試験会場で I P O 1 or F H 1 を受験 ⇒ **OK**

：土曜に BH/VT 受験合格、翌日曜に他の試験会場で I P O 1 or F H 1 を受験 ⇒ **OK**

b) 金曜日の試験開催

金曜日の開催は土曜日と連結して行うことが条件となる。

備考：多数の犬が土曜日に受験を申し込んだ場合にのみ、金曜日を試験日とすることができる。金曜日は12:00以前に試験を開始してはならない。I P OおよびF Hの総審査数の上限は通常開催の半分とする（通常36セクション⇒半分18セクション）。

BH/V T試験のみの場合は最大7頭が受験できる。

金曜日と土曜日が連結して開催されたI P O/F H試験は、土曜日に日程終了となるようにする。しかし、いくらかの犬は金曜日に試験を終了してもかまわない。

例外：土曜日にI P O 1またはF H 1を受験する場合「定員オーバー」とならないことを条件に金曜日にBH/V Tを受験することができる（各国の団体の規定に従う）。

c) 祝日の規定

祝日に試験を実施することができる。

例外：それぞれの国の祝日の規定、あるいは各国の団体の特別規定に注意すること。

祝日の前日（平日）に試験をすることはできない（土曜日に連結する金曜日のように）。

試験実施シーズン

天候に問題がないなら試験は年間を通して開催できる。もし、人と犬の安全と健康に影響があるような場合は、審査員の判断により試験開催は中止されなければならない。

各国の団体は自国の季節の関係で、試験開催の可能な期間を限定することができる。

試験監視員

F C I加盟の各国の団体は試験を監視することができる。F C I加盟の各国の団体は専門知識を備えた試験監視員を任命することができる。試験監視員は試験が規定通り正しく行われているかを監視する。各国の団体の開催許可を得て行われる訓練試験に関しても監視員を配備することができる。

防衛ヘルパー規定

A) セクションC “防衛”におけるヘルパーの必須条件：

1. ヘルパーは **IPO** (国際試験規定) の方針および規則を順守して行動する。
2. 防衛ヘルパーは終日、審査員のアシスタントである。
3. 個人の安全と保険法の理由により、ヘルパーは試験と競技会のための専門教育を受けていなければならない。活動のための装備を所有していなければならない (防衛ズボン、防衛ジャケット、防衛片袖、インナープロテクター、必要であれば手袋)。
4. ヘルパーは天候やグラウンドコンディションに応じて、安定して滑らないシューズを着用しなければならない。
5. セクションC “防衛” の開始前にヘルパーは審査員から指示を受ける。ヘルパーは審査員の指示に従ってその役目を果たさなければならない。
6. ヘルパーがソフトムチを受け渡す場面では、試験規定に従い指導手の指示どおりに行動する。側面護送および背面護送で歩き出す際、指導手が犬に座れ (基本姿勢) を命令した後、指示があるまでヘルパーは勝手に歩き出してはいけない。
7. 各団体が普段行う試験は1人のヘルパーでもよいが、**一試験段階に7頭以上**の受験がある場合には2名のヘルパーを必要とする。地区大会以上の競技会、選考会、チャンピオンシップ等では、原則として最低2名のヘルパーを必要とする。指導手とヘルパーが共同生活者であっても問題ない (すべての試験・競技会にて)。

B) 試験においてヘルパーが成すべき行動原則：

1. 全般

犬の訓練完成度とクオリティーが試験という舞台で審査員によって評価される (例えば本能的素質、**負荷耐力**、自信、服従性)。審査員は視覚と聴覚によって客観的に評価する。従ってヘルパーは審査員が十分に満足できる仕事を実行しなければならない。そしてIPO試験はスポーツであるという特性 (すべての出場者が同じ条件で受験できる) を守るために、審査員との間で取り決められた規則を厳守する。

ヘルパーは自分勝手にセクションC “防衛” を演出してはならない。

セクションC “防衛” の各課題には、審査員にとって重要な評価基準が満ちあふれている。犬の**負荷耐力**、自信、本能的行動、服従性等、さらに咬捕のクオリティーも評価しなければならない。例えば咬捕のクオリティーが審査される場面では、ヘルパーは “良い咬捕” ができるように、犬にチャンスを与えなければならない。あるいは “**負荷耐力**” が審査される場面では相応しい “負荷” を与えなければならない。ヘルパーは最大の集中力を発揮して審査要求に十分応えられる行動をする。

2. “禁足と咆哮、



ヘルパーはテントの中で指導手と犬から見えなように立つ。防衛片袖を付けた腕は軽く曲げる。動いたり“威嚇、するような姿勢をしてはいけない。犬が“禁足と咆哮、を行っているとき、ヘルパーは犬の行動をよく観察する。犬が余計な行動をしても、瞬間的に身構えたりするなどの動作をしてはいけない。ソフトムチは体の横で下に向けて持つ。

写真：防衛片袖の保持位置

訳者注：ヘルパーの“隠れ場所、は材質や形は限定されていませんが、世界中で一般的に三角すいのテントが使用されているので本規定書では“テント、に統一しました。

3. “追補、

“禁足と咆哮、の後、指導手の指示でヘルパーは普通に歩いて、マーキングされた逃走の開始地点へと移動する。ヘルパーの立ち位置と犬の待機位置の距離は5歩でなければならない。ヘルパーは防衛片袖を装着している腕を犬の待機位置の方に向けて立つ。どの方向に逃走するのか指導手が認識できるようにしなければならない。

審査員の指示でヘルパーは素早く一定方向に駆け足で逃走を開始する。そのとき大げさな、あるいは滅茶苦茶な走り方をしてはならない。防衛片袖は必要以上に振り動かしたりせず、犬が目標を定めて最適な咬捕ができるチャンスを与える。逃走中は犬の方に体を振り向けてはならないが、犬の動きは視野の中に入れる。防衛片袖を装着した腕を伸ばしてはいけない。犬が咬捕した後は、防衛片袖を体に密着させるように引きつけてそのまま一定方向に走る。

ヘルパーの逃走距離は審査員が指定する。審査員の指示で逃走をやめて立ち止まる。ヘルパーが追補課題に相応しいダイナミックな逃走を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、例えば「咬捕の前に大げさに防衛片袖を差し出す」、「刺激するような声を出す」、「走り出す前や逃走中にソフトムチで防衛ズボンを叩く」、「咬捕後の防衛片袖の保持に緊張感がない」、「逃走の度合いが低下する」、「自分勝手に逃走を停止する」などをしてはならない。

態度に関しては8.を参照（すべての課題において適用される）

4. “禁足から防御、

犬が禁足を行っている場面で、審査員の指示によりヘルパーは犬に攻撃を仕掛ける。その際、犬を叩くことなくソフトムチを防衛片袖より上に振り上げて威嚇する。その瞬間、正面から犬に向かって相応しい抵抗を加えながら前方へと駆け出すような感じで攻撃する。防衛片袖は必要以上に移動させることなく、体の前方でお腹に密着するように引きつけて構える。犬が咬捕したら、犬の体はヘルパーのわきに置くようにして一定の方向へと負荷段階を開始する。犬が防衛片袖を捕らえるこの場面でヘルパーは回転する動作をしてはならない。攻め立てる方向はすべての犬に対して同一でなければならない。それとともに、すべての犬の評価が正しく行えるように「犬に対する攻撃行動」、「負荷段階での犬の状態」、「咬捕の状態」、「犬が放す行為と禁足状況」は審査員に見えるように実行する。指導手の方向に攻め立ててはならない。

ムチによる負荷テストは、ソフトムチで犬の肩部またはキ甲部に行う。ムチによる負荷テストの強さはすべての犬に対して均一でなければならない。1回目のムチによる負荷テストは負荷段階開始後、約4～5歩の地点で行い、2回目のムチによる負荷テストはさらに4～5歩進んだ地点で行う。2回目のムチによる負荷テスト以降の攻め立てで、さらなるムチによる負荷テストを与えてはならない。

負荷状況持続の距離は審査員が決定する。審査員が指示したら負荷行動を止めて立ち止まる。ヘルパーが相応しいダイナミックさで攻撃を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、例えば「咬捕の前に防衛片袖を差し出す」、「咬捕の前に刺激するような声を出す」、「ソフトムチで防衛ズボンを叩く」、「咬捕後の負荷状況持続中における防衛片袖の保持に緊張感がない」、「異なる強さの負荷行動やムチによる負荷テスト」、「負荷耐力の不足する犬に対して自分勝手に停止する」などは許されない。

態度に関しては8.を参照（すべての課題において適用される）

5. “背面護送、（IPO2、3）

指導手の要求後に始まる約30歩の背面護送は普通の歩度で歩く。その方向と距離は審査員が指定する。護送中、ヘルパーは犬に刺激を与えるような仕草をしてはならない。ソフトムチと防衛片袖の保持位置は犬に余計な刺激を与えないようにする。特にソフトムチは犬から見えないようにする。すべての犬に対して同一の歩調で歩く。

6. “背面護送からの奇襲、（IPO2、3）

背面護送中の奇襲は審査員の指示によって実行する。ダイナミックに左回転あるいは右回転で振り返り、犬に向かって圧力に満ちた奇襲を実行する。ソフトムチは防衛片袖より上で振り上げて威嚇する。犬は静止することのないヘルパーの、防衛片袖の柔軟な部分（正確な咬補部分）を捕らえなければならない。ヘルパーは犬を受け入れる瞬間、犬の力量衝撃をうまくキャッチするために “必要に応じて、体を回転させる。防衛片袖を必要以上に動かすことは避ける。犬が咬捕したら、犬の体はヘルパーのわきに置くようにして一定の方向へと負荷段階を開始する。攻め立てる方向はすべての犬に対して同一でなければならない。それとともに、すべての犬の評価が正しく行えるように「犬に対する攻撃行動」、「負荷段階での犬の状態」、「咬捕の状態」、「犬が放す行為と禁足状況」は審査員に見えるように実行する。指導手の方向に攻め立ててはならない。

負荷状況持続の距離は審査員が決定する。審査員が指示したら負荷行動を止めて立ち止まる。ヘルパーが相応しいダイナミックさで攻撃を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、例えば「犬が咬捕をする前に横に逸れすぎ」、「咬捕の前に防衛片袖を差し出す」、「奇襲の際に刺激するような声を出す」、「ソフトムチで防衛ズボンを叩く」、「咬捕後の負荷状況持続中における防衛片袖の保持に緊張感がない」、「異なる強さの負荷行動」、「負荷耐力の不足する犬に対して自分勝手に停止する」などをしてはならない。

態度に関しては8.を参照（すべての課題において適用される）

7. “ヘルパーの遠距離攻撃阻止、

審査員の指示で、ヘルパーは隠れ場所から出て駆け足で中央ラインへと向かう。中央ライ

ン上に達したヘルパーは止まることなく方向変換して、指導手と犬の方へ駆け足で向かって行く。その際、ソフトムチを振りかざして大声を上げて威嚇する。

犬は静止することのないヘルパーの、防衛片袖の柔軟な部分（正確な咬補部分）を捕らえなければならない。ヘルパーは犬を受け入れる瞬間、犬の力量衝撃をうまくキャッチするために「必要に応じて、体を回転させる。犬を突き倒すような受け止め方をしてはならない。犬が咬捕したら、犬の体はヘルパーのわきに置くようにして一定の方向へと負荷段階を開始する。犬に対する圧迫が真正面過ぎて、犬の体がよじれて押し倒されるようなアクションは避ける。攻め立てる方向はすべての犬に対して同一でなければならない。それとともに、すべての犬の評価が正しく行えるように「犬に対する攻撃行動」、「負荷段階での犬の状態」、「咬捕の状態」、「犬の放す行為と禁足状況」は審査員に見えるように実行する。指導手の方向に攻め立ててはならない。

負荷状況持続の距離は審査員が決定する。審査員が指示したら負荷行動を止めて立ち止まる。ヘルパーが相応しいダイナミックさで攻撃を実行すれば、審査員は最適な評価が行える。ヘルパーは犬に対するあらゆる補助行為、例えば「攻撃度合いの減少」、「立ち止まって受け止める」、「犬が咬捕をする前に横に逸れすぎる」、「犬を突き倒すような受け止め」、「咬捕の前に防衛片袖を差し出す」、「咬捕後の負荷状況持続中における防衛片袖の保持に緊張感がない」、「異なる強さの負荷行動」、「負荷耐力の不足する犬に対して自分勝手に停止する」などは許されない。

態度に関しては8.を参照（すべての課題において適用される）

8. “ヘルパーの態度、（すべての課題において適用される）

犬の「咬捕状態」「防衛片袖を放す行為」「禁足状況」これらすべての課題は審査員が観察できるように実行する（審査員に背を向けて立たない。審査員とのアイコンタクトは常に保持する）。攻め立て行動からの停止は、犬に対する運動と刺激を徐々に減少させて止まるが、防衛片袖を装着した腕の緊張感を抜いてはいけない。防衛片袖を急に引き上げるようなことはせずに、それまでの運動状態の位置のまま固定する。振り上げていたソフトムチは犬に見えないように体の横で下に向けて保持する。犬が咬捕を放すときには、いかなる補助もしてはならない。咬捕を放した後に犬とアイコンタクトをとったり、刺激を与えるような態度はすべて許されない。禁足中の犬がヘルパーの周りを回る行動をしたときは、突然動いて犬を刺激することのないように、ゆっくりと犬の方に向きを変える。

9. “不安定または拒否する犬への対処、

防御課題の実行中に犬が咬捕しなかった、あるいはヘルパーの負荷に耐えずに放してしまった場合、審査員が中止の合図をするまで止まることなく攻め立てを続行する。このような状況のときに補助行為をしたり、自分勝手に止まったりしてはいけない。犬が咬捕を放す気にならないような身のこなし、いわゆる『犬に負ける』。あるいは咬捕を放さない犬に対してソフトムチを使用することは許されない。犬がヘルパーを見放して離れそうになったとき、何らかの刺激を与えて留まらせるようなことをしてはならない。ヘルパーは国際試験規定を厳守して各課題の実行を積極的かつ公平に遂行しなければならない。禁足中に犬が突いたり咬みついたりしても防御行動をしてはいけない。

“TSB、評価（全試験段階に適用）

“TSB、評価は繁殖活用のために、その犬の生まれ持った本質特性が“防衛、において見極められて評価される。“TSB、評価は試験の成績や順位に対して与えられるのではなく、セクションC “防衛、後に、審査員によって発表される。“TSB、評価が与えられるには、犬は最低1つの防衛課題（咬捕）を果たさなければならない。

ausgeprägt (アスゲプレクト)	(a)	際立っている（優れている）
vorhanden (フォアハンデン)	(vh)	持っている（しかし満ち溢れていない）
nicht genügend (ニヒトゲヌーゲンント)	(ng)	不十分

上記の評価は下記の特性が見極められて決定される：

T riebveranlagung (トリフフェランラゲング)	意欲
S elbstsicherheit (ゼルフストス イッヒヤハイト)	自信
B elastbarkeit (ベラストバルカイト)	負荷耐力

TSB – ausgeprägt “a、 『際立っている』と評価される犬：

『大きな作業意欲』、『はっきりした意欲的行動』、『課題実行のためにひたむきに努力する』、『自信に満ちた態度』、『溢れる集中力と極めて大きな負荷耐力がある』

TSB - vorhanden “vh、 『持っている（しかし満ち溢れていない）』と評価される犬：

『作業意欲が満ち溢れていない』、『意欲的行動が満ち溢れていない』、『自信が満ち溢れていない』、『集中力と負荷耐力が満ち溢れていない』

TSB - nicht genügend “ng、 『不十分』と評価される犬：

『作業意欲が不足』、『本能的才能が不足』、『自信と負荷耐力が不足』

特別規定

FCIに加盟している各国の団体は、自国において「許可制度」、「獣医あるいは動物保護規制」、「衛生規定」、「その国の法律関連事項」このような事情がある場合には、一般規則の範囲を広げることができる。命令は母国語の使用が可能（ドイツ語限定ではない）。

世界選手権

FCIのさまざまな世界選手権は実行規定が適用される。実行規定の編集発行と改正は作業犬委員会の職責である。

表彰式、賞品授与

表彰式は試験の種目ごとに行われる：

IPO1、IPO2、IPO3、FH1、FH2、IPO-FH、BH/V T試験

IPO1、2、3、において、追求、服従、防衛の総合点が同点の場合は、防衛の得点が多い犬を上位とする。防衛も同点の場合は服従の得点が多い犬を上位とする。追求、服従、防衛、すべてが同点の場合は同順位とする。IPO1またはIPO2のリピート受験犬にこの法則は適用されない。リピーターの順位は同点犬の後となる。

原則として全試験参加者は表彰式に参加する。試験の終了は表彰式とその後の試験資料の授与（訓練手帳の返還等）までである。

懲戒法

イベント実行委員長は開催会場での秩序と安全を確保する責任がある。

審査員は秩序や安全が守られないイベントを中断あるいは中止する権限がある。一般規則違反、試験規定違反、動物保護に関する違反および道徳違反があった場合、その指導手はイベントから排除される。

審査員の判断は最終かつ絶対的である。審査に関するあらゆる不服に対しては、ドッグスポーツ会場から退場させられる。さらには懲戒処分もあり得る。審査決定に影響を及ぼすことがない場合は、審査員の規則違反を異議申し立てできる。その異議申し立ては所轄の協会／クラブに書面で提出しなければならない。

イベント主催者を經由して提出されるその書面には、申立人、クラブ会長とさらに別の証人の署名が必要である。この異議申し立てはイベントの開催日から8日以内に提出されなければならない。異議申立書が受理されたからといって、審査員の判定の訂正が認められたわけではない。ビデオ記録は証拠として考慮されない。

性格試験

犬の性格は全試験中において観察される（表彰式を含む）。性格の問題が顕著であると判断された場合、その時点までの結果にかかわらず、性格テストが不合格となる。試験報告書（含む訓練手帳）には、犬の性格の問題により“失格、”と記入される。

1. 原則

- a) 性格テストは各試験の開始前に行われる。
- b) 性格テストは中立な場所で行われなければならない。試験会場または追求会場と密接な関係を持つ場所で行ってはならない。
- c) すべての犬が個々に審査される。
- d) 追求開始直前あるいは各試験の開始直前のタイミングで性格テストを行ってはならない。
- e) 犬にはリードが装着されていること（短い標準的なリード。追求の装備類が装着されてはいけぬ）。リードは緩めて保持する。命令を与えてはならない。

注意点となる規則：

性格テストを概略的に行ってはならない。

どのような方法（状況）で行われるかは審査員に委ねられる。しかし、それは審査員によって極端に相違するものであってはならない。審査員は偏見なく公平にスムーズに、そして安全に実行しなければならない。

性格テストは通常的环境下で実施される。犬の自然な行動を観察するために、犬がいままで体験したことがない、不自然な刺激を受ける環境で行ってはならない。性格テストにおいて**個体識別確認は必須要素**である。審査員は性格の欠点を正確に判断するために、その場面の再実行ができる（例えば銃声テスト）。

2. 個体識別確認の実施

性格テストにおいて個体識別確認は必須要素である。

これはイレズミ番号やマイクロチップの確認において判断される。

血統書とイレズミ番号のない犬はマイクロチップが挿入されていなければならない。

審査員は必ず性格テストを遂行し、その結果を試験報告書に記録しなければならない。イレズミ番号がハッキリと認識できなかった場合、その番号は記録して報告される。イレズミ

ミ番号は指導手の提示した血統書に記載されている番号と一致しなければならない。イレズミ番号が読みにくいなどの場合も、試験資料に記録される。マイクロチップがリーダーによって読み取れなかった場合も試験資料に記録される。国内の規則に従ってマイクロチップが該当犬に挿入されたことが実証できれば試験に参加できる（例えば訓練資格証明書または予防接種証明書に記載されている）。国外でマイクロチップが挿入された犬を所有する指導手は、マイクロチップリーダーの読み取りに責任を持つ。個体識別が不可能な犬は訓練イベント（試験）に参加することができない。

3. 性格テスト結果

肯定的表現＝合格：

- 犬は自信がある。
- 犬は静かである、安定している、そして注意力がある。
- 犬は活発、そして注意力がある。
- 犬はのびのびしている、そしておとなしい。

ボーダーライン上＝さらなる観察が必要：

- 犬は不安定だが攻撃的ではない、しかしながら試験過程においてはのびのびしている。
- 少し緊張（興奮）している、しかしながら課題実行中は静かである。

試験を受けることができない犬：

- 安定せずに怖がっている犬、人から逃避しようとする。
- 神経質、攻撃的、警戒心が強すぎる犬。怖がりて咬み癖がある。
- 攻撃的で咬み癖のある犬。

4. 登録

性格テストにおいて不合格となった犬の試験資料には“性格の欠陥により失格、と記録される。既得の点数は削除される。実行された課題の点数も講評されない。

5. 除外

“本質に欠陥がある、と判断された犬は試験から除外される。その結論や決定の裁定は各国の団体の責任とする。

銃声に対して無関心でいられない犬：

銃声に対して攻撃的な態度を示す犬は、銃声シャイではなく性格が攻撃的と判断する。犬が銃声シャイであった場合、直ちに試験から除外され、点数は与えられない。

銃声シャイとは？ 例えば・・・

- 銃声に対して犬は立ち上がり恐れて逃げる。
- 怖がりながら指導手のところへ逃げる。
- 恐怖でパニック状態となりその場を逃げ出そうとする。あるいは逃げ出してしまった。
- 恐怖でパニック状態となりさ迷う（駆け回る）。

銃声により犬が立ち上がった場合、それが訓練ミスによるものなのか、銃声に関連してなのかを見極めなければならない。

銃声シャイの疑いがある場合、審査員は再度鑑定しなければならない。犬にリードが装着されて指導手が保持する。約15歩の距離から審査員によって発砲が行われる。このときリードは弛んだ状態で犬は立っていなければならない。

BH/VTBEGLEITHUNDPRÜFUNG MIT VERHALTENSTEST
und SACHKUNDEPRÜFUNG FÜR DEN HUNDEHALTER**同伴犬試験と行動テスト＋専門知識試験（指導手の筆記試験）****同伴犬試験の実施方法と審査基準：**

すべての試験および競技会における実行と行動はスポーツマンシップにのっとって行う。すべての関係者は規定を厳守しなければならない。試験内容は全出場者に対して平等でなければならない。試験の開催は会員に場所と日時を公示する。FCI加盟団体、または、その区分団体によって日程保護を付与された場合のみ実施することができる。加盟団体はこの主要規定を守らなければならない。

一般規定：

すべての指導手はFCI-Hundeführerschein（犬の指導手免許証）規則に準じた専門知識試験の合格証明を提出しなければならない。VDH発行の専門知識者証明、過去の同伴犬試験の合格証明（専門知識試験を合格している）、あるいは犬の専門知識者であるという公的に発行された証明書を提示しなければならない。同伴犬試験を始めて受験する指導手が適切な専門知識合格証を提出しなかった（持っていない）場合、審査員によって作成された専門知識試験（筆記テスト）に合格しなければならない。この試験は犬との実技試験が開始される前に実施される。

同伴犬試験はすべての犬種、そしていかなる大きさの犬でも受験することができる。年齢は15ヶ月以上であること。試験には最低4名の参加が必要である。同伴犬試験と他の試験種目が合同の場合でも最低4名の出場者（例：IPO、FH、BH）が必要である。一人の審査員が1日の試験で審査できるのは12～18指導手で、試験のセクションの合計数が36を超えてはならない。（同伴犬試験＋専門知識試験は3セクション、専門知識試験を除いた同伴犬試験だけの場合は2セクション）

性格テスト：

BH試験の前に性格テストを受けなければならない。その際、イレズミ番号および／またはマイクロチップの読み取りによって個体識別確認が行われる。個体識別確認ができなかった犬はBH試験を受験することができない。性格テストの評価は試験の結果に影響を及ぼす。犬が性格テストにおいて合格できなかった場合はBH試験を受験することができない。

評価：

A部門「訓練場（試験会場）での同伴犬試験（服従）」において70%以上の得点を獲得しなければ、B部門「道路におけるテスト」を受験することができない。

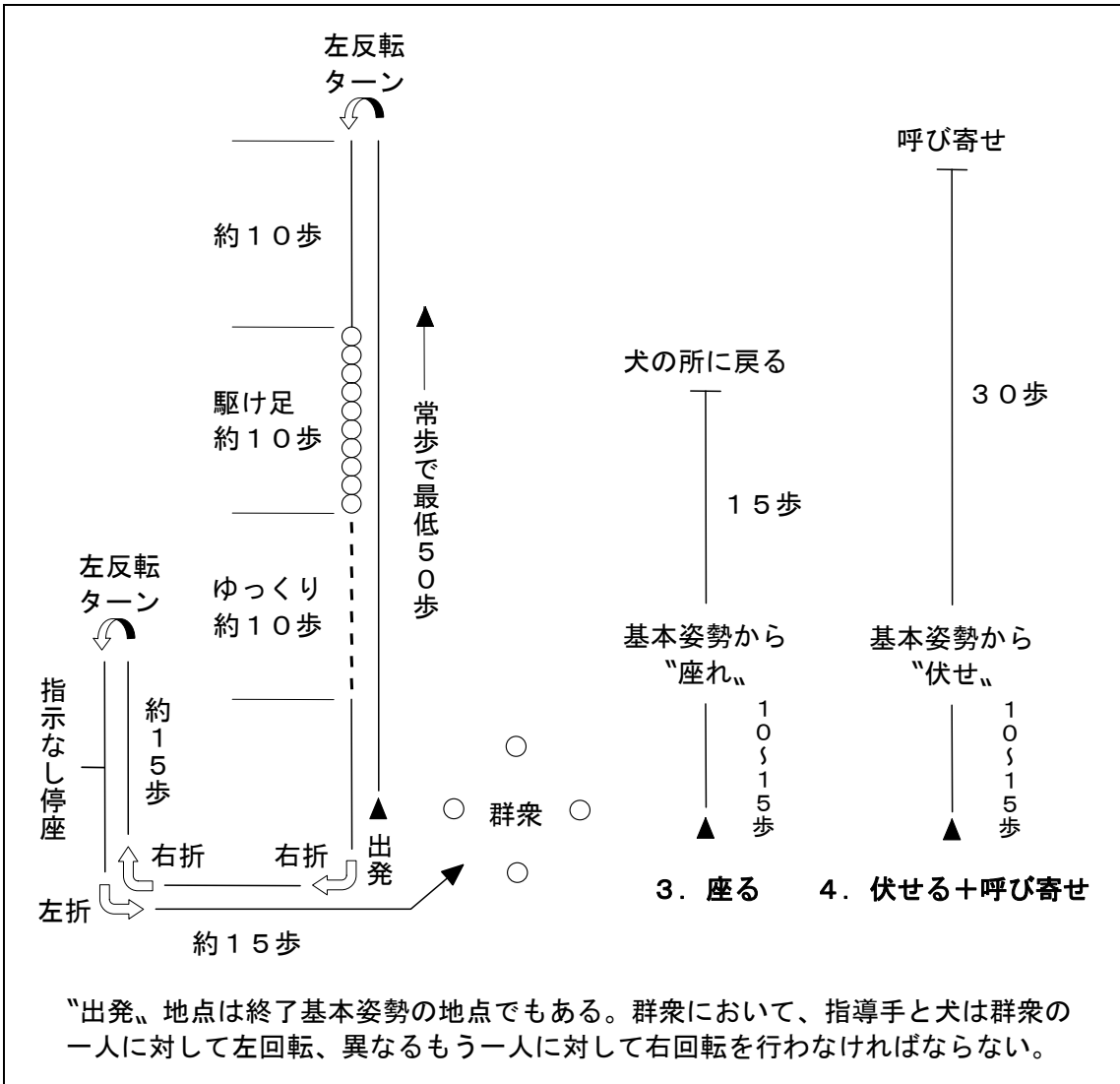
審査結果の講評時に点数は発表されず「合格」、あるいは「不合格」が審査員によって告げられる。試験で合格となるにはA部門（服従）において70%以上の得点を得て、B部門（道路での行動テスト）において審査員によって「可」と評価されなければならない。主催者が表彰式のためにBH試験出場者の順位付けを要請すれば、審査員はそれに応じることができる。

BH/VT資格はFCI加盟団体での「繁殖」、「ショー」、「選定」、「展覧会規定」において有効とされない。不合格となった場合、再受験のために一定期間を設ける必要はない。試験の結果は可否に関わらず毎試験ごとに訓練証書に記録される。

A) 同伴犬試験（服従）合計60点

合計点	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
60	0~41	42~47	48~53	54~57	58~60

BH/VT 課題1. 2. 3. 4. 要領図



各課題は基本姿勢から開始して基本姿勢で終了する。基本姿勢とは、犬は静かにそして注意して指導手の左側で真っ直ぐに座る。前後の位置は犬の肩甲骨と指導手の膝が並列するようにする。各課題の開始時に行う基本姿勢は一度だけ許されている（やり直しや動作緩慢は評価が下がる）。基本姿勢での指導手はスポーツマンらしく振る舞う。足は必要以上に広げずに自然に揃えて立つ。終了基本姿勢を次の課題の開始基本姿勢としてもよい。指導手が補助を行った場合は減点の対象となる。犬のやる気を促すための物品や、あるいは玩具を携帯して受験することはできない。指導手に身体的な問題がある場合、試験の実施前にそのことを審査員に告げれば、課題実行が正確に行えなかったとしてもそれは考慮される。指導手が身体的な理由で、自身の左側で犬をハンドリングできない場合は、右側でハ

ンドリングすることができる。

審査員の指示で課題の実行が開始される。その後に行うべき、方向変換、指示なし停座、歩度の変更、などは審査員の指示なしで実行する。しかし、そのことを審査員に尋ねたとしても問題とならない。

課題が終了（明確な終了基本姿勢を示した後）するごとに犬を褒めてもかまわない。犬を褒めた後は明確な約3秒の“間”を設ける。その後、指導手は次の課題のために新しい基本姿勢をとる。

課目と課目の移動中も犬は指導手の脚側で歩かなければならない。

1. リード付き脚側行進（15点）

Leinenführigkeit

命令：“Fuß gehen／脚側行進”のための命令を使用する

犬には動物保護法に適合した慣習的な首輪、あるいはハーネスが装着され、それにリードが付けられている。首輪は“締め首輪”の状態であってはならない。

もう一方のペア（指導手と犬）は“状況下での伏せ”を開始するための基本姿勢をとる。この基本姿勢をとるとい動作から、2頭（2ペア）の服従審査が開始される。

基本姿勢から指導手の“脚側行進”の命令によって犬は喜んで付いて歩く。指導手と犬は普通の歩度で止まることなく真っ直ぐに50歩進む。左反転ターンの後、常歩で10～15歩進んだ後、命令とともに歩度を駆け足に切り替える。10～15歩の駆け足の後、命令とともに歩度をゆっくりに切り替えて10～15歩進む。駆け足とゆっくりの歩度の切り替えは、中間歩度を設けずにダイレクトに行う。各歩調は明らかな速度の違いを示さなければならない。ゆっくりの歩度の後に適当な距離を歩き、その後、要領図の通り2回の右屈折、第2の左反転ターン、停止（犬は指示なしで座る）を実行する。課題実行中の犬は常に指導手の左側で歩行し前後の位置は犬の肩甲骨と指導手の膝が並行するようにする；前に出すぎたり、遅れたり、あるいは横に離れたりしてはいけない。

停止（犬は指示なしで座る）は最低一回、要領図のとおり第二の反転ターンの後に、数歩進んだ地点で行う。

命令は歩き出す時（出発と各停止後）と歩度を切り替えるときだけ使用できる。

方向変換時（反転ターン、右折、左折）に使用した場合は評価が下がる。

指導手が停止地点で立ち止まったとき、命令や補助なく犬は直ちに座らなければならない。停止後、指導手はその立ち位置を変えてはならない。特に、離れて座ってしまった犬に対して近づくように移動することをしてはならない。リードは弛ませた状態で左手で持つ。この課題の終盤に指導手と犬は審査員の指示で最低4名の動きのある群衆へと向かう。

方向変換時に犬が「遅れたり」、「前に出ようとしたり」、「離れたり」、「歩くことをためらって止まる」これらは誤った行動として評価される。

群衆

犬と指導手が群衆内を行進中、その人々は動いている。群衆内行進はリード付きとリードなしの2回行う。指導手と犬は群衆の一人に対して左回転、異なるもう一人に対して右回転を行わなければならない（例：8の字を描くように歩く）。そして最低1回、群衆内の人の近くで停止する（犬は指示なしで座る）。

審査員は指導手と犬の一連の動作に満足できない場合、再実行を指示することができる。停止後、審査員の指示で群衆から指導手と犬は離れて終了基本姿勢をとる。明確な終了基本姿勢を示した後、指導手は犬を褒めることができる。

左反転ターン（180°）

左反転ターンは指導手は必ず左回転（その場で180度回転）でなければならない。

それに伴う犬の動作は2パターン可能：

- ≫ 犬は指導手の左回転に対して右回転を行い互いが交差するようにターンする。
- ≫ 犬は指導手との位置関係を変えずに指導手と同じ動作で左反転ターンを行う。

試験中はどちらかのパターンに統一されていなければならない。

2. リードなし脚側行進（15点）

Freifolgen

命令：“Fuß gehen／脚側行進、”を実行するための命令を使用する

課題1 “リード付き脚側行進、”の終了基本姿勢の場面から・・・

審査員の指示で基本姿勢の犬からリードが外される。外したリードは指導手の左肩から右腰にたすき掛けにするか犬から見えないようにポケットに入れる。準備完了後、直ちにリード付きと同じ要領で、群衆内行進を再度実行して群衆内で停止する。その後、群衆を離れて出発点で基本姿勢をとり、リード付き脚側行進と全く同じ要領でリードなし脚側行進を行う。

3. 座る（10点）

Sitzübung

命令：“Fuß gehen／脚側行進、”“Absitzen／座る、”を実行するための命令を使用する

出発点での基本姿勢から、指導手とリードなしの犬は“脚側行進、”の命令とともに真っ直ぐに歩く。最低10歩～15歩までの間で指導手は、犬に何らかの指示をすることなく立ち止まり基本姿勢をとる、と同時に犬に（待てではなく）“座れ、”を命じ、座った犬から15歩進んで立ち止まり、まわれ右をして犬と対面する。審査員の指示で犬のもとへ戻り犬の右側に立ちこの課題の終了基本姿勢をとる。

犬が座らずに立ったままあるいは伏せた場合は5点減点。

4. 伏せる+呼び寄せ（10点）

Ablegen in Verbindung mit Herankommen

命令：“Fuß gehen／脚側行進、”“Ablegen／伏せる、”“Herankommen／呼び寄せる、”“in Gst gehen／基本姿勢に移る、”を実行するための命令を使用する

課題3 “座る、”の終了基本姿勢の場面から・・・

基本姿勢から指導手とリードなしの犬は“脚側行進、”の命令とともに真っ直ぐに歩く。最低10歩～15歩までの間で指導手は、犬に何らかの指示をすることなく立ち止まり基本姿勢をとる、と同時に犬に“伏せ、”を命じ、伏せた犬から30歩進んで立ち止まり、まわれ右をして犬と対面する。審査員の指示で犬に命令をして呼び寄せる。喜んで素早い歩調で指導手のところに来た犬は指導手の正面で接近して座る。次の“基本姿勢に移る、”ための命令で指導手の左側に座る。

犬が伏せずに立ったままあるいは座った場合は5点減点。

5. 状況下で伏せて待つ（10点）

Ablegen des Hundes unter Ablenkung

命令：“Ablegen／伏せる、”“Aufsitzen／座る、”を実行するための命令を使用する

もう一方の指導手と犬が課題1 “リード付き脚側行進、”で歩き出す前に、伏せて待つ場所で指導手は犬からリードを外して基本姿勢（犬から離れる方向に向かって真っ直ぐに）をとる。審査員の指示で“伏せ、”の命令で犬を伏せさせ、リードや物品を犬の傍らに置くことなく最低30歩振り返ることなく犬から離れて（試験会場内の犬から見える所）犬に背中を向けて静かに立つ。犬は指導手の補助を受けずに、もう一方の犬が課題1～4を実行

している間、静かに待つ。審査員の指示で指導手は犬のもとに戻り、伏せている犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で「座れ」の命令をする。犬は素早く真っ直ぐに座り終了基本姿勢をとる。

「指導手が落ち着きなく隠れてこっそりと補助する」、「犬の伏せている態度に落ち着きがない」、「指導手に戻ってきたとき命令前に立ち上がった、または座った」それらは程度に応じて評価が下がる。待っている途中で犬が立ち上がった、あるいは座った。しかし、休止位置を移動しなかった場合はいくらかの点数が与えられる。もう一方の犬が課題2（リードなし脚側行進）を終えるまでに3m以上動いてしまった場合、この課題は0点となる。もう一方の犬が課題2（リードなし脚側行進）を終えた後で3m以上動いてしまった場合はいくらかの点数が与えられる。審査員の指示で指導手が犬のもとへと歩いているときに犬が指導手に駆け寄ってきたら、そのタイミングに応じて最大3点までの減点。

B) 道路での試験

全般：

道路での試験は、試験（服従）会場以外の、課題実行に適した環境の市街地で行われる。一般道路（通り、道、あるいは場所）の、どこでどのように実行するかは審査員と試験監督が決定する。公共交通機関の妨げにならないように注意する。

試験の性質上、この課題実行はかなりの時間を必要とします。しかし、例えば犬の数が多いため、うわべだけの課題要求（手抜き）となってはならない。

B部門での各課題の審査は点数制ではない。B部門で合格となるには道路や公共の場での犬の全体的な行動の印象が決定的な要素となる。

本規定書における実施要領は一例である。審査員はそのときどきの地域の状況に応じて課題の実施方法を変更することができる。審査員は行動に疑問のある犬にもう一度同じ課題を実行するように要求したり、あるいは課題を変化させて実行させることができる。

試験課題（本規定書の課題実施要領は一例です）

1. 人のグループに遭遇したときの犬の態度

審査員の指示で、指導手とリード付きの犬は指定された道路の歩道部分を歩く。審査員はチーム（指導手と犬）から適当な距離を保って歩く。

犬は指導手の左側で、肩甲骨と指導手の膝が並行する位置で素直に歩く。リードはピンと張らずに少し緩めて保持される。

犬は歩行者や交通に対して無関心でなければならない。

通行人とすれ違ったり、追い越されたり、横切られたりしても、犬は中立で無関心でなければならない。（通行人役をあらかじめ準備しても良い）

指導手と犬はさらに進み、くつろいだ雰囲気の人たち（最低6人以上）と出会い、指導手はその中の一人と握手をして挨拶をして立ち話をする。指導手の指示で犬は座る、あるいは伏せる。この短い会話の間、犬は静かな態度でなければならない。

2. 自転車に遭遇したときの犬の態度

指導手とリード付きの犬が道を歩いていると、後ろから自転車がベルを鳴らしながら追い

越していく。その自転車は大きく離れた後Uターンをして、再びベルを鳴らして指導手と犬に向かってくる。すれ違う際、自転車と指導手の間に犬が位置するように実行する。犬は自転車に対してとらわれることのない態度を示さなければならない。

3. 自動車に遭遇したときの犬の態度

指導手とリード付きの犬は数台の自動車の横を歩く。その時、ある一台の車がエンジンをスタートさせる。さらに他の一台はドアを閉める。さらに歩いていると、一台の車が横で停車し、ドライバーがウインドウを開けて指導手に道を尋ねる。犬は指導手の指示で座る、あるいは伏せる。

犬は自動車音や交通音に対して無関心で静かな態度を示さなければならない。

4. ジョギングまたはインラインスケートをする人に遭遇したときの犬の態度

指導手とリード付きの犬が静かな道を歩いていると、最低2名のジョガーがスピードを落とすことなく追い越して行く。そのジョガーは追い越した後、Uターンをして再びスピードを落とさずに犬の横を走ってすれ違う。

ジョガーに追い越されるときとすれ違うとき、犬は正確な脚側行進をする必要はないが、ジョガーにからむような行動をしてはならない。

指導手は事無くジョガーをやり過ごすために、犬に座れまたは伏せを命じてよい。

全く同じ要領で2名のジョガーを2名のインラインスケーターに置き換えてもよい。

5. 他の犬に遭遇したときの犬の態度

他の犬に追い越されたり、すれ違ったときに中立な態度を示さなければならない。

指導手は事無く他の犬をやり過ごすために、犬に「脚側行進」の命令を繰り返し与えたり、座らせたり伏せさせたりしてもよい。

6. 道で繋がれて少し待たされたときの犬の態度、他の動物に対する犬の態度

審査員の指示で指導手とリード付きの犬は少し賑やかな通りの歩道を歩く。少し歩いた後、審査員の指示でフェンス、壁に固定されたリング、あるいは柱などにリードを掛けるまたは結ぶ。

指導手は犬から見えないようにお店や建物の中に入る。

待たされている犬は立っていても座っても、あるいは伏せてもかまわない。

指導手がないとき、通行人がリードを付けた犬とともに試験中の犬の前（約5歩の距離）を横切る。（通行人役をあらかじめ準備しても良い）

指導手が戻るまで、犬は静かに待っていなければならない。他の動物が前を通り過ぎる際に攻撃的な態度（喧嘩を仕掛ける）をしてはならない。繋がれたリードを強く引っ張りながら吠え続けたりしてはならない。審査員の指示で指導手は犬の所に戻る。

備考：

あらかじめ予定していた場所で全受験犬の全審査を完了させるか、あるいは全受験犬がいくつかの課題を終えた後、場所を移動して審査を行うかは審査員の判断に委ねられている。

APr 1 - 3 (Gebrauchshundprüfung A 1 bis 3)

合計 200 点

作業犬試験 A 1 ~ A 3 は I P O 1 ~ 3 の追求を除いた “服従+防衛、” を行う。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

合計点	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
200	0~139	140~159	160~179	180~190	191~200

FPr 1 - 3 (Fährtenprüfung 1 - 3)

追求試験レベル 1 ~ 3 は I P O 1 ~ 3 の “追求、” を単課目で行う。

この単課目は最低 4 名の出場者 (B H / V T が最低 4 頭、または I P O が最低 4 頭、または F H が最低 4 頭、あるいは B H / V T、I P O、F H の出場合計が最低 4 頭) がある試験において付け加えて実施することができる。

どのレベルに出場するかは指導手が自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

満点	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
100	0~69	70~79	80~89	90~95	96~100

追求試験は必ずしもレベル 1 ~ 3 の順序で行う必要はない。

UPr 1 - 3 (Unterordnungsprüfung 1 - 3)

服従試験レベル 1 ~ 3 は I P O 1 ~ 3 の “服従、” を単課目で行う。

この単課目は最低 4 名の出場者 (B H / V T が最低 4 頭、または I P O が最低 4 頭、または F H が最低 4 頭、あるいは B H / V T、I P O、F H の出場合計が最低 4 頭) がある試験において付け加えて実施することができる。

どのレベルに出場するかは指導手が自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

満点	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
100	0~69	70~79	80~89	90~95	96~100

服従試験は必ずしもレベル 1 ~ 3 の順序で行う必要はない。

SPr 1 - 3 (Schutzdienstprüfung 1 - 3)

防衛試験レベル1～3はIPO1～3の“防衛”を単課目で行う。

この単課目は最低4名の出場者（BH/V Tが最低4頭、またはIPOが最低4頭、またはFHが最低4頭、あるいはBH/V T、IPO、FHの出場合計が最低4頭）がある試験において付け加えて実施することができる。

どのレベルに出場するかは指導手が自由に決めることができる。

試験でこの訓練資格を得たとしてもショーまたは展覧会規定、繁殖規定、選定規定で有効とならない。

注意：防衛だけの単課目競技会の開催は許可されない。

満点	不可 Mangelhaft	可 Befriedigend	良 Gut	特良 Sehr Gut	優 Vorzüglich
100	0～69	70～79	80～89	90～95	96～100

防衛試験は必ずしもレベル1～3の順序で行う必要はない。

IPO-VO

Fährten	追求	100点	
Unterordnung	服従	100点	
Schutzdienst	防衛	100点	合計 300点

【出場規定】

犬は試験日に受験可能年齢に達していなければならない。例外は認められない。
受験の前提条件として各国の団体の規定に従いBH/V Tに合格していなければならない。
IPO-VOは3セクションである。訓練審査員が1日で審査できるのは最大12頭。

【全般規定】

IPO-VO（国際作業犬基礎試験）はIPO1試験への前段階としてFCI作業犬委員会によって考案された（IPO-VOは義務ではない。実施するかどうかは各国の団体が決定する）。この試験の使用例。

1. 成犬クラス出場申し込みのための訓練資格として。
2. IPO-VOをIPO1受験の前段階として。

IPO-VOは、委員会においてドイツ語で検討されて作成された。他の言語に訳して解釈不能な部分があったときはドイツ語の原版を標準とする。

特に明示された規定を除き、IPO-VOに関する規定はIPO2012（本試験規定）に準ずる。

【性格テスト】

試験の一番最初に行われるセクションの前に、審査員は犬の性格（本質）テストを行わなければならない。全般規則“性格テスト”を参照適用。

IPO-VO "A" Fährten 追求

「指導手による印跡」、「最低200歩」、「直線コース×2」、「コーナー×1（約90°）」、「指導手所有の物品×1」、「印跡後の待機時間なし」、「作業制限時間10分」

出発	10点
追求コース（29+30）	59点
コーナー	10点
物品	21点
合計	100点

犬が物品を一つも発見できなかった場合、追求の評価は最高でも“Befriedigend/可”

【全般規定】

出発地点の左側にはっきりとした目印を地面に差し立てなければならない。

印跡者（指導手）は印跡前に審査員または追求会場の責任者に物品を提示する。物品は指導手の臭いがよく付いたものを使用する。大きさは長さ約15cm。幅3～5cm。厚さ約1cm。色は地面と極端に違ってはいけない。印跡者（指導手）は出発点にしばらく立ち止まった後、通常の歩き方で指示された方向に歩き出す。コーナーも通常の歩き方で印跡する（“追求コーナーの印跡”、P.99参照）。

チーム（指導手と犬）が適切な追求をするために、印跡の前後に審査員および帯同者は追求会場に立ち入ってははいけない。

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Suchen／探す”

b) 実行：IPO-V0とIPO1でのみ追求作業中の犬を「ときどき褒める」ことができる

指導手は犬に必要な装備の装着を申告前に済ませておく。犬には10mのリードを付けることができる（追求リードなしでもよい）。10mリードは首を絞めない状態の首輪に繋ぐ。指導手と犬は審査員のもとで基本姿勢をとり、犬が物品を発見したら『くわえ上げる』または『指示する』のどちらであるかを申告する。指導手は作業の開始前、追求を命じるとき、全追求作業中、あらゆる強制を犬にしてはならない。

審査員の指示で、指導手は犬をゆっくりとそして静かに出発点へと導き追求を開始する。追求リードは、犬の背中の上、側面、またはわきの下、あるいは前足と後ろ足の両方の間を通す。または追求装備に繋ぐ（使用が可能なのは、胸部ハーネス、またはBöttchergeschirr／リードを繋ぐ部分が胸下にある一本式タイプ。これ以外にさらにベルト類を付けることはできない）。この準備のために出発点の約2m手前で短時間、犬を座らせてもよい。出発点で犬は集中した状態で静かにそして深い鼻使いで臭いを嗅ぎつけなければならない。

出発後も犬は深い鼻使いで安定したテンポと集中力を持続して追求コースを進まなければならない。指導手はリードの端を持ち10mの間隔をあけて進む。リードを緩ませてもよい。リードなしで追求する場合も10mの間隔をあける。コーナーにおいても犬は確実に足跡を追わなければならない。

犬は物品を発見したら、指導手の補助を受けることなく申告通りの方法で、直ちにくわえ上げるか、説得力のある指示を行う。くわえ上げる場合は、立ち姿勢、座る、あるいは指導手のもとに持ってくるのが可能である。犬が物品を持来するときは指導手は立ち止まる。くわえ上げてさらに進んだり、くわえて伏せることは誤った行動である。指示は、伏せる、座る、または立ち姿勢で行うことができる。犬が物品を指示、あるいはくわえ上げたら、指導手はリードを放して犬のもとに行き、発見した物品を高く持ち上げて審査員に示す。

c) 評価：

「集中した」、「安定した」、「説得力」のある追求作業。犬がこのような肯定的な態度であれば「きびきびとした」あるいは「ゆっくりの」いわゆる“追求スピード”を差別評価する基準は特にない。説得力のある態度で追求コースから離れなければ、追求中の犬が左右を少し確認しても評価に影響しない。

「むだに嗅ぎ回る」、「高い鼻使い」、「排泄行為」、「コーナーでの旋回」、「指導手が絶え間なく励ます」、「追求中あるいは物品に対してのリードまたは声による補助行為」、「誤った物品のくわえ上げまたは指示」、「物品以外の物に指示を行った」これらはその度合いに応じて評価が下がる。

犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合、追求作業は中止される。追求コースから逸脱する犬を指導手が引き止めようとした場合、審査員は犬に追従するように指導手に指示する。その指示に指導手が従わなかった場合、追求作業は中止される。出発点から犬がスタートした後、「10分以内」に最終地点に到達しなければ追求作業は中止される。中止となった地点までの評価／得点は与えられる。

各コースはそれぞれ評価と点数で審査される。犬が追求コース上にいたとしても探すことをしない（長い間同じ場所にとどまって捜そうとしない）場合も作業は中止される。

IPO-VO "B" Unterordnung 服従

課題1：リード付き脚側行進	30点
課題2：リードなし脚側行進	20点
課題3：常歩行進中の伏せと招呼	15点
課題4：持来（任意物品）	10点
課題5：80cm障害（往復）	10点
課題6：状況下での休止	15点
合計	100点

【全般規定】

IPO-VOでは基本姿勢をとる際、“Absitzen/座れ”を命令してもよい。

IPO-VO B	1. リード付き脚側行進	30点
----------	--------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen/脚側行進”

b) 実行：

指導手とリード付きの犬は審査員の前まで行き犬を座らせて申告をする。

基本姿勢から“脚側行進”の命令で、犬は「注意して」、「喜んで」右肩甲部と指導手の左膝が揃う位置で歩く。リードはピンと張らずに持つ。

『常歩30歩』→『左反転ターン』→『常歩15歩』→『右折』→『常歩15歩』→『左折』→『グループ内行進』→『グループ内で指導手停止』→『グループから離れて出発点で終了基本姿勢』

最初の直進を行進中に最低15歩の距離から5秒の間隔で2回の発砲が行われる（口径6mm）。犬は発砲に対して無関心でなければならない。グループは最低4人で構成されており静かに動いている。

c) 評価：

「前が出る」、「横に離れる」、「遅れる」、「余分な命令」、「体を使った補助行為」、「注意力に欠ける」、「意気消沈」これらは度合いに応じて評価が下がる。

IPO-VO B	2. リードなし脚側行進	20点
----------	--------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen/脚側行進”

b) 実行：

課題1 “リード付き脚側行進”の終了基本姿勢の場面から・・・

“リードを外す”そして、基本姿勢から“脚側行進”の命令で、犬は「注意して」、「喜んで」右肩甲部と指導手の左膝が揃う位置で歩く。

『常歩30歩』→『左反転ターン』→『常歩15歩』→『右折』→『常歩15歩』→『左

折』→『常歩15歩』→『指導手停止（終了基本姿勢）』

終了基本姿勢を示した後「リードを付ける、

c) 評価：

「前が出る」、「横に離れる」、「遅れる」、「座る動作が遅いまたは躊躇して座る」、「余分な命令」、「体を使った補助行為」、「注意力に欠ける」、「意気消沈」これらは度合いに応じて評価が下がる。

IPO-VO B	3. 常歩行進中の伏せと招呼	15点
-----------------	-----------------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進、”Ablegen／伏せる、”Herankommen／招呼、”in Gst gehen／基本姿勢に移る、

b) 実行：

「リードを外す、そして、基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに「伏せ、の命令をする。犬は直ちに伏せる。指導手はそのまま15歩進んで立ち止まり、静かに伏せている犬の方に向きを変える。審査員の指示で「招呼、の命令をする。または犬の名前を呼ぶ。犬は喜んで、スピーディに、一直線に指導手のもとに来て、接近して真っ直ぐに正面停座をする。次の「基本姿勢に移る、ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。終了基本姿勢を示した後「リードを付ける、

c) 評価：

「助走での誤り」、「伏せる動作が遅い」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手のもとへ来る速度が遅い」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

「伏せ、の命令に対して犬が座るまたは立っている場合は減点7点となる。

IPO-VO B	4. 持来（任意物品）	10点
-----------------	--------------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Bringen／持来、”Abgeben／受け渡す、”in Gst gehen／基本姿勢に移る、

b) 実行：

基本姿勢で「リードを外す、そして、指導手持参の任意物品を最低5歩前方に投げる。物品が静止したら「持来、の命令をする。静かに自主的に座っていた犬はスピーディに一直線に物品へと走り、素早くくわえ上げてスピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、物品は静かにそして固く保持する。指導手は次の「受け渡し、の命令をかけるまで約3秒の「間、を作らなければならない。次の「基本姿勢に移る、ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。終了基本姿勢を示した後「リードを付ける、

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「物品へ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「持ってくる速度が遅い」、「物品を落とす」、「物品をもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を

広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」「指導手が立ち位置を変えずに補助」これらは度合いに応じて評価が下がる。

終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は「mangelhaft／不可」となる。犬が物品を持来できなかった場合はこの課題は0点となる。

IPO-VO B	5. 80cm障害 (往復)	10点
----------	----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

「Springen／飛越」、「Herankommen／招呼」、「Zurückspringen／帰路飛越」、「in Gst gehen／基本姿勢に移る」

b) 実行：

指導手と犬は障害から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢とり「リードを外す」そして、「飛越」の命令で静かに自主的に座っていた犬は障害を飛越する。向こう側に着地したら犬の動きを止めることなく帰路の「飛越」の命令を与える。犬は直ちに障害を飛越し、指導手に接近して真っ直ぐに正面停座をする。次の「基本姿勢に移る」ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。終了基本姿勢を示した後「リードを付ける」

往路飛越の際、指導手は命令と同時に2歩動いて補助してもよい。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ためらったジャンプ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」、「指導手の補助行為」これらは度合いに応じて評価が下がる。犬が障害に接触した場合はその都度1点までの減点。足を掛けた場合はその都度2点までの減点。

IPO-VO B	6. 状況下での休止	15点
----------	------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

「Ablegen／伏せる」、「Aufsitzen／座る」

b) 実行：

「服従」は2頭で行われる。1頭は出発点で脚側行進のための基本姿勢をとり、もう1頭は審査員が指示した位置で指導手とともに正しい基本姿勢をとり「リードを外す」。審査員の指示で「伏せ」の命令をかけて犬を伏せさせる。リードや何らかの物品を犬の側に置くことなく指導手は振り向かず離れて試験会場内の最低20歩離れた地点で犬に背を向けて立つ。ペアのもう1頭の犬が課題1～3を実行している間、犬は指導手の影響を受けることなく静かに伏せていなければならない。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。審査員の指示で「座れ」の命令をかける。犬は素早く真っ直ぐに座る。終了基本姿勢を示した後「リードを付ける」

c) 評価：

「指導手に落ち着きがない、こっそり犬に指示をする」、「伏せている犬に落ち着きがない」または「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ／座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。場所を移動せずに立ち上がるまたは座った場合にはその失敗分を差し引いた評価がされる。ペアのもう1頭の犬が課題3を実行し終えるまでに伏せていた位置から3m以上移動した場合はこの課題の評価は0点となる。

IPO-VO "C" Schutzdienst 防衛

課題 1 : 禁足と咆哮	15 点
課題 2 : ヘルパーの逃走阻止	30 点
課題 3 : ヘルパーの攻撃阻止	50 点
課題 4 : 護送	5 点
合計	100 点

【全般規定】

特に明示された規定を除き、IPO-VOに関する規定はIPO2012（本試験規定）に準ずる。

IPO-VOでは「TSB」評価は審査されない。防衛ヘルパーはソフトムチを所持しているが殴打することはせず、威嚇のためだけに使用する。

各咬補において、審査員の指示なしで「放せ」の命令ができる。

第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。

《Ablassen/放す》 評価一覧表

第1の命令で	第2の命令で	第2の命令で	第3の命令で	第3の命令で	第3の命令で
ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	放さないあるいは命令以外の方法で放した
程度に応じて減点 0,5~3	減点 3	程度に応じて減点 3,5~6	減点 6	程度に応じて減点 6,5~9	試験失格

IPO-VO C	1. 禁足と咆哮	15 点
-----------------	-----------------	-------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

「Revieren/パトロール」

b) 実行：

指導手と犬から約20歩離れたテントの中に、犬から見えないようにヘルパーは立っている。審査員の指示で犬からリードを外し「パトロール」の命令と腕による指示でヘルパーのいるテントへと向かわせる。

犬はヘルパーに対して「集中力のある禁足」と「持続性のある咆哮」を積極的に実行しなければならない。ヘルパーに飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。

審査員の指示で指導手は直ちに犬のもとに行き犬の首輪をしっかりと掴む。

c) 評価：

犬は「厳しい咆哮」と「圧力のある禁足」を行う。それらが不足していたり持続性に欠ける場合は度合いに応じて評価が下がる。ヘルパーにからむ行為、例えばつついたり、飛びついたり等は3点までの減点。防衛片袖を強く咬んだ場合は12点までの減点。ヘルパーのもとを離れた場合、禁足と咆哮は「Mangelhaft/不可」の範囲内で評価される。犬がヘル

パーに対して無関心な場合「防衛」は中止される。

IPO-VO C	2. ヘルパーの逃走阻止	30点
-----------------	---------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

「Abwehren／逃走阻止」、「Ablassen／放す」

b) 実行：

禁足咆哮中の犬の首輪を指導手がしっかりと掴んで静かに犬を後退させたら、ヘルパーはテントから静かに出る。そして逃走のために駆け出す。審査員の指示で指導手は「逃走阻止」の命令とともに掴んでいた首輪を放して犬をヘルパーに向かわせる。犬は自主的にエネルギーがかつ力強い咬捕で効果的に逃走を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。審査員の指示でヘルパーは停止する。ヘルパーが完全に停止した後、犬は直ちに防衛片袖を放す。指導手は審査員の指示なしでタイミングよく「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は犬のもとに行き首輪をしっかりと掴む。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早くエネルギーな反応と追補」、「力強い咬捕」、「落ち着いた咬捕での効果的な逃走阻止」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。ヘルパーの逃走に対して約20歩以内に咬捕して逃走を阻止できなかった場合「防衛」は中止される。

IPO-VO C	3. ヘルパーの攻撃阻止	50点
-----------------	---------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

「Abwehren／攻撃を防御」、「Ablassen／放す」、「in Gst gehen／基本姿勢に移る」

b) 実行：

「ヘルパーの逃走阻止の最終場面から続けて」～ 指導手は犬の首輪を保持し続ける。このとき、犬の興奮をかき立ててはいけない。審査員の指示でヘルパーは指導手と犬から歩いて離れる。ヘルパーは約20歩離れたら振り返って指導手と犬に向かって大声を上げて激しく威嚇する。指導手は犬に「ヘルパーの攻撃を防御する」ための命令をかけて発進させる。ヘルパーの攻撃に対して犬は躊躇することなくエネルギーがかつ力強い咬捕で攻撃を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。審査員の指示でヘルパーは停止する。ヘルパーが完全に停止した後、犬は直ちに防衛片袖を放す。指導手は審査員の指示なしでタイミングよく「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き（たとえ犬が吠えずに座って

いても) “座れ、を命令して基本姿勢をとる。そして犬にリードを付ける。

c) 評価 :

重要な評価基準 : 「エネルギッシュな防御と力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

監視状態の犬が「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合、ヘルパーの攻撃阻止は “Mangelhaft／不可、の範囲内で評価される。

IPO-VO C	4. 護送	5 点
-----------------	--------------	------------

a) 命令 : (下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Fuß gehen／脚側行進、

b) 実行 :

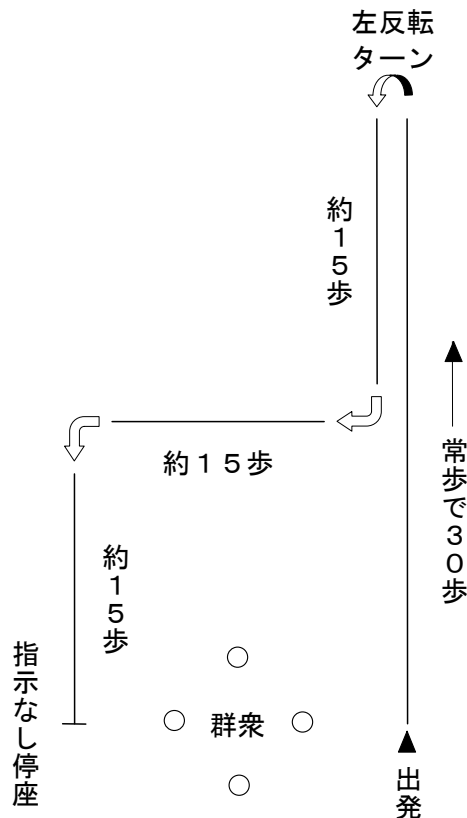
ヘルパーを審査員に引き渡すために約10歩の側面護送を行う。犬に“脚側行進、または“トランスポート、の命令をすることが許されている。犬はヘルパーと指導手の中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そのとき、ヘルパーを圧迫したり、飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。審査員の前で側面護送を停止する。犬は指示なしで座る。そして審査員に“防衛、の終了を報告する。

c) 評価 :

度合いに応じて評価が下がる重要な判断基準 :

ヘルパーを注意して監視する。正しい脚側行進 (リードは緩められた状態で)。

IPO-VO脚側行進要領図 :



IPO 1

Fährten	追求	100点	
Unterordnung	服従	100点	
Schutzdienst	防衛	100点	合計 300点

【出場規定】

犬は試験日に受験可能年齢に達していなければならない。例外は認められない。
 受験の前提条件として各国の団体の規定に従いBH/V Tに合格していなければならない。

IPO 1 "A、 Fährten 追求

「指導手による印跡」、「最低300歩」、「直線コース×3」、「コーナー×2（約90°）」、「指導手所有の物品×2」、「印跡後最低20分待機」、「作業制限時間15分」

追求コース	79点
物品（11+10）	21点
合計	100点

犬が物品を一つも発見できなかった場合、追求の評価は最高でも「Befriedigend/可、

【全般規定】

追求コースは担当審査員または追求会場の責任者が追求会場の地形を考慮して決定する。追求コースはさまざまなパターンを準備する。例えば『コーナーから物品までの距離がいつも同じ』等、このようなことをしてはならない。

出発地点の左側にはっきりとした目印を地面に差し立てなければならない。

スタート順（印跡する場所）は、印跡前に審査員立ち会いのもと、くじ引きで決定する。

【追求会場】

追求作業は自然のあらゆる地表条件で行われる。例えば、草地、耕作地、森林地帯。

さまざまな条件の追求会場がすべての試験段階において使用可能である。

足跡が見える会場はできるだけ使用を避ける。

【印跡】

担当審査員または追求会場責任者の責務：

- 追求会場の割り振り
- 印跡者への指示
- 印跡された追求コースの監視

各追求コースは会場の地形に合わせて決定される。

印跡は自然な歩行で実行する。不自然で補助的な印跡は全追求コース（直線、コーナー、物品配置地点）ではてはならない。

印跡者（指導手）は印跡前に審査員または追求会場の責任者に物品を提示する。物品は指導手の臭いがよく付いたものを使用する（最低30分以上所持）。印跡者（指導手）は出発点にしばらく立ち止まった後、通常の歩き方で指示された方向に歩き出す。引っ搔いて歩いたり、中断したりせずに印跡する。各直線コースは最低30歩なければならない。コーナーも通常の歩き方で印跡する。コーナー（約90°）においても、引っ搔いて歩いたり、

中断するような歩行をしてはならない。ただし、コーナーに続く次のコースへの進入がスムーズに行えるように注意する（“追求コーナーの印跡”、P.99 参照）。

印跡前に追求コースの下書（事前に立ち入って下見）をしてはならない。犬は印跡の様子が見えない所で待機させる。

【物品配置】

第1物品は最低100歩進んだ第1コースまたは第2コースに置く。第2物品は追求コースの最終地点に置く。コーナーの前後20歩以内に物品を置いてはならない。物品は立ち止まらずに置く。最終物品を置いた後、指導手（印跡者）はさらに数歩、同じ方向に進む。

【追求物品】

物品は指導手の臭いがよく付いたものを使用する（最低30分以上所持）。素材の異なる2種類の物品でなければならない（素材の例：皮、繊維製品、木）。物品の大きさは長さ約10cm。幅2～3cm。厚さ0.5～1cm。色は地面と極端に違ってはいけない。

地区大会以上のIPO2、3、そしてFH試験の追求物品にはすべて番号が記入される。その番号は追求コースの番号と一致しなければならない。

チーム（指導手と犬）が適切な追求をするために、印跡の前後に審査員、印跡者、帯同者は追求会場に立ち入ってはいけない。

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Suchen／探す”

命令は出発点と第1物品発見後の再スタート時。そして“間違った物品指示”を行った場合の再スタート時に使用できる。

b) 追求作業の実行と評価：

指導手は犬に必要な装備の装着を申告前に済ませておく。犬には10mのリードを付けることができる（追求リードなしでもよい）。10mリードは首を絞めない状態の首輪に繋ぐ。指導手と犬は審査員のもとで基本姿勢をとり、犬が物品を発見したら『くわえ上げる』または『指示する』のどちらであるかを申告する。

追求リードは最低10mでなければならない。審査員による、リードの長さ、首輪および追求装備のチェックは試験の開始前にのみ行うことができる。「Rollleinen／巻き取り式のリード」を使用することはできない。

指導手は作業の開始前、追求を命じるとき、全追求作業中、あらゆる強制を犬にしてはならない。

【出発】

審査員の指示で、指導手は犬をゆっくりとそして静かに出発点へと導き追求を開始する。追求リードは、犬の背中の上、側面、またはわきの下、あるいは前足と後ろ足の両方の間を通す。または追求装備に繋ぐ（使用が可能なのは、胸部ハーネス、またはBöttchergeschirr／リードを繋ぐ部分が胸下にある一本式タイプ。これ以外にさらにベルト類を付けることはできない）。この準備のために出発点の約2m手前で短時間、犬を座らせてもよい。

犬は出発において確信的でなければならない（物品発見後の再スタート時も）。

リードは指導手によって、ある程度のゆとりが作られなければならない。

出発点で犬は集中した状態で静かにそして深い鼻使いで臭いを嗅ぎつけなければならない。臭いを嗅ぎつける際に指導手は“捜せ”の命令以外のあらゆる補助をしてはならない。審査員は、犬が出発でどれだけの時間、嗅ぎ取りに執着するかを見るのではなく、犬が出

発でどれだけ強く嗅ぎ取ったのかを、第一コースでの追求態度で判断しなければならない。

出発で嗅ぎ取り（スタート）に3回失敗した場合、追求作業は中止される。

出発後も犬は深い鼻使いで安定したテンポと集中力を持続して追求コースを進まなければならない。指導手はリードの端を持ち10mの間隔をあけて進む。リードを緩ませてよい。そのリードが地面に接触しても問題ない。しかし、大きくたるませて犬との間隔を短くしてはならない。リードなしで追求する場合も10mの間隔をあける。

【追求実行】

犬は「集中して」、「持続的に」、「できるだけ安定したテンポ（地形の難易度に応じた）」で追求作業を実行しなければならない。安定しており、説得力のある作業であれば、追求のテンポ「きびきびとした、あるいは、ゆっくりとした」は評価の基準とならない。指導手は必ずしも追求コースを踏み外すことなく歩く必要はない。

【コーナー】

コーナーにおいても犬は確実に足跡を追わなければならない。説得力があり足跡から体が離れなければ評価に影響しない。コーナーでの旋回は誤りである。コーナーを通過した後も犬は同じテンポで進まなければならない。コーナーの領域（前後も含む）においても可能な限り、指導手は犬との定められた間隔を保つ。

【物品の指示またはくわえ上げ】

犬は物品を発見したら、指導手の補助を受けることなく申告通りの方法で、直ちにくわえ上げるか、説得力のある指示を行う。くわえ上げる場合は、立ち姿勢、座る、あるいは指導手のもとに持つことが可能である。犬が物品を持来するときは指導手は立ち止まる（犬の方に向かって歩いてはいけない）。指示は、伏せる、座る、または立ち姿勢で行うことができる（その指示姿勢が物品ごとに変わっても問題ない）。

犬が物品を指示、あるいはくわえ上げたら、指導手はリードを放して犬のもとに行き、発見した物品を高く持ち上げて審査員に示す。犬が指示した物品を拾い上げる、またはくわえ上げた物品を受け取る時の、指導手の立ち位置は犬の横でなければならない。

犬の指示態度に説得力があるならば、指示した物品に対して犬の体が少し斜めとなっても評価に影響しない。物品の横で指示したり、指導手の方向に体を強く傾けて指示することは誤りである。くわえ上げてさらに進んだり、くわえて伏せることは誤った行動である。"くわえ上げ、"と"指示、"の両方を行った場合は評価が下がる。指導手の強い補助によって発見した物品は通過（未発見）と見なされる。それは例えば『物品に対して指示をせずに先に進もうとする犬を、指導手がリードの操作あるいは命令で物品に留め置いた場合』

犬は、指示またはくわえ上げを行った位置で再スタートまで静かに待たなければならない。再スタートの際、指導手は首輪または追求装備に連結されたリードを短く持ち"捜せ、"の命令で再び犬に追求を開始させる。

【追求コース逸脱】

追求コースから犬が逸脱することを指導手が防ごうとした場合、審査員は指導手に対して犬に追従するように指示する。指導手はその指示に従わなければならない。このとき、指導手が審査員の指示に従わなかったり、犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合（リードなしの場合も同じ）、追求作業は中止される。

【犬を褒める】

IPO-V0とIPO1でのみ追求作業中の犬を「ときどき褒める」ことができる（"捜せ、"を褒め言葉として使用してはいけない）。この「ときどき褒める」ことはコーナーでは

使用できない。物品発見時にも短く褒めることができる（物品を拾い上げる前、あるいは物品を審査員に示してポケットに入れた後のいずれか一度だけ）。

【作業終了報告】

最終物品の発見後に、審査員のもとへ行き追求作業の終了報告を行う。基本姿勢をとり犬が発見した物品を提示する。その後、審査員の講評がなされ、評価と得点が発表される。審査員のもとへ行く際に遊んだりエサを与えたりしてはならない。

【評価】

セクションA “追求” の審査は出発の場面から開始される。

犬に期待するのは：適切な訓練による「説得力のある」、「集中した」、「持続力のある」嗅覚作業。

指導手は：任務実行中の犬の精神状態や体感状況を、犬の反応から正しく理解して犬が集中して追求作業ができる状況を保つように注意する。

審査員は犬だけを、あるいは指導手だけを見るのではなく「追求会場の状況」、「天候」、「追求コース以外の誘惑」、「進行時間」を観察しなければならない。それらすべての要因に基づいて評価が決定されなければならない。

➤ 追求態度（例：直線での追求テンポ、コーナーの前後、物品の前後）

➤ 訓練水準（例：落ち着きのない出発、意気消沈、逃避的）

➤ 指導手による補助は許されない

➤ 追求作業における困難

- ・ 地面の条件（密集したつる草、砂、地面の変化、肥料）

- ・ 風の条件

- ・ けもの道

- ・ 天候（暑さ、寒さ、雨、雪）

- ・ 天候の変化

評価はこれらの条件を考慮して決定されなければならない。

指導手と装備完了の犬が申告をした後、審査員は適確な審査位置に立つ、または追求作業を追尾する。そして、指導手が犬に対して何らかの影響を及ぼすような態度や命令を行っていないかを観察する。

犬との距離は作業中の犬に影響を及ぼさないように、そして指導手の邪魔にならないように配慮する。審査員は追求作業全体を体感しなければならない。

審査員は犬の作業がどれほど意欲的かつ確実であるか、あるいは不確実または粗略であるかを見極めて評価しなければならない。

「集中した」、「安定した」、「説得力」のある追求作業。犬がこのような肯定的な態度であれば「きびきびとした」あるいは「ゆっくりの」いわゆる “追求スピード” を差別評価する基準は特にない。

説得力のある態度で追求コースから離れなければ、追求中の犬が左右を少し確認しても評価に影響しない。「むだに嗅ぎ回る」、「排泄行為」、「コーナーでの旋回」、「指導手が絶え間なく励ます」、「追求中あるいは物品に対してのリードまたは声による補助行為」、「誤った物品のくわえ上げまたは指示」、「物品以外の物に指示を行った」これらはその度合いに応じて評価が下がる（それぞれ最大4点までの減点）。

「ひどくむだに嗅ぎ回る」、「集中力不足の追求」、「慌てた追求」、「排泄行為」、「ねずみ取りの仕草」およびこれらに類するものに関しては（それぞれ最大8点までの減点）。

犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合、追求作業は中止される。追求コースから逸脱する犬を指導手が引き止めようとした場合、審査員は犬に追従するように指導手に指示する。その指示に指導手が従わなかった場合、追求作業は中止される。

出発点から犬がスタートした後、「IPO1およびIPO2は15分以内」、「IPO3は20分以内」に最終地点に到達しなければ追求作業は中止される。中止となった地点までの評価／得点は与えられる。

犬が物品ごとに「くわえ上げ」と「指示」の異なった発見動作をすることは誤りである。発見動作は申告通りでなければならない。

「物品に対する誤った指示またはくわえ上げ」、「物品以外の物に指示を行った」その度合いに応じてそれぞれ最大4点までの減点（再スタートを行ったので）。物品以外の物に指示を行った犬が指導手の命令なしで直ぐに自発的に再スタートした場合は減点2点（再スタートを行っていないので）。

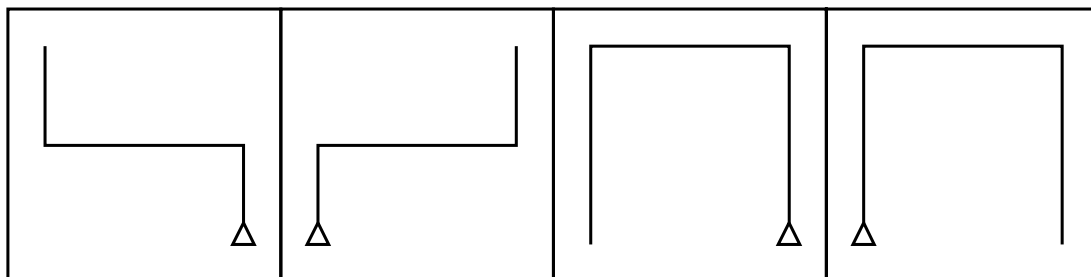
印跡者によって設置された物品を一つも発見できなかった場合、セクションA「追求」の評価は最高でも「Befriedigend／可」となる。物品未発見の場合、追求作業における課題の一つである「物品発見後の再スタート」を実行できないということを考慮しなければならない（物品発見後の再スタートにおける犬の態度を審査員が評価できない）。

追求中、野生動物の出現により、犬が狩猟本能行動を示したときに、指導手は犬に対して「伏せ」を命令することができる。犬がそれに従った場合は審査員の指示で追求作業は続行される。犬が従わなかった場合は試験は中止される（評価：不服従のために試験失格）。

【中止／失格】

行動・態度	結果・記録
出発地点において犬はスタートを3回失敗した。	「追求中止」
全段階に適用：犬が追求コースからリード分10m以上離れた場合。あるいは、コースを離脱した犬に追従するように審査員が指示したのに指導手が従わない。 犬が制限時間内に追求最終地点に到達できなかった。 IPO1、2 = 15分 IPO3 = 20分	「追求中止」 中止となった地点までの評価／得点が与えられる 審査講評は中止地点まで！
くわえ上げた物品を犬が放さない。 犬が野生動物を追いかけて再開不可能	「試験失格、不服従のため」

【IPO1 追求コースパターン】



IPO 1 “B” Unterordnung 服従

課題 1 : 脚側行進 (リードなし)	20点
課題 2 : 常歩行進中の座れ	10点
課題 3 : 常歩行進中の伏せと招呼	10点
課題 4 : ダンベル持来 (650g)	10点
課題 5 : 1m障害とダンベル持来 (650g)	15点
課題 6 : 斜壁とダンベル持来 (650g)	15点
課題 7 : 前進と伏せ	10点
課題 8 : 状況下での休止	10点
合計	100点

【全般規定】

指導手と『リード付きの犬』は、審査員のもとで基本姿勢をとり申告を行う。その後、リードを外す。

服従で特に注意すべきこと：『自信を取り除かれて単に表面的に演じさせられているだけで、犬が仕事をする喜びを無くしてしまっていないかを観察しなければならない』

全課題において犬は指導手の要求に対して集中して喜んで仕事をする。この喜んで実行するすべての仕事は同時に正確さも求められる。もちろん、それは評価の判断に影響する。

指導手がある課題の実行を忘れた場合（部分的ではなく）、審査員はそのことを指摘して未公開の課題実行を要求する。このことによる減点はない。課題実行中にその課題のある部分を行わなかった場合は評価に影響する。

審査員は遅くとも服従が開始されるまでに、使用する用具を国際試験規定に照らし合わせて点検する。その用具は国際試験規定に適合していなければならない。

“脚側行進”と“状況下での休止”の実行中に発砲が行われる（口径6mm）。

審査員の指示で課題の実行が開始される。その後の方向変換、指示なし停座、歩度の変更、などは審査員の指示なしで実行する。

命令の規則は本規定書に明記されている。命令は普通に発音される短い一単語を使用する。どのような言語でも使用可能であるが、同じ動作を要求するための命令は常に同じでなければならない。指導手が命令を三回使用したにもかかわらず、犬が課題またはその課題の中で必要な動作が実行できなかった場合、その課題作業は中止され評価は与えられない（例外あり）。“招呼”の命令は犬の名前に置き換えてもよい。犬の名前とそれ以外に何らかの命令も使用した場合はダブルコマンドと見なされる。

【課題開始】

各課題は審査員の指示によって開始される。

【基本姿勢】

もう一方の指導手と犬が“状況下での休止”位置で基本姿勢をとるタイミングに合わせて、出発点で脚側行進のための基本姿勢をとる。この2頭の基本姿勢から審査が開始される。

各課題は基本姿勢から開始して基本姿勢で終了する。基本姿勢での指導手はスポーツマンらしく振る舞う。足は必要以上に広げずに自然に揃えて立つ。

基本姿勢は一度だけ許されている（やり直しや動作緩慢は評価が下がる）。指導手と犬は前方への動きを止めて基本姿勢をとる（指導手がステップバックして犬を後退させながらとる基本姿勢は誤り）。犬は「密着して」、「真っ直ぐに」、「静かに」、「注意して」指導手の左側で犬の肩と指導手の膝が揃うように座る。

犬を短く褒める行為は、各課題での終了基本姿勢を明確に示した後、基本姿勢のまま褒める。その後、指導手は新しい基本姿勢をとる。褒めることと次の新しい開始の間には、明確な約3秒の“間”を作らなければならない。

いわゆる“助走（犬と指導手の行進）”は基本姿勢から開始される。指導手（と犬）は助走中の最低10歩～最大15歩までの間で定められた課題を実行しなければならない。

指導手の正面に座った犬を移動させて基本姿勢をさせるとき、そして「座っている」、「立っている」、「伏せている」犬の右側に立ち次の行動命令を与える前に、明確な約3秒の“間”を作らなければならない。

何らかの姿勢で待っている犬のもとに指導手が行き、犬の右側に立つとき、犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

基本姿勢と助走での誤りはその課題の評価に影響する。

次の課題のために移動が必要なときも脚側行進を実行する。犬を自由にしたり、遊んだりしてはいけない。持来用のダンベルを取りに行くときも犬と一緒に行かななければならない。

指導手は反転ターンを必ず左回転で実行する（Uの字で歩くのではなく、その場で180度左回転する）。犬は左回転中の指導手の周囲を小回りしてくると回る。あるいは指導手との位置関係を変えずに指導手と同じ動作で頭を軸にして体を180度ひねる。

試験ではどちらかのパターンに統一されていなければならない。

犬が正面停座の後、基本姿勢の位置（指導手の左側）へ移動する際、指導手の後ろを小回りしてくると回る、あるいは頭を軸に体を180度ひねってのどちらでもよい。

障害の素材は堅く、高さ100cm、幅150cmとする。斜壁は幅150cm、長さ191cmの二枚の板が上部で連結されており、40度に広げて設置したときに頂点が地面から180cmとなるように設計されている。斜壁は全体に滑り止めの加工がされていなければならない。両壁面の上半部分にはそれぞれ3本ずつ、24mm×48mmの登坂補助の角材が取り付けられている。試験では全出場犬が同じ障害・斜壁を飛越しなければならない。

持来をともなう課題においては、木製ダンベルの使用だけが許されている。全出場者は主催者が準備したダンベルを使用しなければならない。持来をともなう課題の実行前にダンベルを犬にくわえさせてはいけない。

【課題の分割】

2部門で構成された課題「行進中の座れ」「行進中の伏せと招呼」「行進中の立止」「行進中の立止と招呼」これらは2分割されてそれぞれの区分が別々の評価を受ける。

a) “基本姿勢、～”助走、～”実行、 = 5点

b) “実行後の態度、～”終了基本姿勢、 = 5点

各課題に対する評価は“開始基本姿勢、から”終了基本姿勢、まで、犬の態度が注意深く観察されて決定される。

【追加の命令】

犬が3回の命令で課題を実行できなかった場合、その課題の評価は“M/不可、（0点）”

となる（例外あり）。区分課題において犬が3回目の命令で実行した場合、その区分評価は“M/不可、となる。

招呼のための命令“来い、”は犬の名前に置き換えてもよい。
犬の名前と何らかの命令も使用した場合はダブルコマンドと見なされる。

追加の命令に対する評価：

追加の命令1回（合計2回の命令）⇒ **課題の区分評価が“B/可、”となる**

追加の命令2回（合計3回の命令）⇒ **課題の区分評価が“M/不可、”となる**

例：区分課題5点

<p><u>正面停座から基本姿勢に移るための命令で犬は座ったまま。</u> <u>第2の命令（追加の命令1回目）で犬は基本姿勢へと移動した。</u></p>	<p><u>区分評価“B/可、”=-1,5点</u> <u>他に失敗がなければこの課題の評価はG/8,5点となる</u></p>
<p><u>前進中の犬が伏せの命令を無視して走った。</u> <u>第2の命令（追加の命令1回目）で犬は止まって座った。</u> <u>第3の命令（追加の命令2回目）で犬は直ちに伏せた。</u></p>	<p><u>区分評価“M/不可、”=-2,5点</u> <u>他に失敗がなければこの課題の評価はB/7,5点となる</u></p>

<p>IPO 1 B</p>	<p>1. 脚側行進（リードなし）</p>	<p>20点</p>
-----------------------	------------------------------	-------------------

a) **命令**：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen/脚側行進、”

命令は歩き出すとき（出発と各停止後）と歩度を切り替えるときだけ使用できる。
方向変換時（反転ターン、右折、左折）に命令を使用した場合は評価が下がる。

b) **実行**：（実施要領 P.100 参照）

指導手とリード付きの犬は審査員の前まで行き犬を座らせて申告をする。
その後、犬からリードを外して脚側行進で出発地点に行き基本姿勢をとる。
審査員の指示でこの課題が開始される。正しい基本姿勢から“脚側行進、”の命令で、犬は「注意して」、「喜んで」、「真っ直ぐに」右肩甲部と指導手の左膝が揃う位置で歩く。

2012年から、すべての試験における脚側行進の実施要領は下記に統一される。

『常歩50歩』→『①左反転ターン』→『常歩10～15歩』→『駆け足10～15歩』
→『ゆっくり歩く10～15歩』→『常歩に戻る』→『右折』→『約15歩』→『右折』
→『約15歩』→『②左反転ターン』→『①指導手停止』→『左折』→『グループ内行進』
→『グループ内で②指導手停止』→『出発点付近で終了基本姿勢（③指導手停止）』

駆け足からゆっくり歩くへの切り替えは中間歩度を設けずに行う（それぞれ最低10歩）。
各歩調は明確に区別された速度で行う。指導手が停止したら犬は指示なしで素早く真っ直ぐに座る。グループは最低4人で構成されており静かに動いている。指導手と犬はグループの1人に対して右回り、他の1人に対して左回りを実行し、最低1回、指導手はグループ内で停止する。行進が不十分な場合、審査員はグループ内行進を繰り返すように要求することができる。審査員の指示でグループから離れて脚側行進で出発点に戻りこの課題の終了基本姿勢をとる。この終了基本姿勢を次の課題の開始基本姿勢としてもよい。

反転ターンを実行するとき、指導手は必ず左回転で行う（Uの字を歩いて行うのではなく体を軸にしてその場で180度回れ左。）

このときの犬の動作は2パターン可能：

- － 犬は左回転中の指導手の周囲をくるっと回る（右回りで）。
- － 犬は指導手と同じ動作で頭を軸にして体を180度、左回転させる。

試験中はどちらかのパターンに統一されていること。

犬は常に肩甲骨と指導手の左膝が揃うポジションで歩く。前に出たり、遅れたり、離れて歩いてはならない。最初の直進を行進中に最低15歩の距離から5秒の間隔で2回の発砲が行われる（口径6mm）。犬は発砲に対して無関心でなければならない。犬が銃声シャイの場合、試験失格となり既得の点数はすべて剥奪される。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「前に出る」、「横に離れる」、「遅れる」、「座る動作が遅いまたは躊躇して座る」、「余分な命令」、「体を使った補助行為」、「各歩調の行進中の注意力に欠ける」、「注意力に欠ける方向変換」、「意気消沈」これらは度合いに応じて評価が下がる。

IPO 1 B	2. 常歩行進中の座れ	10点
---------	--------------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進”、“Absitzen／座る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲骨部が揃う位置で歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“座れ”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに座る。指導手はそのまま15歩進んで立ち止まり、静かに注意して座っている犬の方に向き変える。審査員の指示で犬のもとに戻り犬の右側に立つ。このとき犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「座る動作が遅い」、「座っているときに落ち着きがない、注意力に欠ける」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が座らずに伏せるまたは立っている場合は減点5点となる。

座らなかったこと以外にも誤った態度がある場合は更なる減点対象となる。

IPO 1 B	3. 常歩行進中の伏せと招呼	10点
---------	-----------------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進”、“Ablegen／伏せる”、“Herankommen／招呼”、“in Gst gehen／基本姿勢に移る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲骨部が揃う位置で歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“伏せ”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに伏せる。指導手はそのまま30歩進んで立ち止まり、静かに注意して伏せている犬の方に向き変え

る。審査員の指示で“招呼”の命令をする。または犬の名前を呼ぶ。犬は喜んで、スピーディに、一直線に指導手のもとに来て、接近して真っ直ぐに正面停座をする。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「伏せる動作が遅い」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手のもとへ来る速度が遅い」、「指導手のもとに来る途中で失速」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

“伏せ”の命令に対して犬が座るまたは立っている場合は減点5点となる。

IPO 1 B	4. ダンベル持来 (650 g)	10点
---------	-------------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Bringen/持来”、“Abgeben/受け渡し”、“in Gst gehen/基本姿勢に移る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手はダンベル(650g)を約10m前方に投げる。ダンベルを投げる際に指導手は立ち位置を移動してはならない。ダンベルが静止したら“持来”の命令をする。静かに自主的に座っていた犬はスピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げてスピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し”の命令をかけるまで約3秒の“間”を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「持ってくる速度が遅い」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は“mangelhaft/不可”となる。犬がダンベルを持来できなかった場合はこの課題は0点となる。

IPO 1 B	5. 1m障害とダンベル持来 (650 g)	15点
---------	------------------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Springen/飛越”、“Bringen/持来”、“Abgeben/受け渡し”、“in Gst gehen/基本姿勢に移る”

b) 実行：

指導手と犬は障害から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢とり、指導手はダンベル(650g)を1m障害の向こう側に投げる。ダンベルが静止したら“飛越”の命令をする。静かに自主的に座っていた犬は“飛越”と“持来”の命令で障害を飛越し(持来の命令は犬がジャンプをしているときに与える)、スピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げて、直ちに障害を飛越し、スピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接

近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し、の命令をかけるまで約3秒の“間、”を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る、”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価 :

「基本姿勢での誤り」、「ゆっくりとしたジャンプ」、「力強さに欠けるジャンプ（ためらい）」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「ゆっくりとした帰路ジャンプ」、「力強さに欠ける帰路ジャンプ（ためらい）」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。犬が障害に接触した場合はその都度1点までの減点。足を掛けた場合はその都度2点までの減点。

障害持来の点数分配 :

往路ジャンプ	ダンベル持来	帰路ジャンプ
5点	5点	5点

この3つの区分課題（往路ジャンプー持来ー帰路ジャンプ）の内、**最低1回のジャンプと“持来、”を行わなければ得点を得ることができない。**

往復のジャンプと持来に何の欠点もない。 = 15点

往路または復路のジャンプをしなかった。持来に欠点はない。 = 10点

往復のジャンプに欠点はない。しかし、持来しなかった。 = 0点

ダンベルが横に強く逸れたり、犬にとって見えにくいときは指導手が審査員に申し出るか、あるいは審査員がそのことを指摘する。その場合は減点なしで投げ直しができるが、犬は座ったまま待機しなければならない。犬から離れる際は待てを命じてもよいが、投げ直しの際に犬を動かして新しい基本姿勢をとることはできない。待たせていた犬の右側に立ち、何の命令もせずに投げ直す。待機中の犬が障害の横をすり抜けて指導手を追いかけて行った場合、この課題は中止され0点となる。待機中の犬は動いてしまったが障害の手前で留まっている場合、続行可能であるが課題の評価が一つ下がる。

指導手の補助行為はたとえ立ち位置を変えずに行われたとしても度合いに応じて評価が下がる。終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は“mangelhaft/不可、”となる。

往路ジャンプで強い接触により障害が倒れてしまった場合、この課題はやり直される（ただし、たとえやり直しで良いジャンプを行ったとしても、往路ジャンプの評価は“unteren mangelhaft/重い不可ー4点、”）。

ダンベル受け渡しの場面で、放せの命令を3回使用しても犬がダンベルを放さなかった場合は“試験失格、”となりセクションB “服従、”は中止される。

IPO 1 B	6. 斜壁とダンベル持来 (650g)	15点
---------	---------------------	-----

a) 命令 : (下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Springen/飛越、” “Bringen/持来、” “Abgeben/受け渡し、” “in Gst gehen/基本姿勢に移る、”

b) 実行：

指導手と犬は斜壁から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢をとり、指導手はダンベル（650g）を斜壁の向こう側に投げる。静かに自主的に座っていた犬は“飛越、”と“持来、”の命令で斜壁を登り（持来の命令は犬が斜壁を登っているときに与える）、スピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げて、直ちに斜壁を登り、スピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し、”の命令をかけるまで約3秒の“間、”を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る、”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ゆっくりとした登り降り」、「力強さに欠ける登り降り」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「帰路でのゆっくりとした登り降り」、「帰路での力強さに欠ける登り降り」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

斜壁持来の点数分配：

往路の登り降り	ダンベル持来	帰路の登り降り
5点	5点	5点

この3つの区分課題（往路の登り降りー持来ー帰路の登り降り）の内、**最低1回の登り降り**と“持来、”を行わなければ得点を得ることができない。

- 往復の登り降りと持来に何の欠点もない。 = 15点
- 往路または復路の登り降りをしなかった。持来に欠点はない。 = 10点
- 往復の登り降りに欠点はない。しかし、持来しなかった。 = 0点

ダンベルが横に強く逸れたり、犬にとって見えにくいときは指導手が審査員に申し出るか、あるいは審査員がそのことを指摘する。その場合は減点なしで投げ直しができるが、犬は座ったまま待機しなければならない。犬から離れる際は待てを命じてもよいが、投げ直しの際に犬を動かして新しい基本姿勢をとることはできない。待たせていた犬の右側に立ち、何の命令もせずに投げ直す。

指導手の補助行為はたとえ立ち位置を変えずに行われたとしても度合いに応じて評価が下がる。終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は“mangelhaft／不可、”となる。

ダンベル受け渡しの場面で、放せの命令を3回使用しても犬がダンベルを放さなかった場合は**“試験失格、”**となりセクションB“服従、”は中止される。

IPO 1 B	7. 前進と伏せ	10点
----------------	-----------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Voraussenden／前進、” “Ablegen／伏せる、” “Aufsitzen／座る、”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は前進を実行する方向に脚側行進で真っ直ぐ歩く。10～

15歩の地点において、指導手は立ち止まると同時に腕を上げて「前進、の命令をする。犬はまるで目標があるかのようにひたむきに速いスピードで指示された方向に最低30歩前進する。審査員の指示で指導手は犬に「伏せ、の命令を与える。それに対して犬は即座に伏せなければならない。指導手は犬が伏せるまで腕を上げ続けていてもよい。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で「座れ、の命令をかける。犬は素早く座り終了基本姿勢をとる。

c) 評価：

「助走での誤り」、「指導手が犬と一緒に走る」、「前進するスピードが遅い」、「方向が横に強く逸れる」、「前進の距離が短い」、「ためらった伏せ」、「命令前に伏せる」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ／座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。

補助：例えば「前進のために、あるいは「伏せのために、追加の命令をかけた。このような場合も評価が下がる。

「伏せ、の命令を3回かけても犬が全く止まらない場合、この課題は0点となる。

第2の命令で犬は直ちに伏せた《1回目の追加の命令》	-1,5点
第3の命令で犬は直ちに伏せた《2回目の追加の命令》	-2,5点
第1～第3のいずれかの命令で犬は伏せずに停止した。 第3の命令を与えられても、座っている、または、立っている。 例：第2の命令で立って止まった。第3の命令で座った。	-3,5点

その他にも何らかの失敗がある場合は更に評価は下がる。犬が伏せた地点（または停止位置）から完全に離れた。あるいは指導手の方に戻ってきた場合、この課題は0点となる。

IPO 1 B	8. 状況下での休止	10点
---------	------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

「Ablegen／伏せる、」「Aufsitzen／座る、」

b) 実行：

「服従、は2頭で行われる。1頭は出発点で脚側行進のための基本姿勢をとり、もう1頭は審査員が指示した位置で指導手とともに正しい基本姿勢をとる。審査員の指示で「伏せ、の命令をかけて犬を伏せさせる。リードや何らかの物品を犬の側に置くことなく指導手は振り向かず離れて試験会場内の最低30歩離れた地点で犬に背を向けて立つ（一般的には防衛の隠れ場所として設置されたテントの近く）。ペアのもう1頭の犬が課題1～6を実行している間、犬は指導手の影響を受けることなく静かに伏せていなければならない。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で「座れ、の命令をかける。犬は素早く真っ直ぐに座り終了基本姿勢をとる。

c) 評価：

「指導手に落ち着きがない、こっそり犬に指示をする」、「伏せている犬に落ち着きがない」または「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ／座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。

場所を移動せずに立ち上がるまたは座った場合にはその失敗分を差し引いた評価がされる。ペアのもう1頭の犬が課題3を実行し終えるまでに伏せていた位置から3m以上移動した場合はこの課題の評価は0点となる。ペアのもう1頭の犬が課題3を実行し終えた後で伏せている位置から3m以上移動した場合はそれまでの休止分だけが評価される。指導手が犬のもとに行くときに犬が立ち上がって指導手の方に来た場合は最大3点までの減点。

IPO 1 "C" Schutzdienst 防衛

課題 1 : パトロール (2ヶ所)	5点
課題 2 : 禁足と咆哮 (5+5)	10点
課題 3 : ヘルパーの逃走阻止	20点
課題 4 : 禁足から防御	35点
課題 5 : ヘルパーの遠距離攻撃阻止	30点
合計	100点

【全般規定】

セクションC "防衛" に適した広さの会場 (例えば公式サッカーグラウンド105m×70m) に左右3ヶ所、合計6ヶ所の "隠れ場所" が設置されている (防衛設営 P.102 参照)。IPO1では5番テントと6番テントを使用する。指導手、審査員そしてヘルパーが作業実行のために必要な目印はよく見えるようにマーキングされていなければならない。

記者注『ヘルパーの "隠れ場所" は材質や形は限定されていませんが、世界中で一般的に三角すいのテントが使用されているので本規定書では "テント" に統一しました』

【防衛ヘルパー/防衛着衣】

ヘルパーは防衛着衣、防衛片袖、ソフトムチ (ステッキ状) を装備する。防衛片袖は犬が咬捕するのに適した部分が設けられ、着色されていない黄麻繊維製のカバーで覆われたものを使用しなければならない。ヘルパーは常に犬の動きを注視する。禁足場面において必要であれば犬を刺激することなく静かに動いてもよい。ただし、犬が興奮するような態度や抵抗するようなことをしてはならない。万が一のときヘルパーは防衛片袖で身の安全を守る。

試験は1人のヘルパーで行うことができる (どの試験段階でも)。ただし、一試験段階に7頭以上の受験があるとき、あるいは地区大会以上の競技会では、必ず2名のヘルパーで行わなければならない。各試験段階の出場犬は全犬、同じヘルパーで受験しなければならない (2名の場合も)。

例外: ヘルパー自身も試験出場者である場合、その1回に限りヘルパーの交代が許される。
(ローカル試験のみ)

【申告】

- 指導手はリード付きの犬とともに審査員のもとで基本姿勢をとり申告をする。
- "パトロールの出発地点" に移動してからリードを外して開始基本姿勢をとる。
- 審査員の指示により、その基本姿勢から方向を定めてパトロールを開始する。

【備考】

申告が規定通りに行えない。例えば犬がコントロール不能となり、その場から、あるいはヘルパーのいるテントへと走り出してしまったとき、指導手は犬に呼び戻しの命令を3回かけることができる。この3回の命令で犬が指導手のもとに帰ってこないときは "不服従により試験失格" となりセクションC "防衛" は中止される。

指導手が犬を掌握できない。犬が防衛片袖を放さない。あるいは指導手が命令以外の方法で放させた (例えば犬を触って)。防衛片袖以外のヘルパーの体 (着衣) を咬んだ。これらの行動をした場合 "試験失格" となる。"TSB" 評価は与えられない。

【マーキング】

国際試験規定に定められたマーキングは、指導手、審査員、ヘルパーによく見えるように印されなければならない。》 そのマーキングとは

- 》 隠れ場所で禁足咆哮中の犬を呼び戻すときの指導手の立ち位置
- 》 ヘルパーの逃走開始地点と逃走終了地点
- 》 ヘルパーの逃走阻止における犬の待機位置
- 》 ヘルパーの遠距離攻撃阻止における指導手と犬の待機位置

防衛課題（咬捕）を拒む、あるいは咬捕を放して再び咬捕をしなかった場合、セクションCは中止される。“防衛”の評価／得点は与えられない。“TSB”評価は“ng”となる。

各咬捕において、審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで“放せ”の命令ができる。

第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。

《Ablassen／放す》 評価一覧表

第1の命令で	第2の命令で	第2の命令で	第3の命令で	第3の命令で	第3の命令で
ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	放さない あるいは命令以外の方法で放した
程度に応じて減点 0,5~3	減点 3	程度に応じて減点 3,5~6	減点 6	程度に応じて減点 6,5~9	試験失格

IPO 1 C	1. パトロール	5点
----------------	-----------------	-----------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Revieren／パトロール” “Herankommen／呼び寄せ”

「犬の名前」と「呼び寄せ」の命令を連結して使用してもよい。例：“太郎来い”

b) 実行：（2ヶ所：出発は4番と5番の間地点→5番テント→最終6番テント）

ヘルパーは犬から見えないように6番（最終）テントの中にいる。指導手とリード付きの犬は4番テントと5番テントの間地点に行き基本姿勢をとり、リードを外す。審査員の指示で、短い“パトロール”の命令と左右いずれかの腕による指示で（この動作は1テントごとに繰り返すことができる）、犬は目標を定めてスピーディに5番テントへ走り、なるべく小回りで注意してテントを回る。テントの側面に犬が出てきたら“呼び寄せ”の命令で呼び寄せて、犬の動きを止めることなく、新たな“パトロール”の命令でヘルパーのいる最終テントへと向かわせる。指導手はこの一連の動作実行中、中央ライン上を歩いて進み、横に逸れてはいけない。犬は常に指導手の前方を横切るように走らなければならない。最終テントに犬が到達したら指導手は立ち止まり、命令を与えたり指示をしたりしてはいけない。

c) 評価：

「犬が操縦性に欠ける」、「迅速性に欠ける」、「目標が定まらない」、「テントを大回り」、「テントに対して注意不足」これらは度合いに応じて評価が下がる。

パトロールにおける誤り：

- 》 開始基本姿勢において「落ち着きがない」、「注意力に欠ける」。

- 余分な命令または指示。
- 指導手の進路が中央ラインをキープしていない。
- 指導手が普通で歩行しない。
- 大きすぎるパトロール。
- 指導手の命令によってではなく犬が自動的にパトロールをしている。
- テントを回らない。テントを回る際に注意力に欠ける
- 犬の操縦性と服従性が欠けている。

最終テントに向かう場面で命令を3回使用しても犬が最終テントに到達できず、ヘルパーを発見できなかった場合、防衛は中止される。パトロール中に指導手が犬を呼び、犬が基本姿勢の位置（犬の姿勢は何であれ）に来てパトロールが中断した場合、防衛は中止される。（記録は「中止」得点なし／防衛以外の既得の点数は残る／TSB評価は与えられない）

IPO 1 C	2. 禁足と咆哮	(5+5) 10点
---------	----------	-----------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

① “Herankommen／呼び寄せ”と、in Gst gehen／基本姿勢に移る、を連結して使用する

② 犬を迎えに行く場合は “Fuß gehen／脚側行進” の命令のみ

連結命令の例：“コイアトエ、（コイで呼んで犬が手元に来てからアトエはダメ）

b) 実行：

犬はヘルパーに対して「集中力のある禁足」と「持続性のある咆哮」を積極的に実行しなければならない。ヘルパーに飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。咆哮開始から約20秒後、審査員の指示で指導手はテントから5歩の位置に立つ（ヘルパーに対峙する犬の背後）。

IPO1では下記の2パターンが可能（事前に申告）。

①審査員の指示により⇒『連結命令で犬を呼び寄せて基本姿勢をとる』

②審査員の指示により⇒『犬の右側に立ち“脚側行進”の命令だけをかけて犬とともに歩き5歩の位置で基本姿勢をとる』

どちらのパターンでも評価は変わらない。

審査員の指示で指導手はヘルパーにテントの外に出るように要求する。ヘルパーはマーキングされた逃走開始地点へと移動する。このとき犬は基本姿勢で静かに注意して座っていなければならない。

c) 評価：

犬は呼ばれるまで“厳しい咆哮”と“圧力のある禁足”を行う。それらが不足していたり持続性に欠けたり、審査員や歩み寄ってきた指導手を気にする場合は度合いに応じて評価が下がる。

咆哮の評価：連続的な咆哮に対して5点が与えられる。弱い咆哮（圧力不足、エネルギーに欠ける）、連続性に欠ける咆哮は2点までの減点。「吠えない」しかし犬は積極的に集中してヘルパーを禁足していた場合、咆哮は0点となるが禁足には5点が与えられる。

ヘルパーにからむ行為、例えばついたり、飛びついたり等は2点までの減点。防衛片袖を強く咬んだ場合は9点までの減点。犬が防衛片袖を咬んで放さない場合、指導手は5歩の位置から“呼び寄せ+基本姿勢に移る”この連結命令を1度だけ使用できる（“放せ”の命令をしてはいけない）。この1回限りの命令で、防衛片袖を放して指導手のもとに来ない場合は“試験失格”となり防衛は中止される。防衛片袖を放して指導手のもとに来れば

防衛は続行できるが、この課題評価は Mangelhaft／不可（－9点）となる。犬が故意にヘルパーの防衛片袖以外の部分を（突くではなく）咬んだ場合 “試験失格” となる。

審査員が指導手に来るように指示する前に、犬がヘルパーを見放して中央ライン上にいる指導手のもとに戻ろうとした場合、もう一度ヘルパーのもとへ行くように命令できる。ヘルパーのもとに留まれば “防衛” は続行されるが禁足と咆哮の評価は “unteren Mangelhaft／重い不可（－9点）” となる。もう一度ヘルパーのもとに行くように命令された犬が行くことを嫌がったり、行ったはいいがまたヘルパーを見放した場合、“防衛” は中止される。審査員の指示後、指導手が最終テントに向かって歩いているとき、あるいは5歩の位置からの「呼び寄せ」の命令前に犬が勝手に指導手のもとに来た場合、禁足と咆哮は “Mangelhaft／不可” の範囲内で評価される。

IPO 1 C	3. ヘルパーの逃走阻止	20点
---------	--------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進”、“Ablegen／伏せる”、
“Abwehren (Stell oder Voran)／防衛（阻止または前進）”、“Ablassen／放す”

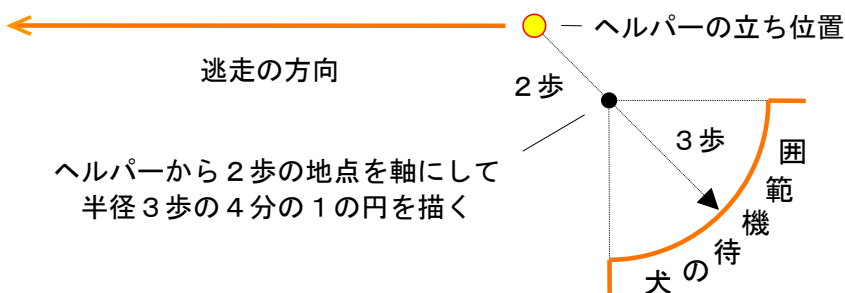
b) 実行：

審査員の指示で指導手はヘルパーにテントの外に出るように要求する。ヘルパーは普通の歩度で逃走開始地点へ移動する。審査員の指示で指導手と犬は待機位置に移動する。

このとき犬は指導手の左側で落ち着いて離れずに歩く。

指導手と犬は待機位置で “伏せ” の命令前に基本姿勢をとる。このとき犬は真っ直ぐに静かに座る。“伏せ” の命令で犬は直ちに素早く伏せる。そして静かに確実にヘルパーを注視する。指導手はテントに戻り、犬とヘルパーそして審査員が見える位置に立つ。

ヘルパーの立ち位置から犬の待機位置までの距離は5歩。



審査員の指示でヘルパーは逃走を開始する。

ヘルパーが走り出したと同時に、指導手は “阻止せよ” または “前へ” を犬に命令する。犬は躊躇することなく高い支配欲とエネルギーかつ力強い咬捕で効果的に逃走を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は **“支配的で安定したグリップの持続を示してから”**、放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで “放せ” の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は “試験失格” となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

c) 評価：

重要な評価基準：「高い支配欲」、「素早くエネルギッシュな反応と追補」、「力強い咬捕」、「落ち着いた咬補での効果的な逃走阻止」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの逃走に対して犬は待機位置で伏せたまま。あるいは約20歩以内に追補できない。または咬捕を保持できずに逃走を阻止できなかった場合「防衛」は中止される。

監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

指導手が「逃走阻止の発進命令」を犬に与えなかった場合、課題評価が一つ下がる。

IPO 1 C	4. 禁足から防御	35点
---------	-----------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Ablassen／放す、 “in Gst gehen／基本姿勢に移る、

b) 実行：

逃走阻止の咬補を放して約5秒後、審査員の指示でヘルパーは禁足中の犬に対して攻撃を仕掛ける。犬は指導手の指示なしでエネルギッシュかつ力強く咬捕して防御する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで脅しながら攻め立てる。この場面でソフトムチによる負荷テストが2回実行される。負荷テストは肩部とキ甲部にのみ行われる。負荷に対する犬の活力と安定性は特に注意して観察される。負荷に対して犬は屈しない態度とエネルギッシュで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は「**支配的で安定したグリップの持続を示してから**、放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き（たとえ犬が吠えずに座っていても）「座れ」を命令して基本姿勢をとる。

このときヘルパーからソフトムチを取り上げない。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早い力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの負荷に耐えきれず防衛片袖を放して再び咬補をしなかった場合「防衛」は中止される。監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら「Mangelhaft／不可」の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

IPO 1 C	5. ヘルパーの遠距離攻撃阻止	30点
---------	-----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Absitzen/座る、”Abwehren/攻撃を防御、“Ablassen/放す、“in Gst gehen/基本姿勢に移る、“Fuß gehen/脚側行進、

b) 実行：

指導手と犬はマーキングされた待機地点に移動する(1番テントと2番テントの中間地点)。このとき犬は指導手の左側で落ち着いて離れずに歩く。待機地点に到着したら向き直り、犬に“座れ、を命じて基本姿勢をとる。このとき犬は真っ直ぐに静かに座る。首輪を持ってよいが犬の興奮をかき立ててはいけない。審査員の指示でソフトムチを持ったヘルパーは、テントから出て駆け足で中央ラインへと向かう。中央ラインに達したヘルパーは止まることなく方向変換して指導手と犬に標準を定めて大声を上げて激しく威嚇する。ヘルパーが40～30歩の距離に近づき、審査員が指示をしたら、指導手は犬に“攻撃防御、の命令をかけて発進させる。指導手は犬の発進後もその位置を移動してはならない。ヘルパーの攻撃に対して犬は躊躇することなく高い支配欲とエネルギーが強い咬捕で効果的に攻撃を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。

ヘルパーの負荷に対して、犬は屈しない態度とエネルギーで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は“**支配的で安定したグリップの持続を示してから、**放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで“放せ、の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は“試験失格、となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き(たとえ犬が吠えずに座っていても)“座れ、を命令して基本姿勢をとる。このときヘルパーからソフトムチを取り上げる(取り上げるタイミングはいつでもよい。犬の禁足中または基本姿勢の命令後、あるいはヘルパーを後退させて側面護送の開始前に要求して受け取る)。そしてヘルパーを審査員に引き渡すために約20歩の側面護送を行う。犬に“脚側行進、または“トランスポート、の命令をすることが許されている。犬はヘルパーと指導手の中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そのとき、ヘルパーを圧迫したり、飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。審査員の前で側面護送を停止する。犬は指示なしで座る。ソフトムチを審査員に手渡し“防衛、の終了を報告する。審査員の指示により脚側行進でヘルパーから5歩離れて基本姿勢をとる。リードを付けて審査結果の講評位置へ移動する。ヘルパーは審査員の指示で退場する。

c) 評価：

重要な評価基準：「エネルギーな防御と力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

監視状態の犬が「少し注意力に欠ける/少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない/強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら“Mangelhaft/不可、の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる/指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合“防衛、は中止される。

IPO 2

Fährten	追求	100点	
Unterordnung	服従	100点	
Schutzdienst	防衛	100点	合計 300点

IPO 2 "A" Fährten 追求

「他人による印跡」、「最低400歩」、「直線コース×3」、「コーナー×2（約90°）」、「物品×2」、「印跡後最低30分待機」、「作業制限時間15分」

追求コース	79点
物品（11+10）	21点
合計	100点

犬が物品を一つも発見できなかった場合、追求の評価は最高でも「Befriedigend/可、

【全般規定】

追求コースは担当審査員または追求会場の責任者が追求会場の地形を考慮して決定する。追求コースはさまざまなパターンを準備する。例えば『コーナーから物品までの距離がいつも同じ』等、このようなことをしてはならない。

出発地点の左側にはっきりとした目印を地面に差し立てなければならない。

追求作業のスタート順は印跡された後、審査員立ち会いのもと、くじ引きで決定する。

【追求会場】

追求作業は自然のあらゆる地表条件で行われる。例えば、草地、耕作地、森林地帯。さまざまな条件の追求会場がすべての試験段階において使用可能である。足跡が見える会場はできるだけ使用を避ける。

【印跡】

担当審査員または追求会場責任者の責務：

- 追求会場の割り振り
- 印跡者への指示
- 印跡された追求コースの監視

各追求コースは会場の地形に合わせて決定される。

印跡は自然な歩行で実行する。不自然で補助的な印跡は全追求コース（直線、コーナー、物品配置地点）でしてはならない。

印跡者は印跡前に審査員または追求会場の責任者に物品を提示する。物品は印跡者の臭いがよく付いたものを使用する（最低30分以上所持）。印跡者は出発点にしばらく立ち止まった後、通常の歩き方で指示された方向に歩き出す。引っ搔いて歩いたり、中断したりせずに印跡する。各直線コースは最低30歩なければならない。コーナーも通常の歩き方で印跡する。コーナー（約90°）においても、引っ搔いて歩いたり、中断するような歩行をしてはならない。ただし、コーナーに続く次のコースへの進入がスムーズに行えるように注意する（「追求コーナーの印跡、P.99参照」）。

印跡前に追求コースの下書（事前に立ち入って下見）をしてはならない。印跡中、指導手と犬は見えないところで待機していなければならない。

【物品配置】

第1物品は最低100歩進んだ第1コースまたは第2コースに置く。第2物品は追求コースの最終地点に置く。コーナーの前後20歩以内に物品を置いてはならない。物品は立ち止まらずに置く。最終物品を置いた後、印跡者はさらに数歩、同じ方向に進む。

【追求物品】

物品は印跡者の臭いがよく付いたものを使用する（最低30分以上所持）。素材の異なる2種類の物品でなければならない（素材の例：皮、繊維製品、木）。物品の大きさは長さ約10cm。幅2～3cm。厚さ0.5～1cm。色は地面と極端に違ってはいけない。

地区大会以上のIPO2、3、そしてFH試験の追求物品にはすべて番号が記入される。その番号は追求コースの番号と一致しなければならない。

チーム（指導手と犬）が適切な追求をするために、印跡の前後に審査員、印跡者、帯同者は追求会場に立ち入ってはいけない。

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Suchen／探す”

命令は出発点と第1物品発見後の再スタート時。そして“間違った物品指示”を行った場合の再スタート時に使用できる。

b) 追求作業の実行と評価：

指導手は犬に必要な装備の装着を申告前に済ませておく。犬には10mのリードを付けることができる（追求リードなしでもよい）。10mリードは首を絞めない状態の首輪に繋ぐ。指導手と犬は審査員のもとで基本姿勢をとり、犬が物品を発見したら『くわえ上げる』または『指示する』のどちらであるかを申告する。

追求リードは最低10mでなければならない。審査員による、リードの長さ、首輪および追求装備のチェックは試験の開始前にのみ行うことができる。「Rollleinen／巻き取り式のリード」を使用することはできない。

指導手は作業の開始前、追求を命じるとき、全追求作業中、あらゆる強制を犬にしてはならない。

【出発】

審査員の指示で、指導手は犬をゆっくりとそして静かに出発点へと導き追求を開始する。追求リードは、犬の背中の上、側面、またはわきの下、あるいは前足と後ろ足の両方の間を通す。または追求装備に繋ぐ（使用が可能なのは、胸部ハーネス、またはBöttchergeschirr／リードを繋ぐ部分が胸下にある一本式タイプ。これ以外にさらにベルト類を付けることはできない）。この準備のために出発点の約2m手前で短時間、犬を座らせてもよい。

犬は出発において確信的でなければならない（物品発見後の再スタート時も）。

リードは指導手によって、ある程度のゆとりが作られなければならない。

出発点で犬は集中した状態で静かにそして深い鼻使いで臭いを嗅ぎつけなければならない。臭いを嗅ぎつける際に指導手は“捜せ”の命令以外のあらゆる補助をしてはならない。審査員は、犬が出発でどれだけの時間、嗅ぎ取りに執着するかを見るのではなく、犬が出発でどれだけ強く嗅ぎ取ったのかを、第一コースでの追求態度で判断しなければならない。

出発で嗅ぎ取り（スタート）に3回失敗した場合、追求作業は中止される。

出発後も犬は深い鼻使いで安定したテンポと集中力を持続して追求コースを進まなければならない。指導手はリードの端を持ち10mの間隔をあけて進む。リードを緩ませてもよ

い。そのリードが地面に接触しても問題ない。しかし、大きくたるませて犬との間隔を短くしてはならない。リードなしで追求する場合も10mの間隔をあける。

【追求実行】

犬は「集中して」、「持続的に」、「できるだけ安定したテンポ（地形の難易度に応じた）」で追求作業を実行しなければならない。安定しており、説得力のある作業であれば、追求のテンポ「きびきびとした、あるいは、ゆっくりとした」は評価の基準とならない。指導手は必ずしも追求コースを踏み外すことなく歩く必要はない。

【コーナー】

コーナーにおいても犬は確実に足跡を追わなければならない。説得力があり足跡から体が離れなければ評価に影響しない。コーナーでの旋回は誤りである。コーナーを通過した後も犬は同じテンポで進まなければならない。コーナーの領域（前後も含む）においても可能な限り、指導手は犬との定められた間隔を保つ。

【物品の指示またはくわえ上げ】

犬は物品を発見したら、指導手の補助を受けることなく申告通りの方法で、直ちにくわえ上げるか、説得力のある指示を行う。くわえ上げる場合は、立ち姿勢、座る、あるいは指導手のもとに持ってくるのが可能である。犬が物品を持来するときは指導手は立ち止まる（犬の方に向かって歩いてはいけない）。指示は、伏せる、座る、または立ち姿勢で行うことができる（その指示姿勢が物品ごとに変わっても問題ない）。

犬が物品を指示、あるいはくわえ上げたら、指導手はリードを放して犬のもとに行き、発見した物品を高く持ち上げて審査員に示す。犬が指示した物品を拾い上げる、またはくわえ上げた物品を受け取る時の、指導手の立ち位置は犬の横でなければならない。

犬の指示態度に説得力があるならば、指示した物品に対して犬の体が少し斜めとなっても評価に影響しない。物品の横で指示したり、指導手の方向に体を強く傾けて指示することは誤りである。くわえ上げてさらに進んだり、くわえて伏せることは誤った行動である。“くわえ上げ、”と“指示、”の両方を行った場合は評価が下がる。指導手の強い補助によって発見した物品は通過（未発見）と見なされる。それは例えば『物品に対して指示をせず先に進もうとする犬を、指導手がリードの操作あるいは命令で物品に留め置いた場合』

犬は、指示またはくわえ上げを行った位置で再スタートまで静かに待たなければならない。再スタートの際、指導手は首輪または追求装備に連結されたリードを短く持ち“捜せ、”の命令で再び犬に追求を開始させる。

【追求コース逸脱】

追求コースから犬が逸脱することを指導手が防ごうとした場合、審査員は指導手に対して犬に追従するように指示する。指導手はその指示に従わなければならない。このとき、指導手が審査員の指示に従わなかったり、犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合（リードなしの場合も同じ）、追求作業は中止される。

【犬を褒める】 IPO-VOとIPO1でのみ追求作業中の犬を「ときどき褒める」ことができる

物品発見時に犬を短く褒めることができる（物品を拾い上げる前、あるいは物品を審査員に示してポケットに入れた後のいずれか一度だけ）。

【作業終了報告】

最終物品の発見後に、審査員のもとへ行き追求作業の終了報告を行う。基本姿勢をとり犬が発見した物品を提示する。その後、審査員の講評がなされ、評価と得点が発表される。審査員のもとへ行く際に遊んだりエサを与えたりしてはならない。

【評価】

セクションA “追求”の審査は出発の場面から開始される。

犬に期待するのは：適切な訓練による「説得力のある」、「集中した」、「持続力のある」嗅覚作業。

指導手は：任務実行中の犬の精神状態や体感状況を、犬の反応から正しく理解して犬が集中して追求作業ができる状況を保つように注意する。

審査員は犬だけを、あるいは指導手だけを見るのではなく「追求会場の状況」、「天候」、「追求コース以外の誘惑」、「進行時間」を観察しなければならない。それらすべての要因に基づいて評価が決定されなければならない。

➤ 追求態度（例：直線での追求テンポ、コーナーの前後、物品の前後）

➤ 訓練水準（例：落ち着きのない出発、意気消沈、逃避的）

➤ 指導手による補助は許されない

➤ 追求作業における困難

- ・ 地面の条件（密集したつる草、砂、地面の変化、肥料）

- ・ 風の条件

- ・ けもの道

- ・ 天候（暑さ、寒さ、雨、雪）

- ・ 天候の変化

評価はこれらの条件を考慮して決定されなければならない。

指導手と装備完了の犬が申告をした後、審査員は適確な審査位置に立つ、または追求作業を追尾する。そして、指導手が犬に対して何らかの影響を及ぼすような態度や命令を行っていないかを観察する。

犬との距離は作業中の犬に影響を及ぼさないように、そして指導手の邪魔にならないように配慮する。審査員は追求作業全体を体感しなければならない。

審査員は犬の作業がどれほど意欲的かつ確実であるか、あるいは不確実または粗略であるかを見極めて評価しなければならない。

「集中した」、「安定した」、「説得力」のある追求作業。犬がこのような肯定的な態度であれば「きびきびとした」あるいは「ゆっくりの」いわゆる“追求スピード”を差別評価する基準は特にない。

説得力のある態度で追求コースから離れなければ、追求中の犬が左右を少し確認しても評価に影響しない。「むだに嗅ぎ回る」、「排泄行為」、「コーナーでの旋回」、「指導手が絶え間なく励ます」、「追求中あるいは物品に対してのリードまたは声による補助行為」、「誤った物品のくわえ上げまたは指示」、「物品以外の物に指示を行った」これらはその度合いに応じて評価が下がる（それぞれ最大4点までの減点）。

「ひどくむだに嗅ぎ回る」、「集中力不足の追求」、「慌てた追求」、「排泄行為」、「ねずみ取りの仕草」およびこれらに類するものに関しては（それぞれ最大8点までの減点）。

犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合、追求作業は中止される。追求コースから逸脱する犬を指導手が引き止めようとした場合、審査員は犬に追従するように指導手に指示する。その指示に指導手が従わなかった場合、追求作業は中止される。

出発点から犬がスタートした後、「IPO1およびIPO2は15分以内」、「IPO3は20分以内」に最終地点に到達しなければ追求作業は中止される。中止となった地点まで

の評価／得点は与えられる。

犬が物品ごとに「くわえ上げ」と「指示」の異なった発見動作をすることは誤りである。発見動作は申告通りでなければならない。

「物品に対する誤った指示またはくわえ上げ」、「物品以外の物に指示を行った」その度合いに応じてそれぞれ最大4点までの減点（再スタートを行ったので）。物品以外の物に指示を行った犬が指導手の命令なしで直ぐに自発的に再スタートした場合は減点2点（再スタートを行っていないので）。

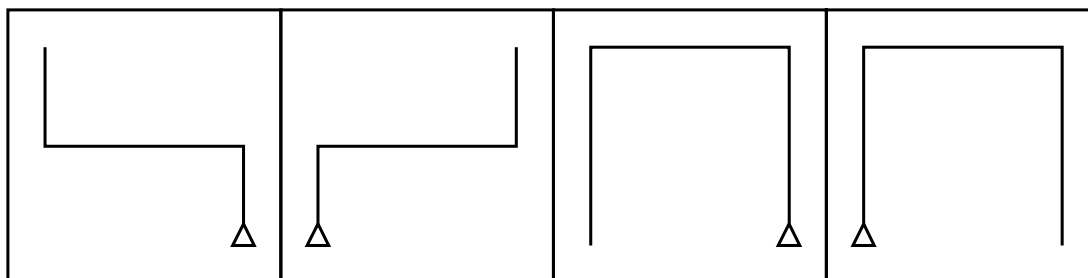
印跡者によって設置された物品を一つも発見できなかった場合、セクションA「追求」の評価は最高でも「Befriedigend／可」となる。物品未発見の場合、追求作業における課題の一つである「物品発見後の再スタート」を実行できないということを考慮しなければならない（物品発見後の再スタートにおける犬の態度を審査員が評価できない）。

追求中、野生動物の出現により、犬が狩猟本能行動を示したときに、指導手は犬に対して「伏せ」を命令することができる。犬がそれに従った場合は審査員の指示で追求作業は続行される。犬が従わなかった場合は試験は中止される（評価：不服従のために試験失格）。

【中止／失格】

行動・態度	結果・記録
出発地点において犬はスタートを3回失敗した。	「追求中止」
全段階に適用：犬が追求コースからリード分10m以上離れた場合。あるいは、コースを離脱した犬に追従するように審査員が指示したのに指導手が従わない。 犬が制限時間内に追求最終地点に到達できなかった。 IPO1、2 = 15分 IPO3 = 20分	「追求中止」 中止となった地点までの評価／得点が与えられる 審査講評は中止地点まで！
くわえ上げた物品を犬が放さない。 犬が野生動物を追いかけて再開不可能	「試験失格、不服従のため

【IPO2 追求コースパターン】



IPO 2 “B” Unterordnung 服従

課題 1 : 脚側行進 (リードなし)	10点
課題 2 : 常歩行進中の座れ	10点
課題 3 : 常歩行進中の伏せと招呼	10点
課題 4 : 常歩行進中の立止	10点
課題 5 : ダンベル持来 (1000g)	10点
課題 6 : 1m障害とダンベル持来 (650g)	15点
課題 7 : 斜壁とダンベル持来 (650g)	15点
課題 8 : 前進と伏せ	10点
課題 9 : 状況下での休止	10点
合計	100点

【全般規定】

指導手と『リードなしの犬』は、審査員のもとで基本姿勢をとり申告を行う。

服従で特に注意すべきこと：『自信を取り除かれて単に表面的に演技させられているだけで、犬が仕事をする事の喜びを無くしてしまっていないかを観察しなければならない』

全課題において犬は指導手の要求に対して集中して喜んで仕事をする。この喜んで実行するすべての仕事は同時に正確さも求められる。もちろん、それは評価の判断に影響する。

指導手がある課題の実行を忘れた場合（部分的ではなく）、審査員はそのことを指摘して未公開の課題実行を要求する。このことによる減点はない。

課題実行中にその課題のある部分を行わなかった場合は評価に影響する。

審査員は服従が開始されるまでに使用する用具を国際試験規定に照らし合わせて点検する。その用具は国際試験規定に適合していなければならない。

“脚側行進”と“状況下での休止”の実行中に発砲が行われる（口径6mm）。

審査員の指示で課題の実行が開始される。その後の方向変換、指示なし停座、歩度の変更、などは審査員の指示なしで実行する。

命令の規則は本規定書に明記されている。命令は普通に発音される短い一単語を使用する。どのような言語でも使用可能であるが、同じ動作を要求するための命令は常に同じでなければならない。指導手が命令を三回使用したにもかかわらず、犬が課題またはその課題の中で必要な動作が実行できなかった場合、その課題作業は中止され評価は与えられない（例外あり）。 “招呼”の命令は犬の名前に置き換えてもよい。犬の名前とそれ以外に何らかの命令も使用した場合はダブルコマンドと見なされる。

【課題開始】

各課題は審査員の指示によって開始される。

【基本姿勢】

もう一方の指導手と犬が“状況下での休止”位置で基本姿勢をとるタイミングに合わせて、出発点で脚側行進のための基本姿勢をとる。この2頭の基本姿勢から審査が開始される。

各課題は基本姿勢から開始して基本姿勢で終了する。基本姿勢での指導手はスポーツマン

らしく振る舞う。足は必要以上に広げずに自然に揃えて立つ。

基本姿勢は一度だけ許されている（やり直しや動作緩慢は評価が下がる）。指導手と犬は前方への動きを止めて基本姿勢をとる（指導手がステップバックして犬を後退させながらとる基本姿勢は誤り）。犬は「密着して」、「真っ直ぐに」、「静かに」、「注意して」指導手の左側で犬の肩と指導手の膝が揃うように座る。

犬を短く褒める行為は、各課題での終了基本姿勢を明確に示した後、基本姿勢のまま褒める。その後、指導手は新しい基本姿勢をとる。褒めることと次の新しい開始の間には、明確な約3秒の“間”を作らなければならない。

いわゆる“助走（犬と指導手の行進）”は基本姿勢から開始される。指導手（と犬）は助走中の最低10歩～最大15歩までの間で定められた課題を実行しなければならない。

指導手の正面に座った犬を移動させて基本姿勢をさせるとき、そして「座っている」、「立っている」、「伏せている」犬の右側に立ち次の行動命令を与える前に、明確な約3秒の“間”を作らなければならない。

何らかの姿勢で待っている犬のもとに指導手が行き、犬の右側に立つとき、犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

基本姿勢と助走での誤りはその課題の評価に影響する。

次の課題のために移動が必要なときも脚側行進を実行する。犬を自由にしたり、遊んだりしてはいけない。持来用のダンベルを取りに行くときも犬と一緒に行かななければならない。

指導手は反転ターンを必ず左回転で実行する（Uの字で歩くのではなく、その場で180度左回転する）。犬は左回転中の指導手の周囲を小回りしてくると回る。あるいは指導手との位置関係を変えずに指導手と同じ動作で頭を軸にして体を180度ひねる。

試験ではどちらかのパターンに統一されていなければならない。

犬が正面停座の後、基本姿勢の位置（指導手の左側）へ移動する際、指導手の後ろを小回りしてくると回る、あるいは頭を軸に体を180度ひねってのどちらでもよい。

障害の素材は堅く、高さ100cm、幅150cmとする。斜壁は幅150cm、長さ191cmの二枚の板が上部で連結されており、40度に広げて設置したときに頂点が地面から180cmとなるように設計されている。斜壁は全体に滑り止めの加工がされていなければならない。両壁面の上半部分にはそれぞれ3本ずつ、24mm×48mmの登坂補助の角材が取り付けられている。試験では全出場犬が同じ障害・斜壁を飛越しなければならない。

持来をともなう課題においては、木製ダンベルの使用だけが許されている。全出場者は主催者が準備したダンベルを使用しなければならない。持来をともなう課題の実行前にダンベルを犬にくわえさせてはいけない。

【課題の分割】

2部門で構成された課題「行進中の座れ」「行進中の伏せと招呼」「行進中の立止」「行進中の立止と招呼」これらは2分割されてそれぞれの区分が別々の評価を受ける。

a) “基本姿勢”～“助走”～“実行” = 5点

b) “実行後の態度”～“終了基本姿勢” = 5点

各課題に対する評価は“開始基本姿勢”から“終了基本姿勢”まで、犬の態度が注意深く観察されて決定される。

【追加の命令】

犬が3回の命令で課題を実行できなかった場合、その課題の評価は“M/不可、(0点)となる(例外あり)。区分課題において犬が3回目の命令で実行した場合、その区分評価は“M/不可、となる。

招呼のための命令“来い、”は犬の名前に置き換えてもよい。
犬の名前と何らかの命令も使用した場合はダブルコマンドと見なされる。

追加の命令に対する評価：

追加の命令1回(合計2回の命令)⇒ 課題の区分評価が“B/可、”となる

追加の命令2回(合計3回の命令)⇒ 課題の区分評価が“M/不可、”となる

例：区分課題5点

<p>正面停座から基本姿勢に移るための命令で犬は座ったまま。 第2の命令(追加の命令1回目)で犬は基本姿勢へと移動した。</p>	<p>区分評価“B/可、”=-1,5点 他に失敗がなければこの課題の評価はG/8,5点となる</p>
<p>前進中の犬が伏せの命令を無視して走った。第2の命令(追加の命令1回目)で犬は止まって座った。第3の命令(追加の命令2回目)で犬は直ちに伏せた。</p>	<p>区分評価“M/不可、”=-2,5点 他に失敗がなければこの課題の評価はB/7,5点となる</p>

IPO 2 B	1. 脚側行進(リードなし)	10点
---------	----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Fuß gehen/脚側行進、”

命令は歩き出すとき(出発と各停止後)と歩度を切り替えるときだけ使用できる。

方向変換時(反転ターン、右折、左折)に命令を使用した場合は評価が下がる。

b) 実行：(実施要領 P.100 参照)

指導手とリードなしの犬は審査員の前まで行き犬を座らせて申告をする。

その後、脚側行進で出発地点に行き基本姿勢をとる。審査員の指示でこの課題が開始される。正しい基本姿勢から“脚側行進、”の命令で、犬は「注意して」、「喜んで」、「真っ直ぐに」右肩甲部と指導手の左膝が揃う位置で歩く。

2012年から、すべての試験における脚側行進の実施要領は下記に統一される。

『常歩50歩』→『①左反転ターン』→『常歩10~15歩』→『駆け足10~15歩』→『ゆっくり歩く10~15歩』→『常歩に戻る』→『右折』→『約15歩』→『右折』→『約15歩』→『②左反転ターン』→『①指導手停止』→『左折』→『グループ内行進』→『グループ内で②指導手停止』→『出発点付近で終了基本姿勢(③指導手停止)』

駆け足からゆっくり歩くへの切り替えは中間歩度を設けずに行う(それぞれ最低10歩)。各歩調は明確に区別された速度で行う。指導手が停止したら犬は指示なしで素早く真っ直ぐに座る。グループは最低4人で構成されており静かに動いている。指導手と犬はグループの1人に対して右回り、他の1人に対して左回りを実行し、最低1回、指導手はグループ内で停止する。行進が不十分な場合、審査員はグループ内行進を繰り返すように要求することができる。審査員の指示でグループから離れて脚側行進で出発点に戻りこの課題の終了基本姿勢をとる。この終了基本姿勢を次の課題の開始基本姿勢としてもよい。

反転ターンを実行するとき、指導手は必ず左回転で行う(Uの字を歩いて行うのではなく

体を軸にしてその場で180度回れ左)。

このときの犬の動作は2パターン可能：

- － 犬は左回転中の指導手の周囲をくるっと回る（右回りで）。
- － 犬は指導手と同じ動作で頭を軸にして体を180度、左回転させる。

試験中はどちらかのパターンに統一されていること。

犬は常に肩甲骨と指導手の左膝が揃うポジションで歩く。前に出たり、遅れたり、離れて歩いてはならない。最初の直進を行進中に最低15歩の距離から5秒の間隔で2回の発砲が行われる（口径6mm）。犬は発砲に対して無関心でなければならない。犬が銃声シャイの場合、試験失格となり既得の点数はすべて剥奪される。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「前に出る」、「横に離れる」、「遅れる」、「座る動作が遅いまたは躊躇して座る」、「余分な命令」、「体を使った補助行為」、「各歩調の行進中の注意力に欠ける」、「注意力に欠ける方向変換」、「意気消沈」これらは度合いに応じて評価が下がる。

IPO 2 B	2. 常歩行進中の座れ	10点
---------	-------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進”、“Absitzen／座る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲骨が揃う位置で歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“座れ”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに座る。指導手はそのまま15歩進んで立ち止まり、静かに注意して座っている犬の方に向きを変える。審査員の指示で犬のもとに戻り犬の右側に立つ。このとき犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「座る動作が遅い」、「座っているときに落ち着きがない、注意力に欠ける」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が座らずに伏せるまたは立っている場合は減点5点となる。

座らなかったこと以外にも誤った態度がある場合は更なる減点対象となる。

IPO 2 B	3. 常歩行進中の伏せと招呼	10点
---------	----------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進”、“Ablegen／伏せる”、“Herankommen／招呼”、“in Gst gehen／基本姿勢に移る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲骨が揃う位置で歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“伏せ”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに伏せる。

指導手はそのまま30歩進んで立ち止まり、静かに注意して伏せている犬の方に向きを変える。審査員の指示で“招呼”の命令をする。または犬の名前を呼ぶ。犬は喜んで、スピーディに、一直線に指導手のもとに来て、接近して真っ直ぐに正面停座をする。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「伏せる動作が遅い」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手のもとへ来る速度が遅い」、「指導手のもとに来る途中で失速」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

“伏せ”の命令に対して犬が座るまたは立っている場合は減点5点となる。

IPO 2 B	4. 常歩行進中の立止	10点
---------	-------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進”、“Abstellen／立つ”、“Absitzen／座る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲部が揃う位置で歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“立て”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに立ち止まる。指導手はそのまま15歩進んで立ち止まり、静かに注意して立っている犬の方に向きを変える。審査員の指示で犬のもとに戻り犬の右側に立つ。このとき犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「立ち止まる動作が遅い」、「立っているときに落ち着きがない、注意力に欠ける」、「指導手が戻ってくる際に落ち着きがない」、「終了基本姿勢のための座る動作が遅い」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が立止を行わずに座るまたは伏せる場合は減点5点となる。

立止を行わなかった以外にも誤った態度がある場合は更なる減点対象となる。

IPO 2 B	5. ダンベル持来（1000g）	10点
---------	------------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Bringen／持来”、“Abgeben／受け渡す”、“in Gst gehen／基本姿勢に移る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手はダンベル（1000g）を約10m前方に投げる。ダンベルを投げる際に指導手は立ち位置を移動してはならない。ダンベルが静止したら“持来”の命令をする。静かに自主的に座っていた犬はスピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げてスピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し”の命令をかけるまで約3秒の“間”を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実

行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価 :

「基本姿勢での誤り」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「持ってくる速度が遅い」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は “mangelhaft/不可、”となる。犬がダンベルを持来できなかった場合はこの課題は0点となる。

IPO 2 B	6. 1m障害とダンベル持来 (650g)	15点
----------------	------------------------------	------------

a) 命令 : (下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Springen/飛越、” “Bringen/持来、” “Abgeben/受け渡す、” “in Gst gehen/基本姿勢に移る、”

b) 実行 :

指導手と犬は障害から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢とり、指導手はダンベル(650g)を1m障害の向こう側に投げる。ダンベルが静止したら“飛越、”の命令をする。静かに自主的に座っていた犬は“飛越、”と“持来、”の命令で障害を飛越し(持来の命令は犬がジャンプをしているときに与える)、スピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げて、直ちに障害を飛越し、スピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し、”の命令をかけるまで約3秒の“間、”を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る、”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価 :

「基本姿勢での誤り」、「ゆっくりとしたジャンプ」、「力強さに欠けるジャンプ(ためらい)」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「ゆっくりとした帰路ジャンプ」、「力強さに欠ける帰路ジャンプ(ためらい)」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。犬が障害に接触した場合はその都度1点までの減点。足を掛けた場合はその都度2点までの減点。

障害持来の点数分配 :

往路ジャンプ	ダンベル持来	帰路ジャンプ
5点	5点	5点

この3つの区分課題(往路ジャンプ-持来-帰路ジャンプ)の内、**最低1回のジャンプと“持来、”を行わなければ得点を得ることができない。**

- 往復のジャンプと持来に何の欠点もない。 = 15点
- 往路または復路のジャンプをしなかった。持来に欠点はない。 = 10点
- 往復のジャンプに欠点はない。しかし、持来しなかった。 = 0点

ダンベルが横に強く逸れたり、犬にとって見えにくいときは指導手が審査員に申し出るか、

あるいは審査員がそのことを指摘する。その場合は減点なしで投げ直しができるが、犬は座ったまま待機しなければならない。犬から離れる際は待てを命じてもよいが、投げ直しの際に犬を動かして新しい基本姿勢をとることはできない。待たせていた犬の右側に立ち、何の命令もせずに投げ直す。待機中の犬が障害の横をすり抜けて指導手を追いかけて行った場合、この課題は中止され0点となる。待機中の犬は動いてしまったが障害の手前で留まっている場合、続行可能であるが課題の評価が一つ下がる。

指導手の補助行為はたとえ立ち位置を変えずに行われたとしても度合いに応じて評価が下がる。終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は“mangelhaft/不可”となる。

往路ジャンプで強い接触により障害が倒れてしまった場合、この課題はやり直される（ただし、たとえやり直しで良いジャンプを行ったとしても、往路ジャンプの評価は“unteren mangelhaft/重い不可-4点”）。

ダンベル受け渡しの場面で、放せの命令を3回使用しても犬がダンベルを放さなかった場合は“試験失格”となりセクションB“服従”は中止される。

IPO 2 B	7. 斜壁とダンベル持来 (650g)	15点
---------	---------------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Springen/飛越”、“Bringen/持来”、“Abgeben/受け渡し”、“in Gst gehen/基本姿勢に移る”

b) 実行：

指導手と犬は斜壁から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢をとり、指導手はダンベル(650g)を斜壁の向こう側に投げる。静かに自主的に座っていた犬は“飛越”と“持来”の命令で斜壁を登り(持来の命令は犬が斜壁を登っているときに与える)、スピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げて、直ちに斜壁を登り、スピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し”の命令をかけるまで約3秒の“間”を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ゆっくりとした登り降り」、「力強さに欠ける登り降り」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「帰路でのゆっくりとした登り降り」、「帰路での力強さに欠ける登り降り」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

斜壁持来の点数分配：

往路の登り降り	ダンベル持来	帰路の登り降り
5点	5点	5点

この3つの区分課題(往路の登り降り-持来-帰路の登り降り)の内、最低1回の登り降りと“持来”を行わなければ得点を得ることができない。

往復の登り降りと持来に何の欠点もない。

= 15点

往路または復路の登り降りをしなかった。持来に欠点はない。 = 10点

往復の登り降りに欠点はない。しかし、持来しなかった。 = 0点

ダンベルが横に強く逸れたり、犬にとって見えにくいときは指導手が審査員に申し出るか、あるいは審査員がそのことを指摘する。その場合は減点なしで投げ直しができるが、犬は座ったまま待機しなければならない。犬から離れる際は待てを命じてもよいが、投げ直しの際に犬を動かして新しい基本姿勢をとることはできない。待たせていた犬の右側に立ち、何の命令もせずに投げ直す。

指導手の補助行為はたとえ立ち位置を変えずに行われたとしても度合いに応じて評価が下がる。終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は“mangelhaft/不可、”となる。

ダンベル受け渡しの場面で、放せの命令を3回使用しても犬がダンベルを放さなかった場合は“試験失格、”となりセクションB “服従、”は中止される。

IPO 2 B	8. 前進と伏せ	10点
---------	-----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Voraussenden/前進、” “Ablegen/伏せる、” “Aufsitzen/座る、”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は前進を実行する方向に脚側行進で真っ直ぐ歩く。10～15歩の地点において、指導手は立ち止まると同時に腕を上げて“前進、”の命令をする。犬はまるで目標があるかのようにひたむきに速いスピードで指示された方向に最低30歩前進する。審査員の指示で指導手は犬に“伏せ、”の命令を与える。それに対して犬は即座に伏せなければならない。指導手は犬が伏せるまで腕を上げ続けていてもよい。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で“座れ、”の命令をかける。犬は素早く座り終了基本姿勢をとる。

c) 評価：

「助走での誤り」、「指導手が犬と一緒に走る」、「前進するスピードが遅い」、「方向が横に強く逸れる」、「前進の距離が短い」、「ためらった伏せ」、「命令前に伏せる」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ/座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。

補助：例えば“前進のために、”あるいは“伏せのために、”追加の命令をかけた。このような場合も評価が下がる。

“伏せ、”の命令を3回かけても犬が全く止まらない場合、この課題は0点となる。

第2の命令で犬は直ちに伏せた《1回目の追加の命令》	- 1,5点
第3の命令で犬は直ちに伏せた《2回目の追加の命令》	- 2,5点
第1～第3のいずれかの命令で犬は伏せずに停止した。 第3の命令を与えられても、座っている、または、立っている。 例：第2の命令で立って止まった。第3の命令で座った。	- 3,5点

その他にも何らかの失敗がある場合は更に評価は下がる。犬が伏せた地点(または停止位置)から完全に離れた。あるいは指導手の方に戻ってきた場合、この課題は0点となる。

IPO 2 B	9. 状況下での休止	10点
---------	-------------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Ablegen／伏せる、 “Aufsitzen／座る、

b) 実行：

“服従、は2頭で行われる。1頭は出発点で脚側行進のための基本姿勢をとり、もう1頭は審査員が指示した位置で指導手とともに正しい基本姿勢をとる。審査員の指示で“伏せ、の命令をかけて犬を伏せさせる。リードや何らかの物品を犬の側に置くことなく指導手は振り向かず離れて試験会場内の最低30歩離れた地点で犬に背を向けて立つ(一般的には防衛の隠れ場所として設置されたテントの近く)。ペアのもう1頭の犬が課題1～7を実行している間、犬は指導手の影響を受けることなく静かに伏せていなければならない。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で“座れ、の命令をかける。犬は素早く真っ直ぐに座り終了基本姿勢をとる。

c) 評価：

「指導手に落ち着きがない、こっそり犬に指示をする」、「伏せている犬に落ち着きがない」または「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ／座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。

場所を移動せずに立ち上がるまたは座った場合にはその失敗分を差し引いた評価がされる。ペアのもう1頭の犬が課題4を実行し終えるまでに伏せていた位置から3m以上移動した場合はこの課題の評価は0点となる。ペアのもう1頭の犬が課題4を実行し終えた後で伏せている位置から3m以上移動した場合はそれまでの休止分だけが評価される。指導手が犬のもとに行くときに犬が立ち上がって指導手の方に来た場合は最大3点までの減点。

IPO 2 "C" Schutzdienst 防衛

課題 1 : パトロール (4ヶ所)	5点
課題 2 : 禁足と咆哮 (5+5)	10点
課題 3 : ヘルパーの逃走阻止	10点
課題 4 : 禁足から防御	20点
課題 5 : 背面護送	5点
課題 6 : 背面護送から奇襲	30点
課題 7 : ヘルパーの遠距離攻撃阻止	20点
合計	100点

【全般規定】

セクションC "防衛" に適した広さの会場 (例えば公式サッカーグラウンド105m×70m) に左右3ヶ所、合計6ヶ所の "隠れ場所" が設置されている (防衛設営 P.102 参照)。IPO2では3番～6番テント (4ヶ所) を使用する。指導手、審査員そしてヘルパーが作業実行のために必要な目印はよく見えるようにマーキングされていなければならない。

記者注『ヘルパーの "隠れ場所" は材質や形は限定されていませんが、世界中で一般的に三角すいのテントが使用されているので本規定書では "テント" に統一しました』

【防衛ヘルパー／防衛着衣】

ヘルパーは防衛着衣、防衛片袖、ソフトムチ (ステッキ状) を装備する。防衛片袖は犬が咬捕するのに適した部分が設けられ、着色されていない黄麻繊維製のカバーで覆われたものを使用しなければならない。ヘルパーは常に犬の動きを注視する。禁足場面において必要であれば犬を刺激することなく静かに動いてもよい。ただし、犬が興奮するような態度や抵抗するようなことをしてはならない。万が一のときヘルパーは防衛片袖で身の安全を守る。

試験は1人のヘルパーで行うことができる (どの試験段階でも)。ただし、一試験段階に**7頭以上**の受験があるとき、あるいは地区大会以上の競技会では、必ず2名のヘルパーで行わなければならない。各試験段階の出場犬は全犬、同じヘルパーで受験しなければならない (2名の場合も)。

例外: ヘルパー自身も試験出場者である場合、その1回に限りヘルパーの交代が許される。
(ローカル試験のみ)

【申告】

- 指導手はリードなしの犬とともに審査員のもとで基本姿勢をとり申告をする。
- "パトロールの出発地点" に移動して開始基本姿勢をとる。
- 審査員の指示により、その基本姿勢から方向を定めてパトロールを開始する。

【備考】

申告が規定通りに行えない。例えば犬がコントロール不能となり、その場から、あるいはヘルパーのいるテントへと走り出してしまったとき、指導手は犬に呼び戻しの命令を3回かけることができる。この3回の命令で犬が指導手のもとに帰ってこないときは "不服従により試験失格" となりセクションC "防衛" は中止される。

指導手が犬を掌握できない。犬が防衛片袖を放さない。あるいは指導手が命令以外の方法

で放させた（例えば犬を触って）。防衛片袖以外のヘルパーの体（着衣）を咬んだ。これらの行動をした場合「試験失格」となる。「TSB」評価は与えられない。

【マーキング】

国際試験規定に定められたマーキングは、指導手、審査員、ヘルパーによく見えるように印されなければならない。》そのマーキングとは

- 》 隠れ場所で禁足咆哮中の犬を呼び戻すときの指導手の立ち位置
- 》 ヘルパーの逃走開始地点と逃走終了地点
- 》 ヘルパーの逃走阻止における犬の待機位置
- 》 ヘルパーの遠距離攻撃阻止における指導手と犬の待機位置

防衛課題（咬捕）を拒む、あるいは咬捕を放して再び咬捕をしなかった場合、セクションCは中止される。「防衛」の評価／得点は与えられない。「TSB」評価は「ng」となる。

各咬捕において、審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令ができる。

第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。

《Ablassen／放す》 評価一覧表

第1の命令で	第2の命令で	第2の命令で	第3の命令で	第3の命令で	第3の命令で
ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	放さない あるいは命令以外の方法で放した
程度に応じて減点 0,5～3	減点 3	程度に応じて減点 3,5～6	減点 6	程度に応じて減点 6,5～9	試験失格

IPO 2 C	1. パトロール	5点
----------------	-----------------	-----------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

「Revieren／パトロール」、「Herankommen／呼び寄せ」

「犬の名前」と「呼び寄せ」の命令を連結して使用してもよい。例：「太郎来い」

b) 実行：（4ヶ所：出発は2番と3番の中間点→3番テント→4番テント→5番テント→最終6番テント）

ヘルパーは犬から見えなように6番（最終）テントの中にいる。指導手とリードなしの犬は4ヶ所のテントをパトロールするために、2番テントと3番テントの中間地点に行き基本姿勢をとる。審査員の指示で、短い「パトロール」の命令と左右いずれかの腕による指示で（この動作は1テントごとに繰り返すことができる）、犬は目標を定めてスピーディに3番テントへ走り、なるべく小回りで注意してテントを回る。テントの側面に犬が出てきたら「呼び寄せ」の命令で呼び寄せて、犬の動きを止めることなく、新たな「パトロール」の命令で次のテントへと向かわせる。指導手はこの一連の動作実行中、中央ライン上を歩いて進み、横に逸れてはいけない。犬は常に指導手の前方を横切るように走らなければならない。最終テントに犬が到達したら指導手は立ち止まり、命令を与えたり指示をしたりしてはいけない。

c) 評価：

「犬が操縦性に欠ける」、「迅速性に欠ける」、「目標が定まらない」、「テントを大回り」、「テントに対して注意不足」これらは度合いに応じて評価が下がる。

パトロールにおける誤り：

- 開始基本姿勢において「落ち着きがない」、「注意力に欠ける」。
- 余分な命令または指示。
- 指導手の進路が中央ラインをキープしていない。
- 指導手が普通で歩行しない。
- 大きすぎるパトロール。
- 指導手の命令によってではなく犬が自動的にパトロールをしている。
- テントを回らない。テントを回る際に注意力に欠ける
- 犬の操縦性と服従性が欠けている。

最終テントに向かう場面で命令を3回使用しても犬が最終テントに到達できず、ヘルパーを発見できなかった場合、防衛は中止される。パトロール中に指導手が犬を呼び、犬が基本姿勢の位置（犬の姿勢は何であれ）に来てパトロールが中断した場合、防衛は中止される。（記録は「中止」得点なし／防衛以外の既得の点数は残る／TSB評価は与えられない）

IPO 2 C	2. 禁足と咆哮	(5+5) 10点
---------	-----------------	-----------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Herankommen／呼び寄せ”と、in Gst gehen／基本姿勢に移る、を連結して使用する

連結命令の例：“コイアトエ、（コイで呼んで犬が手元に来てからアトエはダメ）”

b) 実行：

犬はヘルパーに対して「集中力のある禁足」と「持続性のある咆哮」を積極的に実行しなければならない。ヘルパーに飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。咆哮開始から約20秒後、審査員の指示で指導手はテントから5歩の位置に立つ（ヘルパーに対峙する犬の背後）。審査員の指示により連結命令で犬を呼び寄せて基本姿勢をとる。

審査員の指示で指導手はヘルパーにテントの外に出るように要求する。ヘルパーはマーキングされた逃走開始地点へと移動する。このとき犬は基本姿勢で静かに注意して座ってなければならない。

c) 評価：

犬は呼ばれるまで“厳しい咆哮、”と“圧力のある禁足、”を行う。それらが不足していたり持続性に欠けたり、審査員や歩み寄ってきた指導手を気にする場合は度合いに応じて評価が下がる。

咆哮の評価：連続的な咆哮に対して5点が与えられる。弱い咆哮（圧力不足、エネルギーに欠ける）、連続性に欠ける咆哮は2点までの減点。「吠えない」しかし犬は積極的に集中してヘルパーを禁足していた場合、咆哮は0点となるが禁足には5点が与えられる。

ヘルパーにからむ行為、例えばついたり、飛びついたり等は2点までの減点。防衛片袖を強く咬んだ場合は9点までの減点。犬が防衛片袖を咬んで放さない場合、指導手は5歩の位置から“呼び寄せ+基本姿勢に移る、この連結命令を1度だけ使用できる（“放せ、”の命令をしてはいけない）。この1回限りの命令で、防衛片袖を放して指導手のもとに来ない場合は“試験失格、”となり防衛は中止される。防衛片袖を放して指導手のもとに来れば防衛は続行できるが、この課題評価は Mangelhaft／不可（-9点）となる。犬が故意にヘルパーの防衛片袖以外の部分を（突くではなく）咬んだ場合 “試験失格、”となる。

審査員が指導手に来るように指示する前に、犬がヘルパーを見放して中央ライン上にいる指導手のもとに戻ろうとした場合、もう一度ヘルパーのもとへ行くように命令できる。へ

ヘルパーのもとに留まれば「防衛」は続行されるが禁足と咆哮の評価は「unteren Mangelhaft/重い不可（-9点）」となる。もう一度ヘルパーのもとに行くように命令された犬が行くことを嫌がったり、行ったはいいがまたヘルパーを見放した場合、「防衛」は中止される。審査員の指示後、指導手が最終テントに向かって歩いているとき、あるいは5歩の位置からの「呼び寄せ」の命令前に犬が勝手に指導手のもとに来た場合、禁足と咆哮は「Mangelhaft/不可」の範囲内で評価される。

IPO 2 C	3. ヘルパーの逃走阻止	10点
---------	--------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

「Fuß gehen/脚側行進」、「Ablegen/伏せる、

「Abwehren (Stell oder Voran)/防御（阻止または前進）」、「Ablassen/放す、

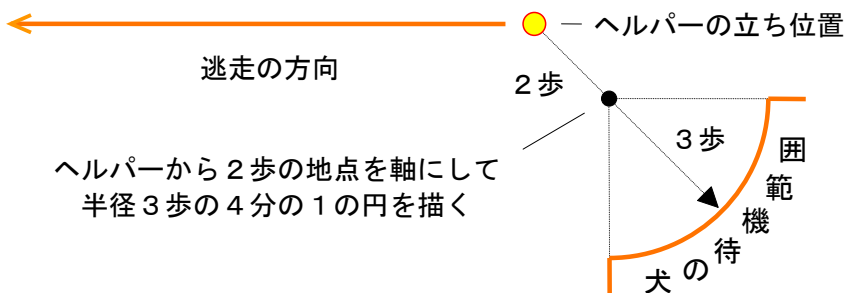
b) 実行：

審査員の指示で指導手はヘルパーにテントの外に出るように要求する。ヘルパーは普通の歩度で逃走開始地点へ移動する。審査員の指示で指導手と犬は待機位置に移動する。

このとき犬は指導手の左側で落ち着いて離れずに歩く。

指導手と犬は待機位置で「伏せ」の命令前に基本姿勢をとる。このとき犬は真っ直ぐに静かに座る。「伏せ」の命令で犬は直ちに素早く伏せる。そして静かに確実にヘルパーを監視する。指導手はテントに戻り、犬とヘルパーそして審査員が見える位置に立つ。

ヘルパーの立ち位置から犬の待機位置までの距離は5歩。



審査員の指示でヘルパーは逃走を開始する。

ヘルパーが走り出したと同時に、指導手は「阻止せよ、または「前へ、を犬に命令する。

犬は躊躇することなく高い支配欲とエネルギーかつ力強い咬捕で効果的に逃走を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は「支配的で安定したグリップの持続を示してから、放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

c) 評価：

重要な評価基準：「高い支配欲」、「素早くエネルギーな反応と追補」、「力強い咬捕」、「落ち着いた咬捕での効果的な逃走阻止」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの逃走に対して犬は待機位置で伏せたまま。あるいは約20歩以内に追捕できない。または咬捕を保持できずに逃走を阻止できなかった場合「防衛」は中止される。監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

指導手が「逃走阻止の発進命令」を犬に与えなかった場合、課題評価が一つ下がる。

IPO 2 C	4. 禁足から防御	20点
---------	------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Ablassen／放す” “in Gst gehen／基本姿勢に移る”

b) 実行：

逃走阻止の咬捕を放して約5秒後、審査員の指示でヘルパーは禁足中の犬に対して攻撃を仕掛ける。犬は指導手の指示なしでエネルギーかつ力強く咬捕して防御する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで脅しながら攻め立てる。この場面でソフトムチによる負荷テストが2回実行される。負荷テストは肩部とキ甲部にのみ行われる。負荷に対する犬の活力と安定性は特に注意して観察される。負荷に対して犬は屈しない態度とエネルギーで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は「**支配的で安定したグリップの持続を示してから**」放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き(たとえ犬が吠えずに座っていても)「座れ」を命令して基本姿勢をとる。

このときヘルパーからソフトムチを取り上げない。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早い力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの負荷に耐えきれず防衛片袖を放して再び咬捕をしなかった場合「防衛」は中止される。監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら「Mangelhaft／不可」の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

IPO 2 C	5. 背面護送	5点
---------	----------------	-----------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Fuß gehen／脚側行進” (例：“Fuß／アトエ” または “Transport／トランスポート”)

b) 実行：

課題4 “禁足から防御、の終了基本姿勢から、審査員の指定した方向に約30歩の背面護送を行う。指導手はヘルパーに先に歩くように要求する。指導手と犬はヘルパーの5歩後方で脚側行進をする。護送中、犬はヘルパーに対して注意して監視する。ヘルパーとの5歩の間隔は終始維持されなければならない。

c) 評価：

度合いに応じて評価が下がる重要な判断基準：
ヘルパーを注意して監視する。正しい脚側行進。5歩の間隔維持。

IPO 2 C	6. 背面護送から奇襲	30点
---------	-------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Ablassen／放す、“in Gst gehen／基本姿勢に移る、 “Fuß gehen／脚側行進、

b) 実行：

背面護送中、審査員の指示でヘルパーは止まることなく振り返って犬を奇襲する。指導手の指示なしで犬は躊躇することなく、エネルギーが強く咬捕して防御する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。犬が防御のために発進した瞬間、指導手は立ち止まる。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は“支配的で安定したグリップの持続を示してから、放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで“放せ、の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は“試験失格、となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き（たとえ犬が吠えずに座っていても）“座れ、を命令して基本姿勢をとる。このときヘルパーからソフトムチを取り上げる（取り上げるタイミングはいつでもよい。犬の禁足中または基本姿勢の命令後、あるいはヘルパーを後退させて側面護送の開始前に要求して受け取る）。そしてヘルパーを審査員に引き渡すために約20歩の側面護送を行う。犬に“脚側行進、または“トランスポート、の命令をすることが許されている。犬はヘルパーと指導手の中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そのとき、ヘルパーを圧迫したり、飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。審査員の前で側面護送を停止する。犬は指示なしで座る。ソフトムチを審査員に手渡し“第1作業の終了、を報告する。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早い力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。
監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら“Mangelhaft／不可、の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合“防衛、は中止される。

IPO 2 C	7. ヘルパーの遠距離攻撃阻止	20点
---------	-----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Absitzen/座る”、“Abwehren/攻撃を防御”、“Ablassen/放す”、“in Gst gehen/基本姿勢に移る”、“Fuß gehen/脚側行進”

b) 実行：

指導手と犬はマーキングされた待機地点に移動する(1番テントと2番テントの中間地点)。このとき犬は指導手の左側で落ち着いて離れずに歩く。待機地点に到着したら向き直り、犬に“座れ”を命じて基本姿勢をとる。このとき犬は真っ直ぐに静かに座る。首輪を持ってよいが犬の興奮をかき立ててはいけない。審査員の指示でソフトムチを持ったヘルパーは、テントから出て駆け足で中央ラインへと向かう。中央ラインに達したヘルパーは止まることなく方向変換して指導手と犬に標準を定めて大声を上げて激しく威嚇する。ヘルパーが50～40歩の距離に近づき、審査員が指示をしたら、指導手は犬に“攻撃防御”の命令をかけて発進させる。指導手は犬の発進後もその位置を移動してはならない。ヘルパーの攻撃に対して犬は躊躇することなく高い支配欲とエネルギーが強い咬捕で効果的に攻撃を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。

ヘルパーの負荷に対して、犬は屈しない態度とエネルギーで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は“**支配的で安定したグリップの持続を示してから**”放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで“放せ”の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は“試験失格”となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き(たとえ犬が吠えずに座っていても)“座れ”を命令して基本姿勢をとる。このときヘルパーからソフトムチを取り上げる(取り上げるタイミングはいつでもよい。犬の禁足中または基本姿勢の命令後、あるいはヘルパーを後退させて側面護送の開始前に要求して受け取る)。そしてヘルパーを審査員に引き渡すために約20歩の側面護送を行う。犬に“脚側行進”または“トランスポート”の命令をすることが許されている。犬はヘルパーと指導手の中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そのとき、ヘルパーを圧迫したり、飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。審査員の前で側面護送を停止する。犬は指示なしで座る。ソフトムチを審査員に手渡し“防衛”の終了を報告する。審査員の指示により脚側行進でヘルパーから5歩離れて基本姿勢をとる。リードを付けて審査結果の講評位置へ移動する。ヘルパーは審査員の指示で退場する。

c) 評価：

重要な評価基準：「エネルギーな防御と力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

監視状態の犬が「少し注意力に欠ける/少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない/強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら“Mangelhaft/不可”の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる/指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合“防衛”は中止される。

IPO 3

Fährten	追求	100点	
Unterordnung	服従	100点	
Schutzdienst	防衛	100点	合計 300点

IPO 3 "A" Fährten 追求

「他人による印跡」、「最低600歩」、「直線コース×5」、「コーナー×4（約90°）」、「物品×3」、「印跡後最低60分待機」、「作業制限時間20分」

追求コース	79点
物品（7+7+7）	21点
合計	100点

犬が物品を一つも発見できなかった場合、追求の評価は最高でも「Befriedigend/可、

【全般規定】

追求コースは担当審査員または追求会場の責任者が追求会場の地形を考慮して決定する。追求コースはさまざまなパターンを準備する。例えば『コーナーから物品までの距離がいつも同じ』等、このようなことをしてはならない。

出発地点の左側にはっきりとした目印を地面に差し立てなければならない。

追求作業のスタート順は印跡された後、審査員立ち会いのもと、くじ引きで決定する。

【追求会場】

追求作業は自然のあらゆる地表条件で行われる。例えば、草地、耕作地、森林地帯。さまざまな条件の追求会場がすべての試験段階において使用可能である。足跡が見える会場はできるだけ使用を避ける。

【印跡】

担当審査員または追求会場責任者の責務：

- 追求会場の割り振り
- 印跡者への指示
- 印跡された追求コースの監視

各追求コースは会場の地形に合わせて決定される。

印跡は自然な歩行で実行する。不自然で補助的な印跡は全追求コース（直線、コーナー、物品配置地点）でしてはならない。

印跡者は印跡前に審査員または追求会場の責任者に物品を提示する。物品は印跡者の臭いがよく付いたものを使用する（最低30分以上所持）。印跡者は出発点にしばらく立ち止まった後、通常の歩き方で指示された方向に歩き出す。引っ搔いて歩いたり、中断したりせずに印跡する。各直線コースは最低30歩なければならない。コーナーも通常の歩き方で印跡する。コーナー（約90°）においても、引っ搔いて歩いたり、中断するような歩行をしてはならない。ただし、コーナーに続く次のコースへの進入がスムーズに行えるように注意する（「追求コーナーの印跡、P.99参照」）。

印跡前に追求コースの下書（事前に立ち入って下見）をしてはならない。印跡中、指導手と犬は見えないところで待機していなければならない。

【物品配置】

第1物品は最低100歩進んだ第1コースまたは第2コースに置く。第2物品は審査員の指示のもと第2または第3コースに置く。コーナーの前後20歩以内に物品を置いてはならない。第3物品は追求コースの最終地点に置く。物品は立ち止まらずに置く。最終物品を置いた後、印跡者はさらに数歩、同じ方向に進む。

【追求物品】

物品は印跡者の臭いがよく付いたものを使用する（最低30分以上所持）。素材の異なる3種類の物品でなければならない（素材の例：皮、繊維製品、木）。物品の大きさは長さ約10cm。幅2～3cm。厚さ0.5～1cm。色は地面と極端に違ってはいけない。

地区大会以上のIPO2、3、そしてFH試験の追求物品にはすべて番号が記入される。その番号は追求コースの番号と一致しなければならない。

チーム（指導手と犬）が適切な追求をするために、印跡の前後に審査員、印跡者、帯同者は追求会場に立ち入ってはいけない。

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Suchen／探す”

命令は出発点と第1物品と第2物品の発見後の再スタート時。そして“間違った物品指示”を行った場合の再スタート時に使用できる。

b) 追求作業の実行と評価：

指導手は犬に必要な装備の装着を申告前に済ませておく。犬には10mのリードを付けることができる（追求リードなしでもよい）。10mリードは首を絞めない状態の首輪に繋ぐ。指導手と犬は審査員のもとで基本姿勢をとり、犬が物品を発見したら『くわえ上げる』または『指示する』のどちらであるかを申告する。

追求リードは最低10mでなければならない。審査員による、リードの長さ、首輪および追求装備のチェックは試験の開始前にのみ行うことができる。「Rollleinen／巻き取り式のリード」を使用することはできない。

指導手は作業の開始前、追求を命じるとき、全追求作業中、あらゆる強制を犬にはしてはならない。

【出発】

審査員の指示で、指導手は犬をゆっくりとそして静かに出発点へと導き追求を開始する。追求リードは、犬の背中の上、側面、またはわきの下、あるいは前足と後ろ足の両方の間を通す。または追求装備に繋ぐ（使用が可能なのは、胸部ハーネス、またはBöttchergeschirr／リードを繋ぐ部分が胸下にある一本式タイプ。これ以外にさらにベルト類を付けることはできない）。この準備のために出発点の約2m手前で短時間、犬を座らせてもよい。

犬は出発において確信的でなければならない（物品発見後の再スタート時も）。

リードは指導手によって、ある程度のゆとりが作られなければならない。

出発点で犬は集中した状態で静かにそして深い鼻使いで臭いを嗅ぎつけなければならない。臭いを嗅ぎつける際に指導手は“捜せ”の命令以外のあらゆる補助をしてはならない。審査員は、犬が出発でどれだけ時間、嗅ぎ取りに執着するかを見るのではなく、犬が出発でどれだけ強く嗅ぎ取ったのかを、第一コースでの追求態度で判断しなければならない。

出発で嗅ぎ取り（スタート）に3回失敗した場合、追求作業は中止される。

出発後も犬は深い鼻使いで安定したテンポと集中力を持続して追求コースを進まなければ

ならない。指導手はリードの端を持ち10mの間隔をあけて進む。リードを緩ませてもよい。そのリードが地面に接触しても問題ない。しかし、大きくたるませて犬との間隔を短くしてはならない。リードなしで追求する場合も10mの間隔をあける。

【追求実行】

犬は「集中して」、「持続的に」、「できるだけ安定したテンポ（地形の難易度に応じた）」で追求作業を実行しなければならない。安定しており、説得力のある作業であれば、追求のテンポ「きびきびとした、あるいは、ゆっくりとした」は評価の基準とならない。指導手は必ずしも追求コースを踏み外すことなく歩く必要はない。

【コーナー】

コーナーにおいても犬は確実に足跡を追わなければならない。説得力があり足跡から体が離れなければ評価に影響しない。コーナーでの旋回は誤りである。コーナーを通過した後も犬は同じテンポで進まなければならない。コーナーの領域（前後も含む）においても可能な限り、指導手は犬との定められた間隔を保つ。

【物品の指示またはくわえ上げ】

犬は物品を発見したら、指導手の補助を受けることなく申告通りの方法で、直ちにくわえ上げるか、説得力のある指示を行う。くわえ上げる場合は、立ち姿勢、座る、あるいは指導手のもとに持ってくるのが可能である。犬が物品を持来するときは指導手は立ち止まる（犬の方に向かって歩いてはいけない）。指示は、伏せる、座る、または立ち姿勢で行うことができる（その指示姿勢が物品ごとによっても問題ない）。

犬が物品を指示、あるいはくわえ上げたら、指導手はリードを放して犬のもとに行き、発見した物品を高く持ち上げて審査員に示す。犬が指示した物品を拾い上げる、またはくわえ上げた物品を受け取る時の、指導手の立ち位置は犬の横でなければならない。

犬の指示態度に説得力があるならば、指示した物品に対して犬の体が少し斜めとなっても評価に影響しない。物品の横で指示したり、指導手の方向に体を強く傾けて指示することは誤りである。くわえ上げてさらに進んだり、くわえて伏せることは誤った行動である。“くわえ上げ、”と“指示、”の両方を行った場合は評価が下がる。指導手の強い補助によって発見した物品は通過（未発見）と見なされる。それは例えば『物品に対して指示をせず先に進もうとする犬を、指導手がリードの操作あるいは命令で物品に留め置いた場合』

犬は、指示またはくわえ上げを行った位置で再スタートまで静かに待たなければならない。再スタートの際、指導手は首輪または追求装備に連結されたリードを短く持ち“捜せ、”の命令で再び犬に追求を開始させる。

【追求コース逸脱】

追求コースから犬が逸脱することを指導手が防ごうとした場合、審査員は指導手に対して犬に追従するように指示する。指導手はその指示に従わなければならない。このとき、指導手が審査員の指示に従わなかったり、犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合（リードなしの場合も同じ）、追求作業は中止される。

【犬を褒める】 IPO-V0とIPO1でのみ追求作業中の犬を「ときどき褒める」ことができる

物品発見時に犬を短く褒めることができる（物品を拾い上げる前、あるいは物品を審査員に示してポケットに入れた後のいずれか一度だけ）。

【作業終了報告】

最終物品の発見後に、審査員のもとへ行き追求作業の終了報告を行う。基本姿勢をとり犬が発見した物品を提示する。その後、審査員の講評がなされ、評価と得点が発表される。

審査員のもとへ行く際に遊んだりエサを与えたりしてはならない。

【評価】

セクションA “追求” の審査は出発の場面から開始される。

犬に期待するのは：適切な訓練による「説得力のある」、「集中した」、「持続力のある」嗅覚作業。

指導手は：任務実行中の犬の精神状態や体感状況を、犬の反応から正しく理解して犬が集中して追求作業ができる状況を保つように注意する。

審査員は犬だけを、あるいは指導手だけを見るのではなく「追求会場の状況」、「天候」、「追求コース以外の誘惑」、「進行時間」を観察しなければならない。それらすべての要因に基づいて評価が決定されなければならない。

- 追求態度（例：直線での追求テンポ、コーナーの前後、物品の前後）
- 訓練水準（例：落ち着いた出発、意気消沈、逃避的）
- 指導手による補助は許されない
- 追求作業における困難
 - ・ 地面の条件（密集したつる草、砂、地面の変化、肥料）
 - ・ 風の条件
 - ・ けもの道
 - ・ 天候（暑さ、寒さ、雨、雪）
 - ・ 天候の変化

評価はこれらの条件を考慮して決定されなければならない。

指導手と装備完了の犬が申告をした後、審査員は適確な審査位置に立つ、または追求作業を追尾する。そして、指導手が犬に対して何らかの影響を及ぼすような態度や命令を行っていないかを観察する。

犬との距離は作業中の犬に影響を及ぼさないように、そして指導手の邪魔にならないように配慮する。審査員は追求作業全体を体感しなければならない。

審査員は犬の作業がどれほど意欲的かつ確実であるか、あるいは不確実または粗略であるかを見極めて評価しなければならない。

「集中した」、「安定した」、「説得力」のある追求作業。犬がこのような肯定的な態度であれば「きびきびとした」あるいは「ゆっくりの」いわゆる “追求スピード” を差別評価する基準は特にない。

説得力のある態度で追求コースから離れなければ、追求中の犬が左右を少し確認しても評価に影響しない。「むだに嗅ぎ回る」、「排泄行為」、「コーナーでの旋回」、「指導手が絶え間なく励ます」、「追求中あるいは物品に対してのリードまたは声による補助行為」、「誤った物品のくわえ上げまたは指示」、「物品以外の物に指示を行った」これらはその度合いに応じて評価が下がる（それぞれ最大4点までの減点）。

「ひどくむだに嗅ぎ回る」、「集中力不足の追求」、「慌てた追求」、「排泄行為」、「ねずみ取りの仕草」およびこれらに類するものに関しては（それぞれ最大8点までの減点）。

犬が追求コースからリード分10m以上離れてしまった場合、追求作業は中止される。追求コースから逸脱する犬を指導手が引き止めようとした場合、審査員は犬に追従するように指導手に指示する。その指示に指導手が従わなかった場合、追求作業は中止される。

出発点から犬がスタートした後、「IPO1およびIPO2は15分以内」、「IPO3は20分以内」に最終地点に到達しなければ追求作業は中止される。中止となった地点までの評価／得点は与えられる。

犬が物品ごとに「くわえ上げ」と「指示」の異なった発見動作をすることは誤りである。発見動作は申告通りでなければならない。

「物品に対する誤った指示またはくわえ上げ」、「物品以外の物に指示を行った」その度合いに応じてそれぞれ最大4点までの減点（再スタートを行ったので）。物品以外の物に指示を行った犬が指導手の命令なしで直ぐに自発的に再スタートした場合は減点2点（再スタートを行っていないので）。

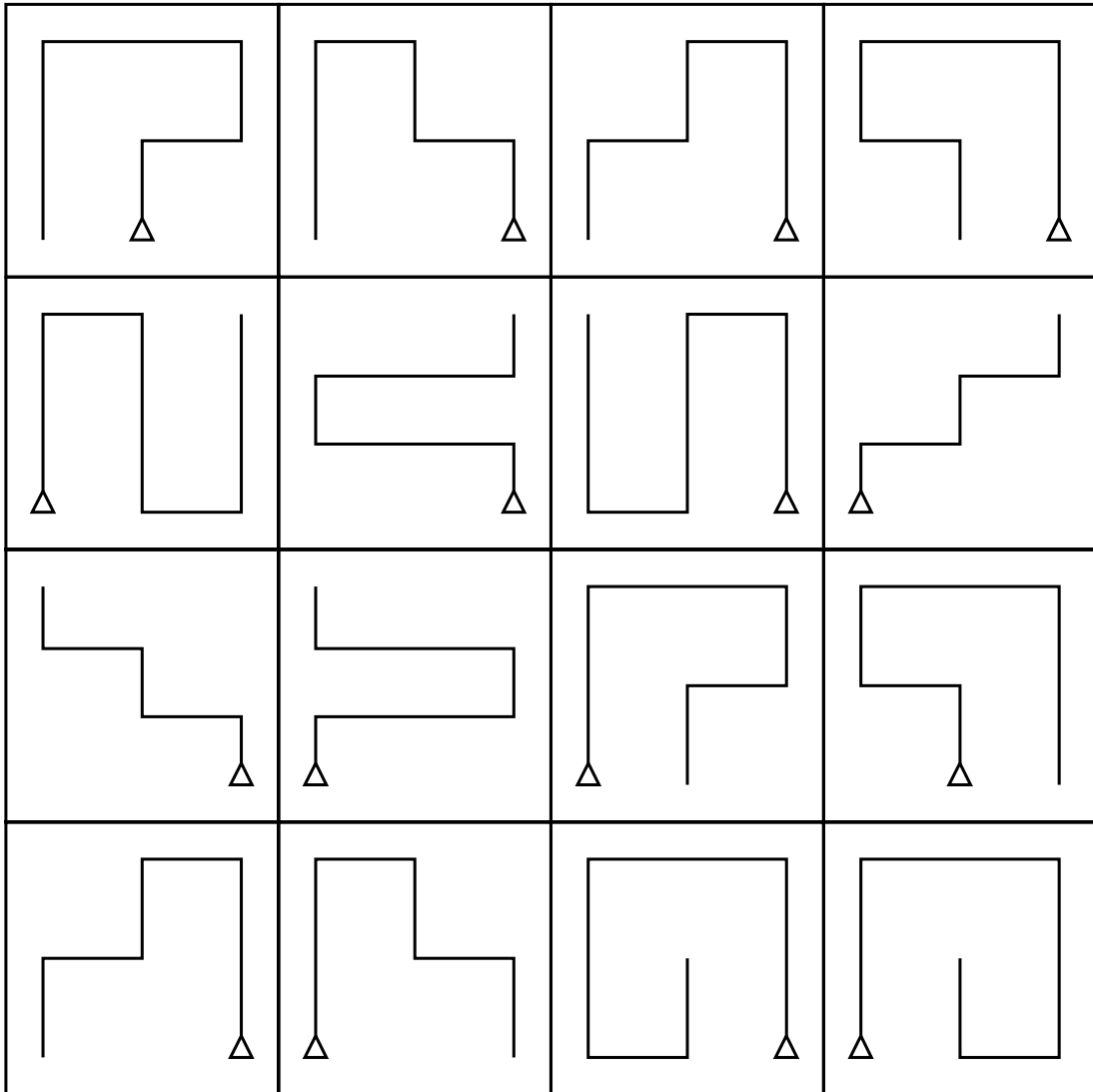
印跡者によって設置された物品を一つも発見できなかった場合、セクションA「追求」の評価は最高でも「Befriedigend／可」となる。物品未発見の場合、追求作業における課題の一つである「物品発見後の再スタート」を実行できないということを考慮しなければならない（物品発見後の再スタートにおける犬の態度を審査員が評価できない）。

追求中、野生動物の出現により、犬が狩猟本能行動を示したときに、指導手は犬に対して「伏せ」を命令することができる。犬がそれに従った場合は審査員の指示で追求作業は続行される。犬が従わなかった場合は試験は中止される（評価：不服従のために試験失格）。

【中止／失格】

行動・態度	結果・記録
出発地点において犬はスタートを3回失敗した。	「追求中止」
全段階に適用：犬が追求コースからリード分10m以上離れた場合。あるいは、コースを離脱した犬に追従するように審査員が指示したのに指導手が従わない。 犬が制限時間内に追求最終地点に到達できなかった。 IPO1、2=15分 IPO3=20分	「追求中止」 中止となった地点までの評価／得点が与えられる 審査講評は中止地点まで！
くわえ上げた物品を犬が放さない。 犬が野生動物を追いかけて再開不可能	「試験失格」、不服従のため

【IPO3 追求コースパターン】



IPO 3 “B” Unterordnung 服従

課題 1 : 脚側行進 (リードなし)	10 点
課題 2 : 常歩行進中の座れ	10 点
課題 3 : 速歩行進中の伏せと招呼	10 点
課題 4 : 速歩行進中の立止と招呼	10 点
課題 5 : ダンベル持来 (2000 g)	10 点
課題 6 : 1m障害とダンベル持来 (650 g)	15 点
課題 7 : 斜壁とダンベル持来 (650 g)	15 点
課題 8 : 前進と伏せ	10 点
課題 9 : 状況下での休止	10 点
合計	100 点

【全般規定】

指導手と『リードなしの犬』は、審査員のもとで基本姿勢をとり申告を行う。

服従で特に注意すべきこと：『自信を取り除かれて単に表面的に演技させられているだけで、犬が仕事をすることの喜びを無くしてしまっていないかを観察しなければならない』

全課題において犬は指導手の要求に対して集中して喜んで仕事をする。この喜んで実行するすべての仕事は同時に正確さも求められる。もちろん、それは評価の判断に影響する。

指導手がある課題の実行を忘れた場合（部分的ではなく）、審査員はそのことを指摘して未公開の課題実行を要求する。このことによる減点はない。

課題実行中にその課題のある部分を行わなかった場合は評価に影響する。

審査員は服従が開始されるまでに使用する用具を国際試験規定に照らし合わせて点検する。その用具は国際試験規定に適合していなければならない。

“脚側行進”と“状況下での休止”の実行中に発砲が行われる（口径6mm）。

審査員の指示で課題の実行が開始される。その後の方向変換、指示なし停座、歩度の変更、などは審査員の指示なしで実行する。

命令の規則は本規定書に明記されている。命令は普通に発音される短い一単語を使用する。どのような言語でも使用可能であるが、同じ動作を要求するための命令は常に同じでなければならない。指導手が命令を三回使用したにもかかわらず、犬が課題またはその課題の中で必要な動作が実行できなかった場合、その課題作業は中止され評価は与えられない（例外あり）。 “招呼”の命令は犬の名前に置き換えてもよい。犬の名前とそれ以外に何らかの命令も使用した場合はダブルコマンドと見なされる。

【課題開始】

各課題は審査員の指示によって開始される。

【基本姿勢】

もう一方の指導手と犬が“状況下での休止”位置で基本姿勢をとるタイミングに合わせて、出発点で脚側行進のための基本姿勢をとる。この2頭の基本姿勢から審査が開始される。

各課題は基本姿勢から開始して基本姿勢で終了する。基本姿勢での指導手はスポーツマン

らしく振る舞う。足は必要以上に広げずに自然に揃えて立つ。

基本姿勢は一度だけ許されている（やり直しや動作緩慢は評価が下がる）。指導手と犬は前方への動きを止めて基本姿勢をとる（指導手がステップバックして犬を後退させながらとる基本姿勢は誤り）。犬は「密着して」、「真っ直ぐに」、「静かに」、「注意して」指導手の左側で犬の肩と指導手の膝が揃うように座る。

犬を短く褒める行為は、各課題での終了基本姿勢を明確に示した後、基本姿勢のまま褒める。その後、指導手は新しい基本姿勢をとる。褒めることと次の新しい開始の間には、明確な約3秒の“間”を作らなければならない。

いわゆる“助走（犬と指導手の行進）”は基本姿勢から開始される。指導手（と犬）は助走中の最低10歩～最大15歩までの間で定められた課題を実行しなければならない。

指導手の正面に座った犬を移動させて基本姿勢をさせるとき、そして「座っている」、「立っている」、「伏せている」犬の右側に立ち次の行動命令を与える前に、明確な約3秒の“間”を作らなければならない。

何らかの姿勢で待っている犬のもとに指導手が行き、犬の右側に立つとき、犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

基本姿勢と助走での誤りはその課題の評価に影響する。

次の課題のために移動が必要なときも脚側行進を実行する。犬を自由にしたり、遊んだりしてはいけない。持来用のダンベルを取りに行くときも犬と一緒に行かななければならない。

指導手は反転ターンを必ず左回転で実行する（Uの字で歩くのではなく、その場で180度左回転する）。犬は左回転中の指導手の周囲を小回りしてくると回る。あるいは指導手との位置関係を変えずに指導手と同じ動作で頭を軸にして体を180度ひねる。

試験ではどちらかのパターンに統一されていなければならない。

犬が正面停座の後、基本姿勢の位置（指導手の左側）へ移動する際、指導手の後ろを小回りしてくると回る、あるいは頭を軸に体を180度ひねってのどちらでもよい。

障害の素材は堅く、高さ100cm、幅150cmとする。斜壁は幅150cm、長さ191cmの二枚の板が上部で連結されており、40度に広げて設置したときに頂点が地面から180cmとなるように設計されている。斜壁は全体に滑り止めの加工がされていない。両壁面の上半部分にはそれぞれ3本ずつ、24mm×48mmの登坂補助の角材が取り付けられている。試験では全出場犬が同じ障害・斜壁を飛越しなければならない。

持来をとまなう課題においては、木製ダンベルの使用だけが許されている。全出場者は主催者が準備したダンベルを使用しなければならない。持来をとまなう課題の実行前にダンベルを犬にくわえさせてはいけない。

【課題の分割】

2部門で構成された課題「行進中の座れ」「行進中の伏せと招呼」「行進中の立止」「行進中の立止と招呼」これらは2分割されてそれぞれの区分が別々の評価を受ける。

a) “基本姿勢”～“助走”～“実行” = 5点

b) “実行後の態度”～“終了基本姿勢” = 5点

各課題に対する評価は“開始基本姿勢”から“終了基本姿勢”まで、犬の態度が注意深く観察されて決定される。

【追加の命令】

犬が3回の命令で課題を実行できなかった場合、その課題の評価は“M/不可、(0点)となる(例外あり)。区分課題において犬が3回目の命令で実行した場合、その区分評価は“M/不可、となる。

招呼のための命令“来い、”は犬の名前に置き換えてもよい。
犬の名前と何らかの命令も使用した場合はダブルコマンドと見なされる。

追加の命令に対する評価：

追加の命令1回(合計2回の命令)⇒ 課題の区分評価が“B/可、”となる

追加の命令2回(合計3回の命令)⇒ 課題の区分評価が“M/不可、”となる

例：区分課題5点

正面停座から基本姿勢に移るための命令で犬は座ったまま。 第2の命令(追加の命令1回目)で犬は基本姿勢へと移動した。	区分評価“B/可、”=-1,5点 他に失敗がなければこの課題の評価はG/8,5点となる
前進中の犬が伏せの命令を無視して走った。第2の命令(追加の命令1回目)で犬は止まって座った。第3の命令(追加の命令2回目)で犬は直ちに伏せた。	区分評価“M/不可、”=-2,5点 他に失敗がなければこの課題の評価はB/7,5点となる

IPO 3 B	1. 脚側行進(リードなし)	10点
---------	----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Fuß gehen/脚側行進、”

命令は歩き出すとき(出発と各停止後)と歩度を切り替えるときだけ使用できる。

方向変換時(反転ターン、右折、左折)に命令を使用した場合は評価が下がる。

b) 実行：(実施要領 P.100 参照)

指導手とリードなしの犬は審査員の前まで行き犬を座らせて申告をする。

その後、脚側行進で出発地点に行き基本姿勢をとる。審査員の指示でこの課題が開始される。正しい基本姿勢から“脚側行進、”の命令で、犬は「注意して」、「喜んで」、「真っ直ぐに」右肩甲部と指導手の左膝が揃う位置で歩く。

2012年から、すべての試験における脚側行進の実施要領は下記に統一される。

『常歩50歩』→『①左反転ターン』→『常歩10~15歩』→『駆け足10~15歩』→『ゆっくり歩く10~15歩』→『常歩に戻る』→『右折』→『約15歩』→『右折』→『約15歩』→『②左反転ターン』→『①指導手停止』→『左折』→『グループ内行進』→『グループ内で②指導手停止』→『出発点付近で終了基本姿勢(③指導手停止)』

駆け足からゆっくり歩くへの切り替えは中間歩度を設けずに行う(それぞれ最低10歩)。各歩調は明確に区別された速度で行う。指導手が停止したら犬は指示なしで素早く真っ直ぐに座る。グループは最低4人で構成されており静かに動いている。指導手と犬はグループの1人に対して右回り、他の1人に対して左回りを実行し、最低1回、指導手はグループ内で停止する。行進が不十分な場合、審査員はグループ内行進を繰り返すように要求することができる。審査員の指示でグループから離れて脚側行進で出発点に戻りこの課題の終了基本姿勢をとる。この終了基本姿勢を次の課題の開始基本姿勢としてもよい。

反転ターンを実行するとき、指導手は必ず左回転で行う(Uの字を歩いて行うのではなく

体を軸にしてその場で180度回れ左)。

このときの犬の動作は2パターン可能：

- － 犬は左回転中の指導手の周囲をくるっと回る（右回りで）。
- － 犬は指導手と同じ動作で頭を軸にして体を180度、左回転させる。

試験中はどちらかのパターンに統一されていること。

犬は常に肩甲骨と指導手の左膝が揃うポジションで歩く。前に出たり、遅れたり、離れて歩いてはならない。最初の直進を行進中に最低15歩の距離から5秒の間隔で2回の発砲が行われる（口径6mm）。犬は発砲に対して無関心でなければならない。犬が銃声シャイの場合、試験失格となり既得の点数はすべて剥奪される。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「前に出る」、「横に離れる」、「遅れる」、「座る動作が遅いまたは躊躇して座る」、「余分な命令」、「体を使った補助行為」、「各歩調の行進中の注意力に欠ける」、「注意力に欠ける方向変換」、「意気消沈」これらは度合いに応じて評価が下がる。

IPO 3 B	2. 常歩行進中の座れ	10点
---------	-------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進、”Absitzen／座る、

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲骨が揃う位置で歩く。歩き出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“座れ、”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに座る。指導手はそのまま15歩進んで立ち止まり、静かに注意して座っている犬の方の向きを変える。審査員の指示で犬のもとに戻り犬の右側に立つ。このとき犬の正面から直接、あるいは犬の後ろを回ってのどちらでもよい。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「座る動作が遅い」、「座っているときに落ち着きがない、注意力に欠ける」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が座らずに伏せるまたは立っている場合は減点5点となる。

座らなかったこと以外にも誤った態度がある場合は更なる減点対象となる。

IPO 3 B	3. 速歩行進中の伏せと招呼	10点
---------	----------------	-----

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Fuß gehen／脚側行進、”Ablegen／伏せる、”Herankommen／招呼、”in Gst gehen／基本姿勢に移る、

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は脚側行進で真っ直ぐ歩く。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲骨が揃う位置で歩く。10歩～15歩の間で歩度を速歩に切り替えて10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“伏せ、”の命令を

する。犬は直ちに真っ直ぐに伏せる。指導手はそのまま30歩進んで立ち止まり、静かに注意して伏せている犬の方に向きを変える。審査員の指示で“招呼”の命令をする。または犬の名前を呼ぶ。犬は喜んで、スピーディに、一直線に指導手のもとに来て、接近して真っ直ぐに正面停座をする。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「伏せる動作が遅い」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手のもとへ来る速度が遅い」、「指導手のもとに来る途中で失速」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

“伏せる”ための命令に対して犬が座るまたは立っている場合は減点5点となる。

IPO 3 B	4. 速歩行進中の立止と招呼	10点
---------	-----------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Fuß gehen/脚側行進”、“Abstellen/立つ”、“Herankommen/招呼”、“in Gst gehen/基本姿勢に移る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は駆け足で脚側行進をする。助走中の犬は「注意して」、「喜んで」そして「遅れることなく」、「集中して」、「真っ直ぐに」指導手の左膝と右肩甲部が揃う位置で走る。走り出して10歩～15歩の間において、指導手は立ち止まったり、歩度を変えたり、振り向いたりせずに“立て”の命令をする。犬は直ちに真っ直ぐに立ち止まる。指導手はそのまま30歩進んで立ち止まり、静かに注意して立っている犬の方に向きを変える。審査員の指示で“招呼”の命令をする。または犬の名前を呼ぶ。犬は喜んで、スピーディに、一直線に指導手のもとに来て、接近して真っ直ぐに正面停座をする。次の“基本姿勢に移る”ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。

c) 評価：

「開始基本姿勢での誤り」、「助走での誤り」、「立ち止まる動作が遅い」、「立っているときに落ち着きがない、注意力に欠ける、動く」、「指導手のもとへ来る速度が遅い」、「指導手のもとに来る途中で失速」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

“立て”の命令に対して犬が座るまたは伏せる場合は減点5点となる。

IPO 3 B	5. ダンベル持来 (2000g)	10点
---------	--------------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Bringen/持来”、“Abgeben/受け渡し”、“in Gst gehen/基本姿勢に移る”

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手はダンベル(2000g)を約10m前方に投げる。ダンベルを投げる際に指導手は立ち位置を移動してはならない。ダンベルが静止したら“持来”の命令をする。静かに自主的に座っていた犬はスピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げてスピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し”の命令

をかけるまで約3秒の“間、を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る、ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「持ってくる速度が遅い」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は“mangelhaft／不可、となる。犬がダンベルを持来できなかった場合はこの課題は0点となる。

IPO 3 B	6. 1m障害とダンベル持来 (650g)	15点
----------------	------------------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Springen／飛越、 “Bringen／持来、 “Abgeben／受け渡す、 “in Gst gehen／基本姿勢に移る、

b) 実行：

指導手と犬は障害から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢とり、指導手はダンベル(650g)を1m障害の向こう側に投げる。ダンベルが静止したら“飛越、の命令をする。静かに自主的に座っていた犬は“飛越、と“持来、の命令で障害を飛越し(持来の命令は犬がジャンプをしているときに与える)、スピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げて、直ちに障害を飛越し、スピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の“受け渡し、の命令をかけるまで約3秒の“間、を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の“基本姿勢に移る、ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ゆっくりとしたジャンプ」、「力強さに欠けるジャンプ(ためらい)」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「ゆっくりとした帰路ジャンプ」、「力強さに欠ける帰路ジャンプ(ためらい)」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

犬が障害に接触した場合はその都度1点までの減点。足を掛けた場合はその都度2点までの減点。

障害持来の点数分配：

往路ジャンプ	ダンベル持来	帰路ジャンプ
5点	5点	5点

この3つの区分課題(往路ジャンプ-持来-帰路ジャンプ)の内、**最低1回のジャンプと“持来、を行わなければ得点を得ることができない。**

往復のジャンプと持来に何の欠点もない。 = 15点

往路または復路のジャンプをしなかった。持来に欠点はない。 = 10点

往復のジャンプに欠点はない。しかし、持来しなかった。 = 0点

ダンベルが横に強く逸れたり、犬にとって見えにくいときは指導手が審査員に申し出るか、あるいは審査員がそのことを指摘する。その場合は減点なしで投げ直しができるが、犬は座ったまま待機しなければならない。犬から離れる際は待てを命じてもよいが、投げ直しの際に犬を動かして新しい基本姿勢をとることはできない。待たせていた犬の右側に立ち、何の命令もせずに投げ直す。待機中の犬が障害の横をすり抜けて指導手を追いかけて行った場合、この課題は中止され0点となる。待機中の犬は動いてしまったが障害の手前で留まっている場合、続行可能であるが課題の評価が一つ下がる。

指導手の補助行為はたとえ立ち位置を変えずに行われたとしても度合いに応じて評価が下がる。終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は "mangelhaft/不可、" となる。

往路ジャンプで強い接触により障害が倒れてしまった場合、この課題はやり直される（ただし、たとえやり直して良いジャンプを行ったとしても、往路ジャンプの評価は "unteren mangelhaft/重い不可-4点、"）。

ダンベル受け渡しの場面で、放せの命令を3回使用しても犬がダンベルを放さなかった場合は "試験失格、" となりセクションB "服従、" は中止される。

IPO 3 B	7. 斜壁とダンベル持来 (650g)	15点
----------------	----------------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

"Springen/飛越、" "Bringen/持来、" "Abgeben/受け渡し、" "in Gst gehen/基本姿勢に移る、"

b) 実行：

指導手と犬は斜壁から最低5歩手前の位置で正しい基本姿勢をとり、指導手はダンベル(650g)を斜壁の向こう側に投げる。静かに自主的に座っていた犬は "飛越、" と "持来、" の命令で斜壁を登り(持来の命令は犬が斜壁を登っているときに与える)、スピーディに一直線にダンベルへと走り、素早くくわえ上げて、直ちに斜壁を登り、スピーディに一直線に指導手のもとへ持来する。接近して真っ直ぐに正面停座をして、ダンベルは静かにそして固く保持する。指導手は次の "受け渡し、" の命令をかけるまで約3秒の "間、" を作らなければならない。受け取ったダンベルは右手で持ち、腕を静かに体の右側で伸ばす。次の "基本姿勢に移る、" ための命令で犬は素早い動作で指導手の左側に移動して、指導手の左膝と犬の肩甲部が揃う位置で真っ直ぐに座る。課題実行中のいかなるときも指導手は立ち位置を変えてはいけない。

c) 評価：

「基本姿勢での誤り」、「ゆっくりとした登り降り」、「力強さに欠ける登り降り」、「ダンベルへ向かう速度が遅い」、「くわえ上げの誤り」、「帰路でのゆっくりとした登り降り」、「帰路での力強さに欠ける登り降り」、「ダンベルを落とす」、「ダンベルをもて遊ぶ」、「チューイングする」、「指導手が両足を広げて立つ」、「正面停座での誤り」、「正面停座から終了基本姿勢に移行する際の誤り」これらは度合いに応じて評価が下がる。

斜壁持来の点数分配：

往路の登り降り	ダンベル持来	帰路の登り降り
5点	5点	5点

この3つの区分課題(往路の登り降り-持来-帰路の登り降り)の内、最低1回の登り降

りと「持来」を行わなければ得点を得ることができない。

- 往復の登り降りと持来に何の欠点もない。 = 15点
- 往路または復路の登り降りをしなかった。持来に欠点はない。 = 10点
- 往復の登り降りに欠点はない。しかし、持来しなかった。 = 0点

ダンベルが横に強く逸れたり、犬にとって見えにくいときは指導手が審査員に申し出るか、あるいは審査員がそのことを指摘する。その場合は減点なしで投げ直しができるが、犬は座ったまま待機しなければならない。犬から離れる際は待てを命じてもよいが、投げ直しの際に犬を動かして新しい基本姿勢をとることはできない。待たせていた犬の右側に立ち、何の命令もせずに投げ直す。

指導手の補助行為はたとえ立ち位置を変えずに行われたとしても度合いに応じて評価が下がる。終了基本姿勢以前に指導手が立ち位置を変えたらこの課題の評価は「mangelhaft／不可」となる。

ダンベル受け渡しの場面で、放せの命令を3回使用しても犬がダンベルを放さなかった場合は「試験失格」となりセクションB「服従」は中止される。

IPO 3 B	8. 前進と伏せ	10点
----------------	-----------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

「Voraussenden／前進」、「Ablegen／伏せる」、「Aufsitzen／座る、

b) 実行：

正しい基本姿勢から指導手と犬は前進を実行する方向に脚側行進で真っ直ぐ歩く。10～15歩の地点において、指導手は立ち止まると同時に腕を上げて「前進」の命令をする。犬はまるで目標があるかのようにひたむきに速いスピードで指示された方向に最低30歩前進する。審査員の指示で指導手は犬に「伏せ」の命令を与える。それに対して犬は即座に伏せなければならない。指導手は犬が伏せるまで腕を上げ続けていてもよい。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で「座れ」の命令をかける。犬は素早く座り終了基本姿勢をとる。

c) 評価：

「助走での誤り」、「指導手が犬と一緒に走る」、「前進するスピードが遅い」、「方向が横に強く逸れる」、「前進の距離が短い」、「ためらった伏せ」、「命令前に伏せる」、「伏せているときに落ち着きがない」、「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ／座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。

補助：例えば「前進のために、あるいは「伏せのために、追加の命令をかけた。このような場合も評価が下がる。

「伏せ」の命令を3回かけても犬が全く止まらない場合、この課題は0点となる。

第2の命令で犬は直ちに伏せた《1回目の追加の命令》	- 1,5点
第3の命令で犬は直ちに伏せた《2回目の追加の命令》	- 2,5点
第1～第3のいずれかの命令で犬は伏せずに停止した。 第3の命令を与えられても、座っている、または、立っている。 例：第2の命令で立って止まった。第3の命令で座った。	- 3,5点

その他にも何らかの失敗がある場合は更に評価は下がる。犬が伏せた地点(または停止位置)から完全に離れた。あるいは指導手の方に戻ってきた場合、この課題は0点となる。

IPO 3 B	9. 状況下での休止	10点
---------	------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Ablegen／伏せる、”Aufsitzen／座る、

b) 実行：

“服従、”は2頭で行われる。1頭は出発点で脚側行進のための基本姿勢をとり、もう1頭は審査員が指示した位置で指導手とともに正しい基本姿勢をとる。審査員の指示で“伏せ、”の命令をかけて犬を伏せさせる。リードや何らかの物品を犬の側に置くことなく指導手は振り向かずに離れて試験会場内の最低30歩離れて犬から見えないように立つ(一般的には防衛の隠れ場所として設置されたテントの中)。ペアのもう1頭の犬が課題1～7を実行している間、犬は指導手の影響を受けることなく静かに伏せていなければならない。審査員の指示で指導手は犬のもとに行き、犬の右側に立つ。約3秒後の審査員の指示で“座れ、”の命令をかける。犬は素早く真っ直ぐに座り終了基本姿勢をとる。

c) 評価：

「指導手に落ち着きがない、こっそり犬に指示をする」、「伏せている犬に落ち着きがない」または「指導手が犬のもとに行ったとき、命令前に犬が立つ／座る」これらは度合いに応じて評価が下がる。

場所を移動せずに立ち上がるまたは座った場合にはその失敗分を差し引いた評価がされる。ペアのもう1頭の犬が課題6を実行し終えるまでに伏せていた位置から3m以上移動した場合はこの課題の評価は0点となる。ペアのもう1頭の犬が課題6を実行し終えた後で伏せている位置から3m以上移動した場合はそれまでの休止分だけが評価される。指導手が犬のもとに行くときに犬が立ち上がって指導手の方に来た場合は最大3点までの減点。

IPO 3 "C" Schutzdienst 防衛

課題 1 : パトロール (6ヶ所)	10点
課題 2 : 禁足と咆哮 (5+5)	10点
課題 3 : ヘルパーの逃走阻止	10点
課題 4 : 禁足から防御	20点
課題 5 : 背面護送	5点
課題 6 : 背面護送から奇襲	15点
課題 7 : ヘルパーの遠距離攻撃阻止	10点
課題 8 : 禁足から防御	20点
合計	100点

【全般規定】

セクションC "防衛" に適した広さの会場 (例えば公式サッカーグラウンド105m×70m) に左右3ヶ所、合計6ヶ所の "隠れ場所" が設置されている (防衛設営 P.102 参照)。IPO3では1番～6番テント (6ヶ所) を使用する。指導手、審査員そしてヘルパーが作業実行のために必要な目印はよく見えるようにマーキングされていなければならない。

訳者注『ヘルパーの "隠れ場所" は材質や形は限定されていませんが、世界中で一般的に三角すいのテントが使用されているので本規定書では "テント" に統一しました』

【防衛ヘルパー／防衛着衣】

ヘルパーは防衛着衣、防衛片袖、ソフトムチ (ステッキ状) を装備する。防衛片袖は犬が咬捕するのに適した部分が設けられ、着色されていない黄麻繊維製のカバーで覆われたものを使用しなければならない。ヘルパーは常に犬の動きを注視する。禁足場面において必要であれば犬を刺激することなく静かに動いてもよい。ただし、犬が興奮するような態度や抵抗するようなことをしてはならない。万が一のときヘルパーは防衛片袖で身の安全を守る。

試験は1人のヘルパーで行うことができる (どの試験段階でも)。ただし、一試験段階に**7頭以上**の受験があるとき、あるいは**地区大会以上の競技会では、必ず2名のヘルパーで行わなければならない**。各試験段階の出場犬は全犬、同じヘルパーで受験しなければならない (2名の場合も)。

例外: ヘルパー自身も試験出場者である場合、その1回に限りヘルパーの交代が許される。
(ローカル試験のみ)

【申告】

- 指導手はリードなしの犬とともに審査員のもとで基本姿勢をとり申告をする。
- "パトロールの出発地点" に移動して開始基本姿勢をとる。
- 審査員の指示により、その基本姿勢から**方向を定めてパトロールを開始する**。

【備考】

申告が規定通りに行えない。例えば犬がコントロール不能となり、その場から、あるいはヘルパーのいるテントへと走り出してしまったとき、指導手は犬に呼び戻しの命令を3回かけることができる。この3回の命令で犬が指導手のもとに帰ってこないときは "不服従により試験失格" となりセクションC "防衛" は中止される。

指導手が犬を掌握できない。犬が防衛片袖を放さない。あるいは指導手が命令以外の方法で放させた（例えば犬を触って）。防衛片袖以外のヘルパーの体（着衣）を咬んだ。これらの行動をした場合「試験失格」となる。「TSB」評価は与えられない。

【マーキング】

国際試験規定に定められたマーキングは、指導手、審査員、ヘルパーによく見えるように印されなければならない。》そのマーキングとは

- 》 隠れ場所で禁足咆哮中の犬を呼び戻すときの指導手の立ち位置
- 》 ヘルパーの逃走開始地点と逃走終了地点
- 》 ヘルパーの逃走阻止における犬の待機位置
- 》 ヘルパーの遠距離攻撃阻止における指導手と犬の待機位置

防衛課題（咬捕）を拒む、あるいは咬捕を放して再び咬捕をしなかった場合、セクションCは中止される。「防衛」の評価／得点は与えられない。「TSB」評価は「ng」となる。

各咬補において、審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令ができる。

第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。

《Ablassen／放す》 評価一覧表

第1の命令で	第2の命令で	第2の命令で	第3の命令で	第3の命令で	第3の命令で
ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	直ちに放した	ためらって放した	放さない あるいは命令以外の方法で放した
程度に応じて減点 0,5～3	減点 3	程度に応じて減点 3,5～6	減点 6	程度に応じて減点 6,5～9	試験失格

IPO 3 C	1. パトロール	10点
----------------	-----------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

「Revieren／パトロール」、「Herankommen／呼び寄せ」

「犬の名前」と「呼び寄せ」の命令を連結して使用してもよい。例：「太郎来い」

b) 実行：（6ヶ所：出発は概ね1番と2番の中間点→1番→2番→3番→4番→5番→最終6番テント）

ヘルパーは犬から見えないように6番（最終）テントの中にいる。指導手とリードなしの犬は6ヶ所のテントをパトロールするための開始位置（概ね1番と2番テントの中間点）で基本姿勢をとる。審査員の指示で、短い「パトロール」の命令と左右いずれかの腕による指示で（この動作は1テントごとに繰り返すことができる）、犬は目標を定めてスピーディに1番テントへ走り、なるべく小回りで注意してテントを回る。テントの側面に犬が出てきたら「呼び寄せ」の命令で呼び寄せて、犬の動きを止めることなく、新たな「パトロール」の命令で次のテントへと向かわせる。指導手はこの一連の動作実行中、中央ライン上を歩いて進み、横に逸れてはいけない。犬は常に指導手の前方を横切るように走らなければならない。最終テントに犬が到達したら指導手は立ち止まり、命令を与えたり指示をしたりしてはいけない。

c) 評価：

「犬が操縦性に欠ける」、「迅速性に欠ける」、「目標が定まらない」、「テントを大回り」、

「テントに対して注意不足」これらは度合いに応じて評価が下がる。

パトロールにおける誤り：

- 開始基本姿勢において「落ち着きがない」、「注意力に欠ける」。
- 余分な命令または指示。
- 指導手の進路が中央ラインをキープしていない。
- 指導手が普通で歩行しない。
- 大きすぎるパトロール。
- 指導手の命令によってではなく犬が自動的にパトロールをしている。
- テントを回らない。テントを回る際に注意力に欠ける
- 犬の操縦性と服従性が欠けている。

最終テントに向かう場面で命令を3回使用しても犬が最終テントに到達できず、ヘルパーを発見できなかった場合、防衛は中止される。パトロール中に指導手が犬を呼び、犬が基本姿勢の位置（犬の姿勢は何であれ）に来てパトロールが中断した場合、防衛は中止される。（記録は「中止」得点なし／防衛以外の既得の点数は残る／TSB評価は与えられない）

IPO 3 C	2. 禁足と咆哮	(5 + 5) 10点
----------------	-----------------	--------------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

“Herankommen／呼び寄せ”と、“in Gst gehen／基本姿勢に移る”を連結して使用する

連結命令の例：“コイアトエ、（コイで呼んで犬が手元に来てからアトエはダメ）

b) 実行：

犬はヘルパーに対して「集中力のある禁足」と「持続性のある咆哮」を積極的に実行しなければならない。ヘルパーに飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。咆哮開始から約20秒後、審査員の指示で指導手はテントから5歩の位置に立つ（ヘルパーに対峙する犬の背後）。審査員の指示により連結命令で犬を呼び寄せて基本姿勢をとる。

審査員の指示で指導手はヘルパーにテントの外に出るように要求する。ヘルパーはマーキングされた逃走開始地点へと移動する。このとき犬は基本姿勢で静かに注意して座ってなければならない。

c) 評価：

犬は呼ばれるまで“厳しい咆哮”と“圧力のある禁足”を行う。それらが不足していたり持続性に欠けたり、審査員や歩み寄ってきた指導手を気にする場合は度合いに応じて評価が下がる。

咆哮の評価：連続的な咆哮に対して5点が与えられる。弱い咆哮（圧力不足、エネルギーに欠ける）、連続性に欠ける咆哮は2点までの減点。「吠えない」しかし犬は積極的に集中してヘルパーを禁足していた場合、咆哮は0点となるが禁足には5点が与えられる。

ヘルパーにからむ行為、例えばつついたり、飛びついたり等は2点までの減点。防衛片袖を強く咬んだ場合は9点までの減点。犬が防衛片袖を咬んで放さない場合、指導手は5歩の位置から“呼び寄せ+基本姿勢に移る”この連結命令を1度だけ使用できる（“放せ”の命令をしてはいけない）。この1回限りの命令で、防衛片袖を放して指導手のもとに来ない場合は“試験失格”となり防衛は中止される。防衛片袖を放して指導手のもとに来れば防衛は続行できるが、この課題評価は Mangelhaft／不可（-9点）となる。犬が故意にヘルパーの防衛片袖以外の部分を（突くではなく）咬んだ場合 “試験失格”となる。

審査員が指導手に来るように指示する前に、犬がヘルパーを見放して中央ライン上にいる

指導手のもとに戻ろうとした場合、もう一度ヘルパーのもとへ行くように命令できる。ヘルパーのもとに留まれば「防衛」は続行されるが禁足と咆哮の評価は「unteren Mangelhaft/重い不可（-9点）」となる。もう一度ヘルパーのもとに行くように命令された犬が行くことを嫌がったり、行ったはいいがまたヘルパーを見放した場合、「防衛」は中止される。審査員の指示後、指導手が最終テントに向かって歩いているとき、あるいは5歩の位置からの「呼び寄せ」の命令前に犬が勝手に指導手のもとに来た場合、禁足と咆哮は「Mangelhaft/不可」の範囲内で評価される。

IPO 3 C	3. ヘルパーの逃走阻止	10点
----------------	---------------------	------------

a) 命令：（下記の動作を実行するための命令を使用する）

「Fuß gehen/脚側行進」、「Ablegen/伏せる」

「Abwehren (Stell oder Voran)/防衛（阻止または前進）」、「Ablassen/放す」

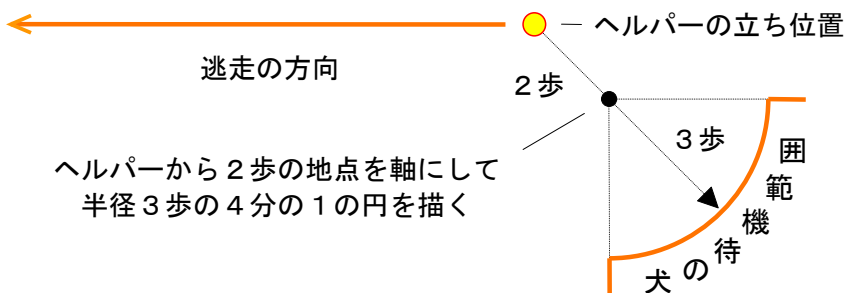
b) 実行：

審査員の指示で指導手はヘルパーにテントの外に出るように要求する。ヘルパーは普通の歩度で逃走開始地点へ移動する。審査員の指示で指導手と犬は待機位置に移動する。

このとき犬は指導手の左側で落ち着いて離れずに歩く。

指導手と犬は待機位置で「伏せ」の命令前に基本姿勢をとる。このとき犬は真っ直ぐに静かに座る。「伏せ」の命令で犬は直ちに素早く伏せる。そして静かに確実にヘルパーを注視する。指導手はテントに戻り、犬とヘルパーそして審査員が見える位置に立つ。

ヘルパーの立ち位置から犬の待機位置までの距離は5歩。



審査員の指示でヘルパーは逃走を開始する。

ヘルパーが走り出したと同時に、指導手は「阻止せよ」または「前へ」を犬に命令する。犬は躊躇することなく高い支配欲とエネルギッシュかつ力強い咬捕で効果的に逃走を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は「支配的で安定したグリップの持続を示してから」放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

c) 評価：

重要な評価基準：「高い支配欲」、「素早くエネルギッシュな反応と追補」、「力強い咬捕」、「落ち着いた咬捕での効果的な逃走阻止」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」

これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの逃走に対して犬は待機位置で伏せたまま。あるいは約20歩以内に追補できない。または咬捕を保持できずに逃走を阻止できなかった場合「防衛」は中止される。

監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

指導手が「逃走阻止の発進命令」を犬に与えなかった場合、課題評価が一つ下がる。

IPO 3 C	4. 禁足から防御	20点
---------	-----------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

「Ablassen／放す」、「in Gst gehen／基本姿勢に移る、

b) 実行：

逃走阻止の咬捕を放して約5秒後、審査員の指示でヘルパーは禁足中の犬に対して攻撃を仕掛ける。犬は指導手の指示なしでエネルギーが強く咬捕して防御する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで脅しながら攻め立てる。この場面でソフトムチによる負荷テストが2回実行される。負荷テストは肩部とキ甲部にのみ行われる。負荷に対する犬の活力と安定性は特に注意して観察される。負荷に対して犬は屈しない態度とエネルギーで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は「**支配的で安定したグリップの持続を示してから、放す。**指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ、」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き(たとえ犬が吠えずに座っていても)「座れ、を命令して基本姿勢をとる。

このときヘルパーからソフトムチを取り上げない。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早い力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

ヘルパーの負荷に耐えきれず防衛片袖を放して再び咬捕をしなかった場合「防衛」は中止される。監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら「Mangelhaft／不可」の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

IPO 3 C	5. 背面護送	5点
---------	---------	----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Fuß gehen／脚側行進、 (例：“Fuß／アトエ、または“Transport／トランスポート、)

b) 実行：

課題4 “禁足から防御、の終了基本姿勢から、審査員の指定した方向に約30歩の背面護送を行う。指導手はヘルパーに先に歩くように要求する。指導手と犬はヘルパーの5歩後方で脚側行進をする。護送中、犬はヘルパーに対して注意して監視する。ヘルパーとの5歩の間隔は終始維持されなければならない。

c) 評価：

度合いに応じて評価が下がる重要な判断基準：
ヘルパーを注意して監視する。正しい脚側行進。5歩の間隔維持。

IPO 3 C	6. 背面護送から奇襲	15点
----------------	--------------------	------------

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Ablassen／放す、 “in Gst gehen／基本姿勢に移る、 “Fuß gehen／脚側行進、

b) 実行：

背面護送中、審査員の指示でヘルパーは止まることなく振り返って犬を奇襲する。指導手の指示なしで犬は躊躇することなく、エネルギーが強く咬捕して防御する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。犬が防御のために発進した瞬間、指導手は立ち止まる。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は“**支配的で安定したグリップの持続を示してから、放す。**指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで“放せ、の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は“試験失格、となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き(たとえ犬が吠えずに座っていても)“座れ、を命令して基本姿勢をとる。このときヘルパーからソフトムチを取り上げる(取り上げるタイミングはいつでもよい。犬の禁足中または基本姿勢の命令後、あるいはヘルパーを後退させて側面護送の開始前に要求して受け取る)。そしてヘルパーを審査員に引き渡すために約20歩の側面護送を行う。犬に“脚側行進、または“トランスポート、の命令をすることが許されている。犬はヘルパーと指導手の中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そのとき、ヘルパーを圧迫したり、飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。審査員の前で側面護送を停止する。犬は指示なしで座る。ソフトムチを審査員に手渡し“第1作業の終了、を報告する。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早い力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。
監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら“Mangelhaft／不可、の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合“防衛、は中止される。

IPO 3 C	7. ヘルパーの遠距離攻撃阻止	10点
---------	-----------------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Absitzen/座る、 “Abwehren/攻撃を防御、 “Ablassen/放す、 “in Gst gehen/基本姿勢に移る、 “Fuß gehen/脚側行進、

b) 実行：

指導手と犬はマーキングされた待機地点に移動する(1番テントと2番テントの中間地点)。このとき犬は指導手の左側で落ち着いて離れずに歩く。待機地点に到着したら向き直り、犬に“座れ、を命じて基本姿勢をとる。このとき犬は真っ直ぐに静かに座る。首輪を持ってよいが犬の興奮をかき立ててはいけない。審査員の指示でソフトムチを持ったヘルパーは、テントから出て駆け足で中央ラインへと向かう。中央ラインに達したヘルパーは止まることなく方向変換して指導手と犬に標準を定めて大声を上げて激しく威嚇する。ヘルパーが60～50歩の距離に近づき、審査員が指示をしたら、指導手は犬に“攻撃防御、の命令をかけて発進させる。指導手は犬の発進後もその位置を移動してはならない。ヘルパーの攻撃に対して犬は躊躇することなく高い支配欲とエネルギーが強い咬捕で効果的に攻撃を阻止する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。

ヘルパーの負荷に対して、犬は屈しない態度とエネルギーで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は“**支配的で安定したグリップの持続を示してから**、放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで“放せ、の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は“試験失格、となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

c) 評価：

重要な評価基準：「エネルギーな防御と力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

監視状態の犬が「少し注意力に欠ける/少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない/強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら“Mangelhaft/不可、の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる/指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合“防衛、は中止される。

IPO 3 C	8. 禁足から防御	20点
---------	-----------	-----

a) 命令：(下記の動作を実行するための命令を使用する)

“Ablassen/放す、 “in Gst gehen/基本姿勢に移る、 “Fuß gehen/脚側行進、

b) 実行：

攻撃阻止の咬捕を放して約5秒後、審査員の指示でヘルパーは禁足中の犬に対して攻撃を仕掛ける。犬は指導手の指示なしでエネルギーが強く咬捕して防御する。犬はヘルパーの防衛片袖にだけ咬捕することが許されている。ヘルパーはムチで叩くようなそぶりで脅しながら攻め立てる。この場面でソフトムチによる負荷テストが2回実行される。

負荷テストは肩部とキ甲部にのみ行われる。負荷に対する犬の活力と安定性は特に注意して観察される。負荷に対して犬は屈しない態度とエネルギーで安定したグリップを示さなければならない。審査員の指示でヘルパーは停止する。犬は「支配的で安定したグリップの持続を示してから、放す。指導手は審査員の指示なしで『ヘルパー停止⇒約3秒の間⇒命令』のタイミングで「放せ」の命令を犬に与えることができる。

- 第1の命令で放さない場合、第2、第3の命令は審査員の指示で命令する。
- 第3の命令でも放さなかった場合は「試験失格」となる。
- 命令をかけるときに、指導手は犬に影響を与えるような行動をしてはならない。
- 咬捕を放した犬はヘルパーの近くで注意深く監視する。

審査員の指示で指導手は歩いて犬のもとに最短コースで行き（たとえ犬が吠えずに座っていても）「座れ」を命令して基本姿勢をとる。このときヘルパーからソフトムチを取り上げる（取り上げるタイミングはいつでもよい。犬の禁足中または基本姿勢の命令後、あるいはヘルパーを後退させて側面護送の開始前に要求して受け取る）。そしてヘルパーを審査員に引き渡すために約20歩の側面護送を行う。犬に「脚側行進」または「トランスポート」の命令をすることが許されている。犬はヘルパーと指導手の中間位置で行進する。護送中、犬はヘルパーを注意して監視しなければならない。そのとき、ヘルパーを圧迫したり、飛びついたり、咬みついたりしてはいけない。審査員の前で側面護送を停止する。犬は指示なしで座る。ソフトムチを審査員に手渡し「防衛」の終了を報告する。審査員の指示により脚側行進でヘルパーから5歩離れて基本姿勢をとる。リードを付けて審査結果の講評位置へ移動する。ヘルパーは審査員の指示で退場する。

c) 評価：

重要な評価基準：「素早い力強い咬捕」、「放すまで落ち着いた深い咬捕」、「ヘルパーに近い位置での注意力のある監視」これらの不足は度合いに応じて評価が下がる。

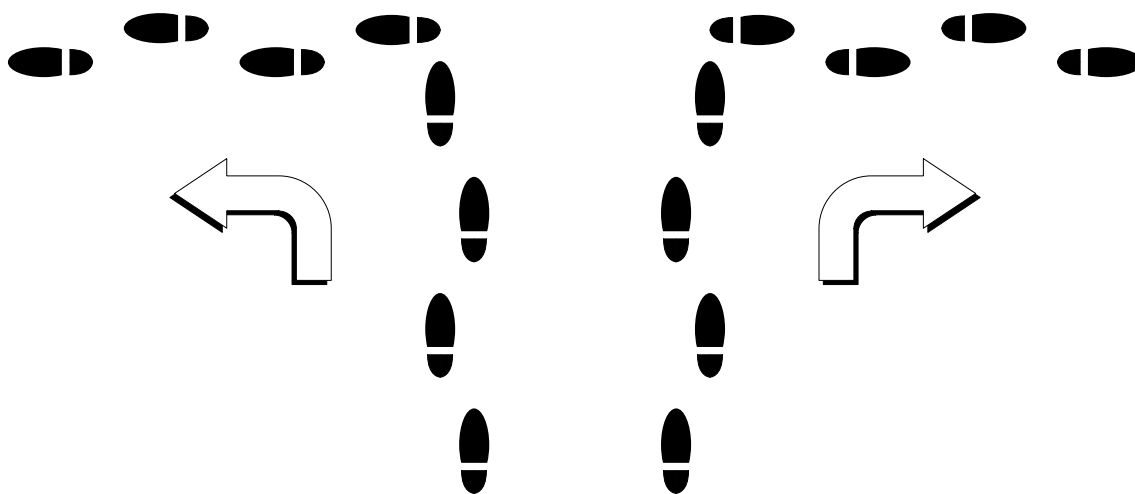
ヘルパーの負荷に耐えきれず防衛片袖を放して再び咬捕をしなかった場合「防衛」は中止される。監視状態の犬が「少し注意力に欠ける／少しヘルパーにからむ」場合は課題評価が1つ下がる。「とても注意力がない／強くヘルパーにからむ」場合は課題評価が2つ下がる。「監視をせずただヘルパーの側にいるだけ」の場合は課題評価が3つ下がる。指導手が犬のもとに行く最中に犬が指導手の方に来たら「Mangelhaft／不可」の範囲内で評価される。審査員が指導手に犬のもとに行くための指示を与える前に「ヘルパーを見放して離れる／指導手の命令によってヘルパーのもとに留まった」場合「防衛」は中止される。

“追求コーナーの印跡、

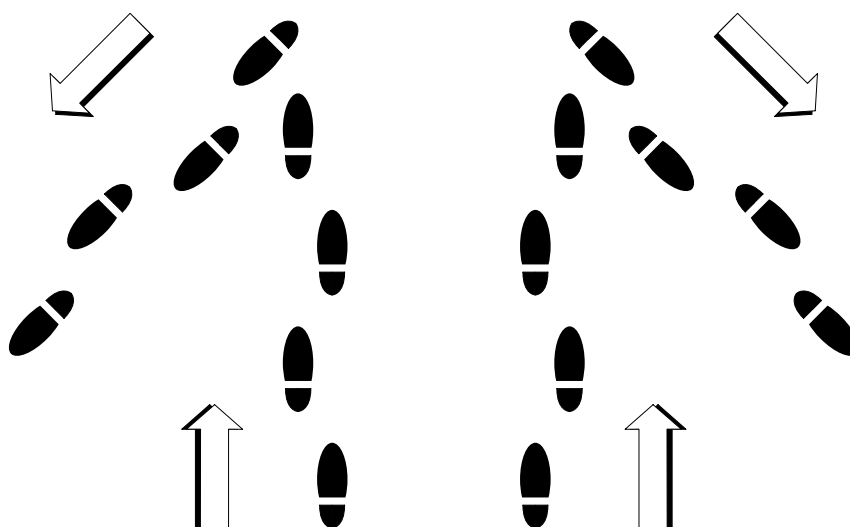
曲がる方向への第一歩目はコーナーの角部分から離れずに密着して印跡する。

印跡前に追求コースの下書（事前に立ち入って下見）をしてはならない。

直角コーナーの印跡（左折、右折）

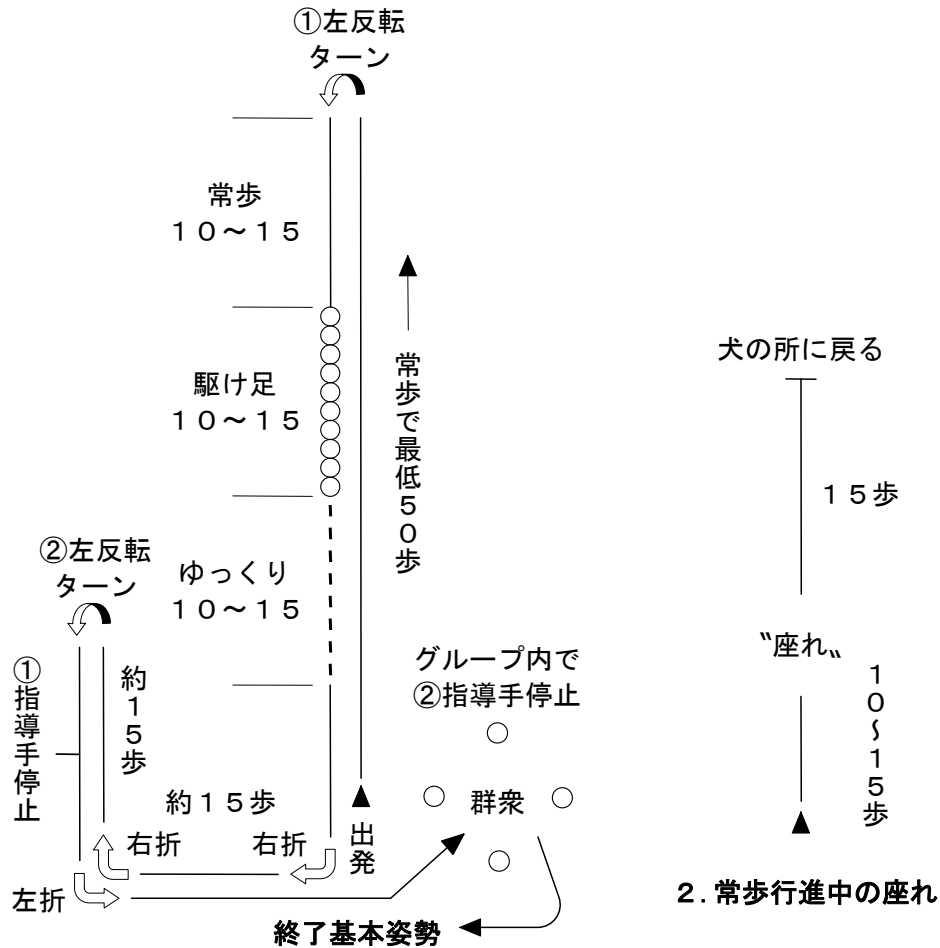


鋭角コーナーの印跡（左折、右折）



「1. 脚側行進」「2. 常歩行進中の座れ」実施要領（IPO1、2、3共通）

2012年から、すべての試験における脚側行進の実施要領は下記に統一される。

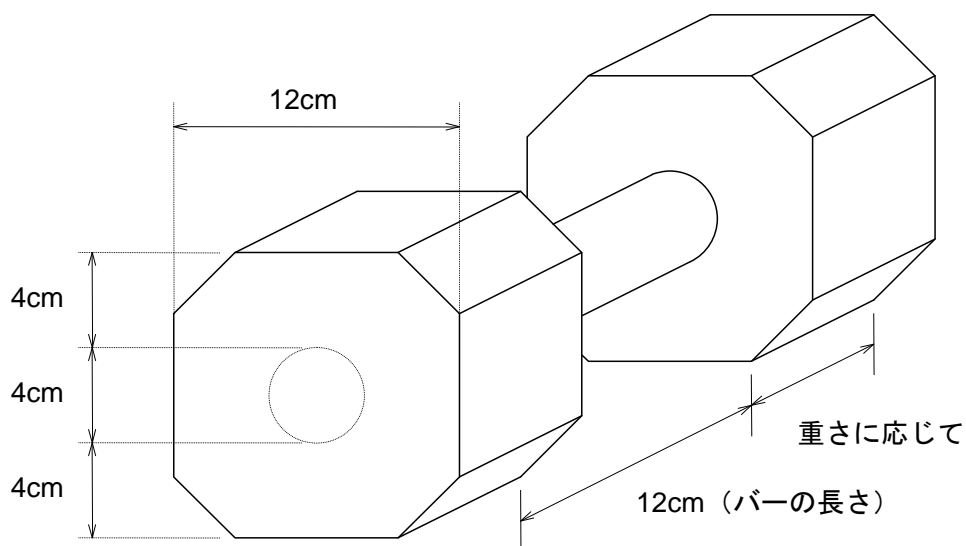


IPO1はリード付きで、IPO2とIPO3はリードなしで審査員のもとに行き、犬を座らせて服従開始の申告をする。その後、(IPO1は歩き出す前にリードを外す)脚側行進で出発地点に行き基本姿勢をとる。審査員の指示でこの課題が開始される。「真っ直ぐで」「静かで」「注意力のある」基本姿勢から「脚側行進」の命令で、犬は「注意して」、「喜んで」、「真っ直ぐに」「遅れることなく」右肩甲部と指導手の左膝が揃う位置で歩く。

『常歩50歩』→『①左反転ターン』→『常歩10～15歩』→『駆け足10～15歩』→『ゆっくり歩く10～15歩』→『常歩に戻る』→『右折』→『約15歩』→『右折』→『約15歩』→『②左反転ターン』→『①指導手停止』→『左折』→『グループ内行進』→『グループ内で②指導手停止』→『出発点付近で終了基本姿勢(③指導手停止)』

駆け足からゆっくり歩くへの切り替えは中間歩度を設けずに行う(それぞれ最低10歩)。各歩調は明確に区別された速度で行う。指導手が停止したら犬は指示なしで素早く真っ直ぐに座る。グループは最低4人で構成されており静かに動いている。指導手と犬はグループの1人に対して右回り、他の1人に対して左回りを実行し、最低1回、指導手はグループ内で停止する。審査員の指示でグループから離れて脚側行進で出発点に戻りこの課題の終了基本姿勢をとる。この終了基本姿勢を次の課題の開始基本姿勢としてもよい。

“木製ダンベル”



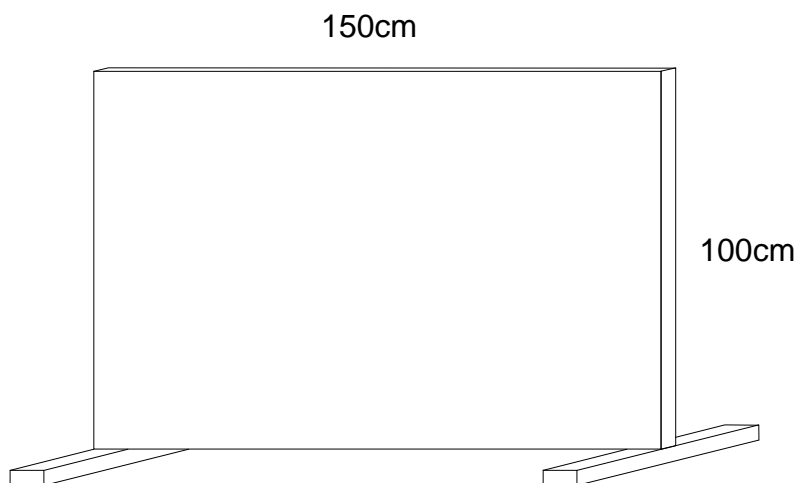
国際試験規定の寸法に基づいて描かれたダンベルの図面。重要なのは木製で重さが正しいということと、犬がくわえるバーと地面の間に4cmの空間があるということ。

持来課題では木製ダンベルだけが使用できる。主催者は全出場者のための木製ダンベルを準備しなければならない。指導手が持参した木製ダンベルは試験では使用できない。

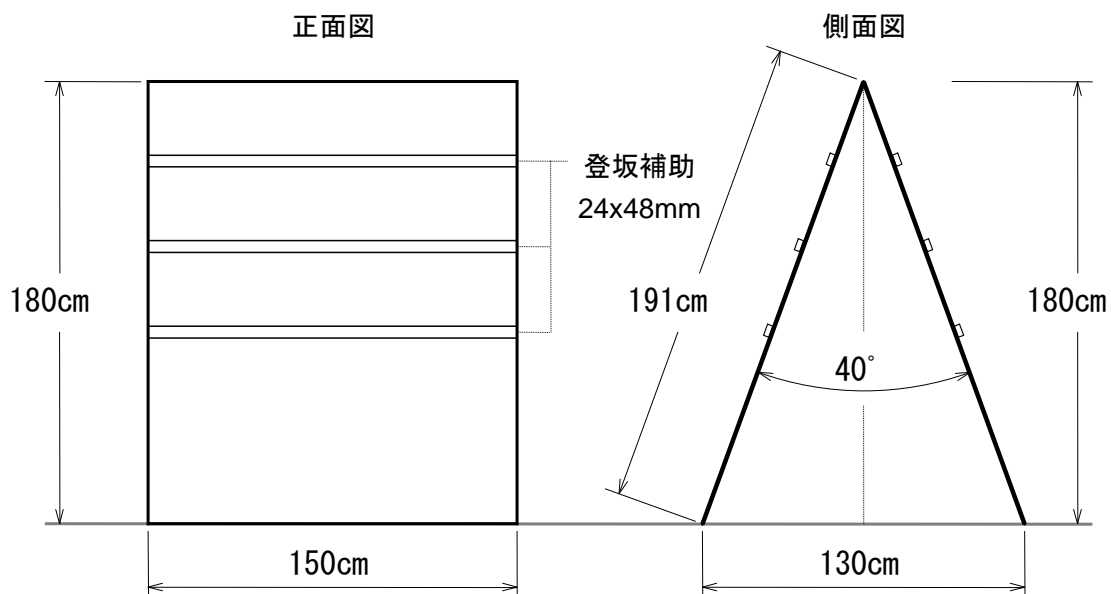
	IPO1	IPO2	IPO3
ダンベル持来	650g	1kg	2kg
1m障害とダンベル持来	650g	650g	650g
斜壁とダンベル持来	650g	650g	650g

“1m障害”

障害の高さは100cm、幅は150cm（図面参照）。
試験中に慣らし飛びをさせることはできない。

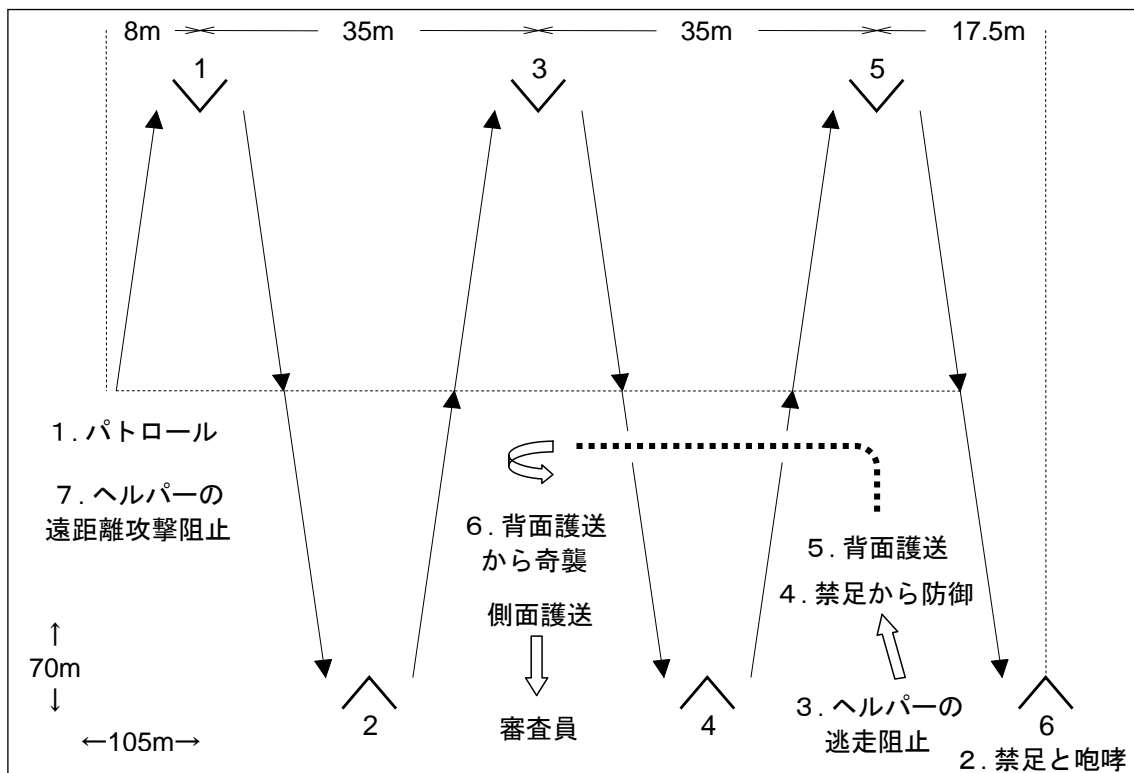


“斜壁”



斜壁は幅150cm、長さ191cmの二枚の板が上部で連結されており、40度に広げて設置したときに頂点が地面から180cmとなるように設計されている。斜壁は全体に滑り止めの加工がされていなければならない。両壁面の上半部分にはそれぞれ3本ずつ、24mm×48mmの登坂補助の角材が取り付けられている。試験では全出場犬が同じ障害・斜壁を飛越しなければならない。試験中に慣らし飛びをさせることはできない。

“防衛設営” ミラー設営も可能（備考：公式サッカー場105m×70mの場合）



国際作業犬試験規定

2011年12月30日発行

翻訳／発行 益田晴夫

〒615-0835 京都市右京区西京極堤下町30

©無断転載禁止